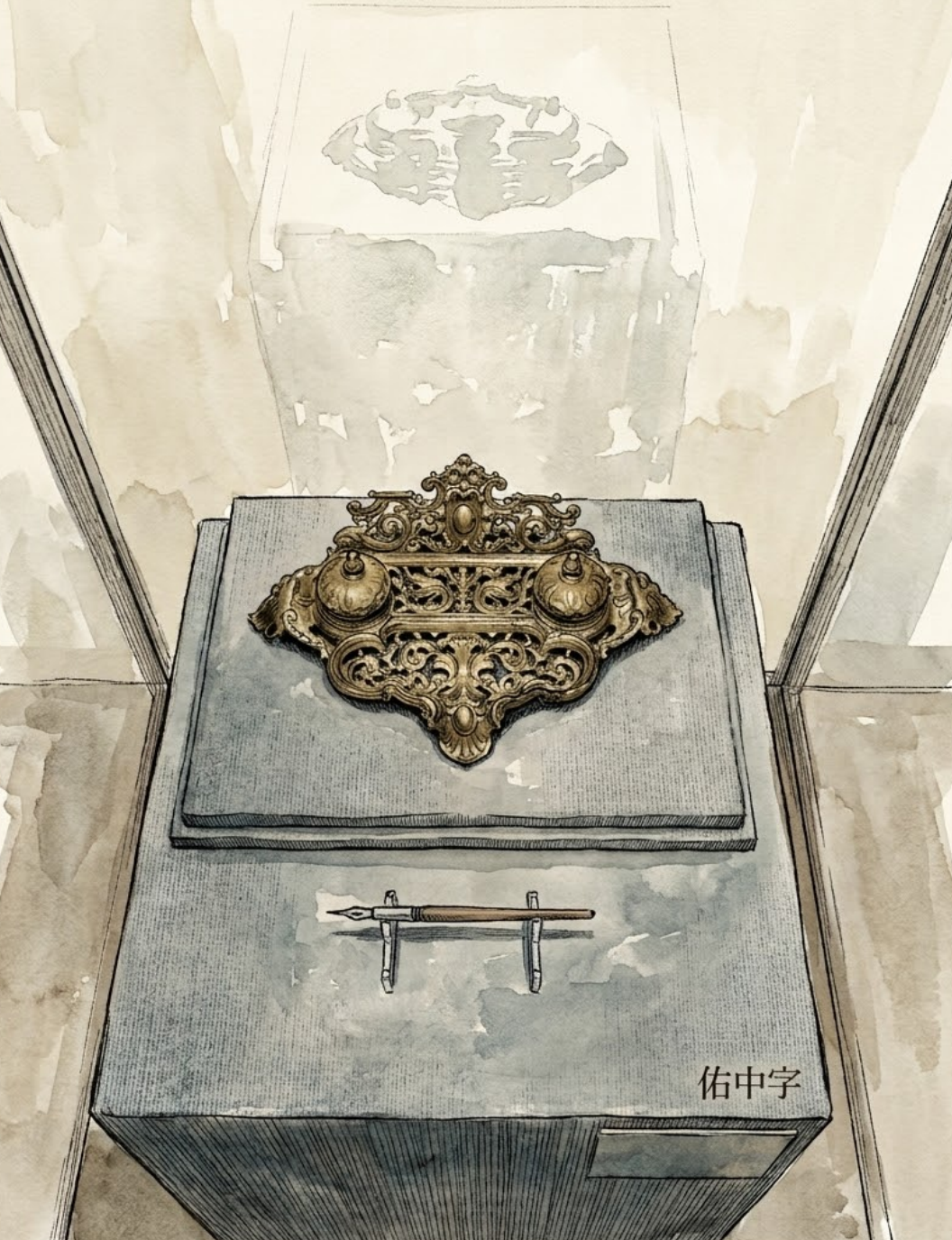
上海ドストエフスキー展の記録

2026年9月



佑中字

目録

「佑中字によるドストエフスキー関連書籍（Amazon）」
ドストエフスキーの世界
案内パンフレット

序章
エピグラフ
挿絵『カラマーゾフの兄弟』
前言
説明「幼少期・青年期（1）」
説明「幼少期・青年期（2）」
石版画『工兵宮』
石版画『軍事工科学校の低学年生 1833-1843』

第一部　始動
説明「初期の発表作品」
書籍『貧しき人々』
肖像画『ヴィッサリオン・グリゴリエヴィチ・ベリンスキー（複製）』
麻膠版画『大学生ポクロフスキーの葬儀』
麻膠版画『ヴァーリェンカとジェヴーシキン』
図版『19世紀60〜70年代の保護区地段風俗図解』
図画『プリャニシニコフ邸』
説明「『二重人格』から『白夜』へ」
版画『白夜』
版画『橋畔』
版画『幻想家とナースチェンカ』
図画『巻頭絵』
図画『シーリ邸』

第二部　流浪
説明「ペトラシェフスキー・サークルへの参加と仮処刑」
書状「有罪判決を受け、処刑を待つ犯罪者」
書状「ドストエフスキーに関する密報頁（写し）」
書状「御裁可による犯罪者処刑決議リスト（写し）」
書状「フェドロフ少佐宛て フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー秘密逮捕令第一頁（写し）」
石版画「皇帝ニコライ1世の肖像画」
図画『セミョーノフ校場』
説明「マリア・ドミトリエヴナ・イサエワとの結婚」
書籍『死の家の記録』 第1部・第2部
挿絵『最初の印象　カージン』
版画『イサイ・フォーミチ』
石版画『旧儀式派信徒』
石版画『八つの眼』
版画『浴場』
版画『苦役動物』
石版画『浴場』
石版画『眠る者』
版画『娼婦』
版画『絶望』
肖像画「ミハイル・ヴァシリエヴィチ・ブタシェヴィチ＝ペトラシェフスキー」
肖像画「セルゲイ・フョードロヴィチ・ドゥーロフ」
肖像画「アレクセイ・ニコラエヴィチ・プレシチェーエフ」
肖像画「ナタリア・ドミトリエヴナ・フォンヴィージナ」
肖像画「プラスコヴィヤ・エゴロヴナ・アンネンコヴァ」
図画「オムスクの光景・人物（1）」
図画「オムスクの光景・人物（2）」
図画「オムスクの光景・人物（3）」
図画「オムスクの光景・人物（4）」
図画「オムスクの光景・人物（5）」
図画「オムスクの光景・人物（6）」
図画「オムスクの光景・人物（7）」

図画「オムスクの光景・人物（8）」
図画「オムスクの光景・人物（9）」

第三部　起動
説明「ドストエフスキー兄弟による雑誌『時代』の創刊」
版画『アレクサンドル2世』
雑誌『時代』
雑誌『時世』
説明『虐げられし人々』
石版画『虐げられし人々』
書籍『虐げられし人々』 第1巻〜第2巻
版画『ブロノワの家にて』
版画『ネリーとイワン・ペトローヴィチ』
水彩画『虐げられし人々』
説明「混沌の生活、混沌の文学へ」

第四部　復活
説明「伴侶と遺産の継承」
収蔵品「アンナ・グリゴリエヴナのフォルダ（複製）」
図画『アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ』
書籍『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー全集』 第1巻
図画『小市民街7号』
版画『アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ』
収蔵品「アンナ・グリゴリエヴナの収支簿」
収蔵品「個人債務の為の手形（300〜400ルーブル分）」
説明『賭博者』
石版画『アレクセイ・イワノヴィチ』
麻膠版画『ポリーナが金を投げる』
麻膠版画『祖母の到着』
麻膠版画『賭局』
上演シーン「プーシキン話劇場『賭博者』」
公演ポスター『賭博者』
説明『罪と罰』
巻頭絵『罪と罰』

影絵・インスタレーション『罪と罰』
図画『罪と罰』
図画『マルメラードフ』
図画『罪と罰』
図画『アヴドーチヤ・ラスコーリニコワ』
図画『呼び鈴を引きに行く』
図画『ソーネチカとスヴィドリガイロフ』
図画『ラスコーリニコフと高利貸しの老婆』
版画『十字架と斧の間で』
版画『ソーニャへ ― ラスコーリニコフ』
石版画『罪』
石版画『罪』
書籍『罪と罰』
書籍『ドストエフスキー作品合本』
図画『中庭』
図画『階段』
図画『側影』
版画『スヴィドリガイロフがラスコーリニコフのもとに』
版画『ラスコーリニコフがソーニャのもとに』
図画『悔悛するラスコーリニコフ』
原稿『罪と罰』（複製）

第五部　熟成
説明『白痴』
書籍『白痴』
石版画『ナスタシヤ・フィリポヴナ』
自画自印石版画『ムイシュキン公爵』
石版画『競売』
ボリス・エイフマンのバレエ『白痴』
版画『ムイシュキン公爵とナスタシヤ・フィリポヴナ』
麻膠版画『ロゴージンとムイシュキン公爵』
版画『ムイシュキン公爵とロゴージン』
図画『死者の寝台のそばで』
原稿『白痴』（複製）

説明『悪霊』
書籍『悪霊』 第1巻
モノプリント版画『カルマジノフ』
モノタイプ版画『キリーロフの死』
モノタイプ版画『スチェパン・トロフィモヴィチの死』
版画『スタヴローギンと苦役囚フェジカ』
版画『文学的カドリーユ』
版画『スタヴローギンと足が不自由な女』
版画『ワルワーラ・ペトロヴナとダーシャ』
モノタイプ版画『レビャドキナ』
モノタイプ版画『スタヴローギン』
原稿『悪霊』（複製）
説明『未成年』
書籍『未成年』
図画『街を駆け抜けるアルカージイ』
図画『意識を失ったカテリーナ・ニコラエヴナ』
石版画『飛翔』
原稿『未成年』（複製）
説明『作家の日記』
書籍『作家の日記（1877年）』
書籍『作家の日記（1880年）』
版画『やさしい女』
版画『やさしい女』
版画『やさしい女』
版画『農夫マレイ』
石版画『水滴』
石版画『夜』
石版画『出会い』
石版画『キリストのヨルカに召された少年』

第六部　集大成
説明『カラマーゾフの兄弟』
アリョーシャ・カラマーゾフの彫刻
書籍『カラマーゾフの兄弟』 第1巻

麻膠版画『カラマーゾフの兄弟』
図画『対話』
図画『カラマーゾフ一家』
図画『ゾシマ長老』
図画『ゾシマ長老と修道士見習いアレクセイ・カラマーゾフ』
版画『宗教大法官』（三連作）

第七部　永遠
説明「ドストエフスキーの逝去」
収蔵品「ドストエフスキーのペンとインクセット」
版画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』
装飾板『ドストエフスキー』
自画自印石版画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』
彫刻「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー像」
彫刻「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー」
収蔵品「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーの帽子」
図画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』
収蔵品「身の回りの品々」
書籍『我が人生の太陽フョードル・ドストエフスキー：1846-1917 回顧録』
書籍『我が父フョードル・ドストエフスキー』
自画自印石版画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』
模型「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー遺顔面型」
写真肖像「本人と親族」
居所「技術者（工兵）の家」
居所「ウラジーミル通り11番地」
居所「プレハーノフ通り2番地」
居所「ヴァシリエフスキー島大通り4番地」
居所「マヨロフ通り8番地」
居所「パリビン邸」
居所「カズナチェイスカヤ通り1番地」
居所「カズナチェイスカヤ通り9番地」
居所「カズナチェイスカヤ通り7番地」
居所「マヨロフ大通り29番地」

居所「リムスキー＝コルサコフ大通り3番地」
居所「リゴフスキー大通り25番地」
居所「グレチェスキー大通り6番地」
居所「クズネチヌイ通り5番地」
図画「上演ポスター（1）」
図画「上演ポスター（2）」
図画「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー」
奥付

◈ 補足事項について

本書では、展示キャプションの情報を基本とし、内容の理解を助けるため、必要に応じて最小限の補足説明を加えています。補足箇所については、展示内容の趣旨を損なわないよう留意しました。

◈ ロシア語固有名詞のカタカナ表記について

本書の人名・地名等は、主として展示の中国語表記をもとに日本語へ置き換えています。ロシア語の音をカタカナで表記する際には複数の慣用や転写方法があるため、一般的な表記と一部異なる場合や、表記に揺れが見られる場合があります。

◈ 人工知能の使用について

本書の編集・翻訳・文章整理には、ChatGPT、DeepSeek等の人工知能を補助的に使用しています。内容の確認、採否、最終的な表現の決定はすべて著者が行い、本書の内容に関する最終的な責任は佑中字に帰属します。









「佑中字によるドストエフスキー関連書籍（Amazon）」

1 凡人と超人、愛情と同情、罪と罰〈第一巻〉
2 凡人と超人、愛情と同情、罪と罰〈第二巻〉
3 凡人と超人、愛情と同情、罪と罰〈第三巻〉
4 一分の永遠～ドストエフスキー伝～

2026年9月、上海――

私は再び、ドストエフスキー展を訪れた。会期終了まで、あと一週間ほど。貴重な展示の数々を目にできる時間も、残りわずかとなっていた。

会場は、中国近現代新聞博物館の5階。上海中心部からやや北東に位置し、最寄り駅は地下鉄12号線の隆昌路（ロンチャンルー）駅である。入場は無料。1階から4階にも、中国近現代のメディア史をたどる充実した資料が並んでいる。

やがて消えてゆく展示の記憶を、少しでも留めておくために。
ここに、その記録を残そう。



本を読むのをやめることは、考えるのをやめることだ。

案内パンフレット



1. 展示会基本情報（会期・会場）
- 会期：2026年6月23日（火）～ 9月13日（日）
- 会場：上海市楊浦区周家嘴路3678号
  中国近現代新聞出版博物館 5階 臨時展示ホール
- 開館時間：火曜～日曜 9:00～17:00（入館は16:00まで）
  ※月曜休館（法定祝日を除く）
- 問い合わせ電話：021-65665258

2. 展示会公式紹介文

本展は 「ドストエフスキーの世界――読むことをやめることは、考えることをやめること」 と題し、ドストエフスキーの生涯と創作、そして

彼の描いた人物たちの多様性・矛盾・悲劇性を余すところなく紹介します。

作家がそれぞれの人生・創作段階で見せた姿――初期の鋭い才気、苦役時代の試練、創作への艱難、家族との別れの悲しみ、結婚生活の幸福、そして同時代人から受けた高い評価――を通して、その全体像を浮かび上がらせます。

ロシアのフョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー文学記念博物館が今回もたらした展示品は、作家の書籍・原稿・資料・肖像画のほか、有名芸術家たちがドストエフスキー作品をもとに描いた油絵や挿絵を網羅しています。

特に貴重なのは、同博物館とロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（プーシキン・ハウス）文学博物館が所蔵する作家の私物、すなわち煙草入れ・帽子・薬瓶・インクセット、そして『カラマーゾフの兄弟』の執筆に使われたペン先です。

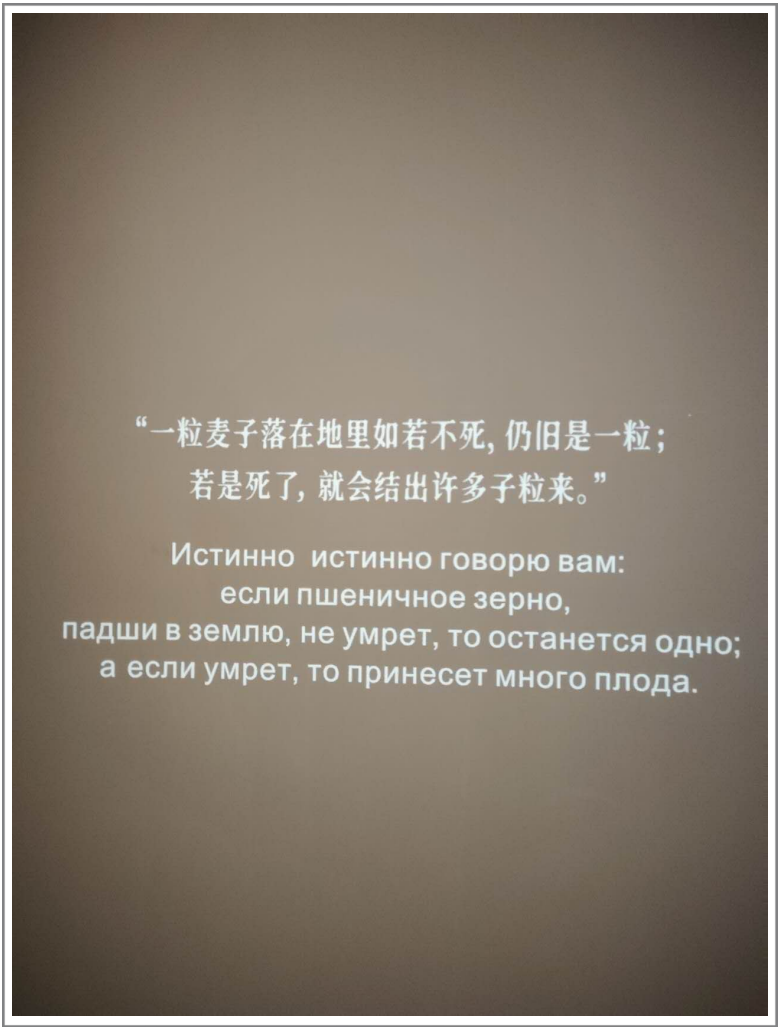
これらの実物資料を、書籍や手紙の複製、肖像画とともに展示することで、来場者を作家の創作世界と私的な生活空間へといざない、ドストエフスキーの文学世界を目の当たりにすることができます。

3. 主な展示品・関連項目（キャプションより）
- 『罪と罰』原稿（1970年代の複製）
- 陀思妥耶夫斯基（ドストエフスキー）の遺顔面型（19世紀の石膏鋳型からの複製）
- 『カラマーゾフの兄弟』を書くのに使われたペン先
- 1860年代のインクセット（フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー所用）
- 『作家の日記』（1877年）
- 『悪霊』挿絵シリーズ（1934年）
- 『工兵宮』（19世紀半ば、おそらく「ミハイロフスキー城」のこと）
- チュチノフ少佐宛の秘密逮捕令（1849年原件からの複製）
- ドストエフスキー兄弟が創刊した雑誌『時代』（1862年）および『時世』（1864年）
- プーシキン劇場における『賭博者』の舞台風景（1956〜1976年）

序章



エピグラフ



「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それは一粒のままである。しかし、死ねば、多くの実を結ぶ。」

※新約聖書・ヨハネによる福音書 12章24節の一節。ドストエフスキーの遺作であり集大成と呼ぶべき大作『カラマーゾフの兄弟』のエピグラフ（巻頭句）として用いられた。

挿絵『カラマーゾフの兄弟』



作者：ミハイル・アブラモヴィチ・ベチコフ
制作年：2020年
制作地：ロシア、サンクトペテルブルク
※右から長男ミハイル、次男イワン、三男アリョーシャ。

前言



本展は「ドストエフスキーの世界――読むことをやめることは、考えることをやめること」と題し、ドストエフスキーの生涯と創作、そして彼の描いた人物たちの多様性・矛盾性・悲劇性を余すところなく紹介することを目指しています。

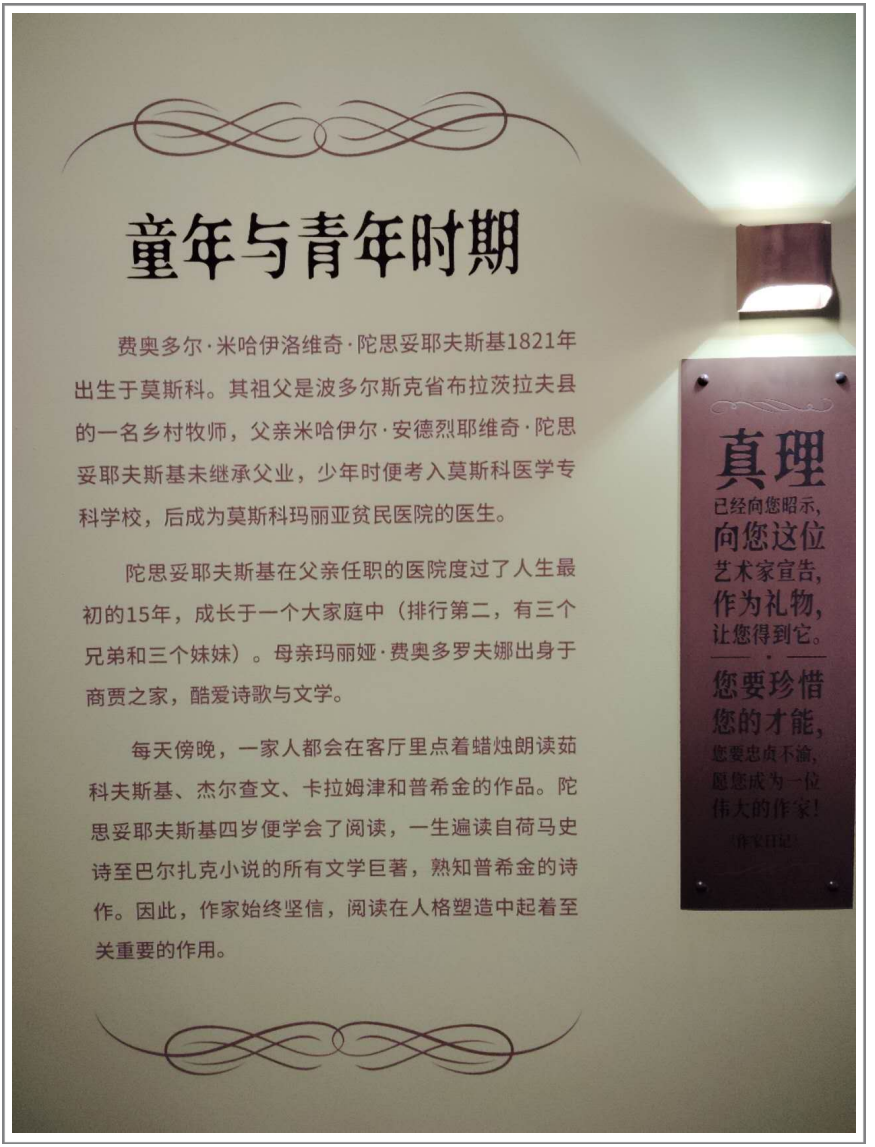
作家がそれぞれの人生・創作段階で見せた姿――初期の鋭い才気、苦役時代の試練、創作への艱難、家族との別れの悲しみ、結婚生活の幸福、そして同時代人から受けた高い評価――を通して、その全体像を浮かび上がらせます。

ロシアのフェオドル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー文学記念博物館が今回もたらした展示品は、作家の書籍・原稿・資料・肖像画のほか、有名芸術家たちがドストエフスキー作品をもとに描いた油絵や挿絵を網羅しています。

特に貴重なのは、同博物館とロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（プーシキン・ハウス）文学博物館が所蔵する作家の私物、すなわち煙草入れ・帽子・薬瓶・インクセット、そして『カラマーゾフの兄弟』の執筆に使われたペン先です。

これらの実物資料を、書籍や手紙の複製、肖像画とともに展示することで、来場者を作家の創作世界と私的な生活空間へといざない、ドストエフスキーの文学世界を目の当たりにすることができます。

説明「幼少期・青年期（1）」



フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーは1821年、モスクワに生まれました。祖父はポドリスク県ブラツラフ郡の農村司祭でしたが、父ミハイル・アンドレエヴィチ・ドストエフスキーはその道を継が

ず、少年時代にモスクワ医科専門学校に入学し、後にモスクワ・マリア貧民病院の医師となりました。

ドストエフスキーは父が勤めるこの病院で人生最初の15年間を過ごし、大家族（3人の兄と3人の妹を持つ、次男）の中で育ちました。母マリヤ・フョードロヴナは商家の出身で、詩と文学を愛していました。

毎晩、家族は居間に集まり、ロウソクの灯りでジュコーフスキー、デルジャーヴィン、カラムジン、プーシキンの作品を朗読しました。ドストエフスキーは4歳で読書を覚え、生涯にわたってホメロスの叙事詩からバルザックの小説に至るまで、あらゆる文学の名作を読み尽くし、プーシキンの詩作にも親しみました。そのため作家は終生、読書が人格形成において極めて重要な役割を果たすと確信していました。

説明「幼少期・青年期（2）」



※左下の本はドストエフスキーが青年時代に熱心に読んでいたプーシキンの文集（1855年）。右はプーシキン青銅像（1975年）。

1837年2月、母マリヤ・フョードロヴナが病のため37歳でこの世を去りました。母の死は、家族の温かい時代の終わりを告げるだけでなく、ドストエフスキーの幼年期そのものの終わりを意味していました。

父ミハイル・アンドレエヴィチは7人の子供を一人で育てることになり、二人の長男に将来の衣食を保障するため、彼らをサンクトペテルブルクで最も名高い軍事工科学校に入学させました。ドストエフスキーはそこで確かな教育を受けました。1839年、彼は家書から父の突然の訃報を知りました。

1843年8月、ドストエフスキーは少尉の階級で無事卒業し、サンクトペテルブルク工兵部隊の徴兵事務所に配属されました。しかし在学中からすでにその志は文学にありました。そのため、たった1年足らずの勤務期間を経て、衣食を保証してくれる体面ある技術者としての道を捨て、内なる呼び声に従って作家となる決意を固めたのです。

※本展覧会では詳細な言及はなかったが、ドストエフスキーの父ミハイルには、自身が所有する農村で恨みを抱いた農奴たちにより惨殺されたという噂が流れている。ドストエフスキー自身もこの事件に強い衝撃を受けたとされ、その後も彼の作品には「死」と「父親」が結びつくモチーフが繰り返し登場することになる。

石版画『工兵宮』



画稿作者：アドルフ・ヨシフォヴィチ・シャルルマン
石版印刷技師：ルイ・ジュリアン・ジャコテ（ジャン＝ルイ）
および ジョゼフ・ガブリエル・オブラン
制作年代：19世紀半ば

※この建物内に軍事工科学校があり、ドストエフスキーが学んでいた。

石版画『軍事工科学校の低学年生 1833-1843』



作者：アレクサンドル・ヴァシリエヴィチ・ヴィスコヴァトフ、
カール・アウグストヴィチ・ルメルシエ
制作年：1899年
※ドストエフスキー本人ではなく、当時の学生を再現した石版画

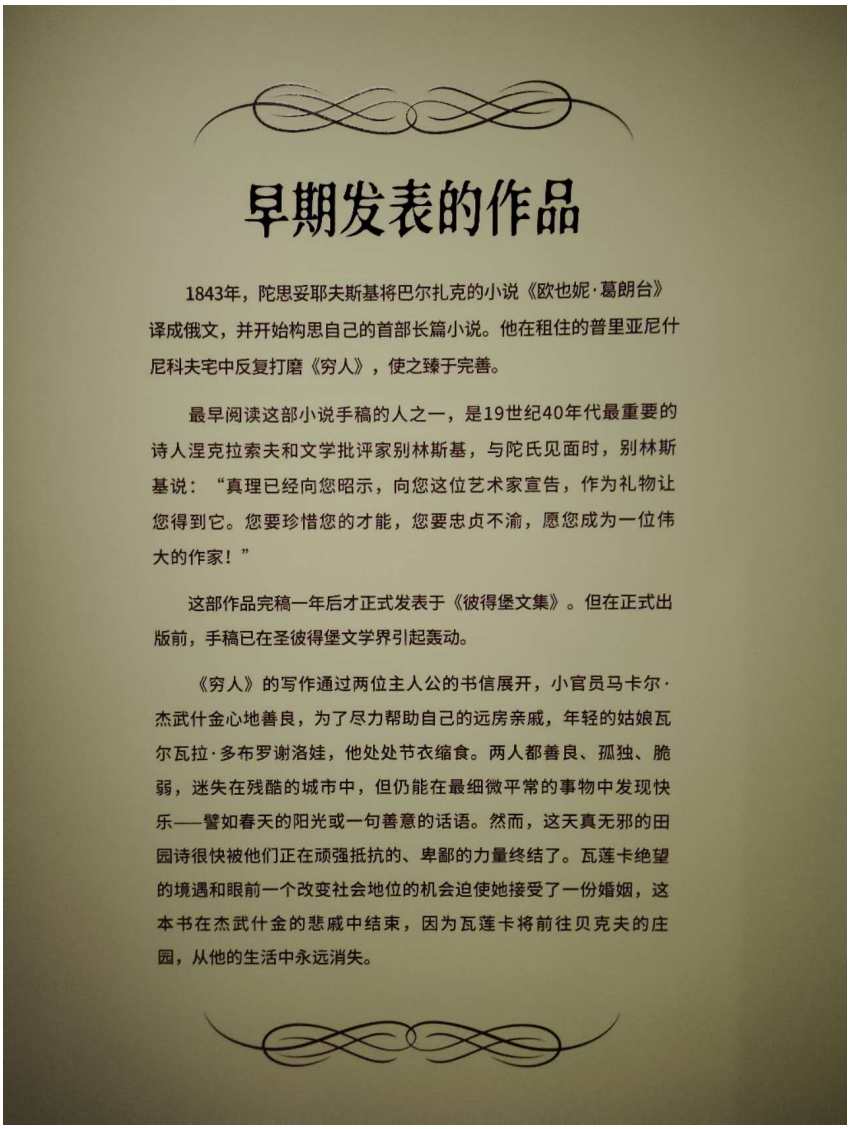
第一部　始動

工兵学校を卒業しエリート技術官僚の道を進むもわずか1年で退官、処女作『貧しき人々』で作家として華々しくデビューしたが、農奴制への反対からペトラシェフスキー・サークルに参加したことで運命が暗転する。

1849年、反政府活動の疑いで逮捕され、約8カ月の獄中生活の末に銃殺刑を宣告されるが、処刑の瞬間に皇帝からの恩赦が届くという「模擬処刑」という残酷な演出を体験する。

一命を取り留めたものの、その代償として4年間のシベリア流刑を言い渡され、この「死と隣り合わせの恐怖」と「極限の再生」の経験が、後の偉大な文学作品に息づく深い人間洞察の原点となった。

説明「初期の発表作品」



1843年、ドストエフスキーはバルザックの小説『ウジェニー・グランデ』をロシア語に翻訳し、自身の最初の長編小説の構想を始めました。彼は下宿していたプリャニシニコフ邸で『貧しき人々』を繰り返し推敲し、完成へと磨き上げました。

この小説の原稿を最初に読んだ一人が、1840年代を代表する詩人ネクラーソフと文芸批評家ベリンスキーでした。ドストエフスキーに面会した際、ベリンスキーはこう言いました。

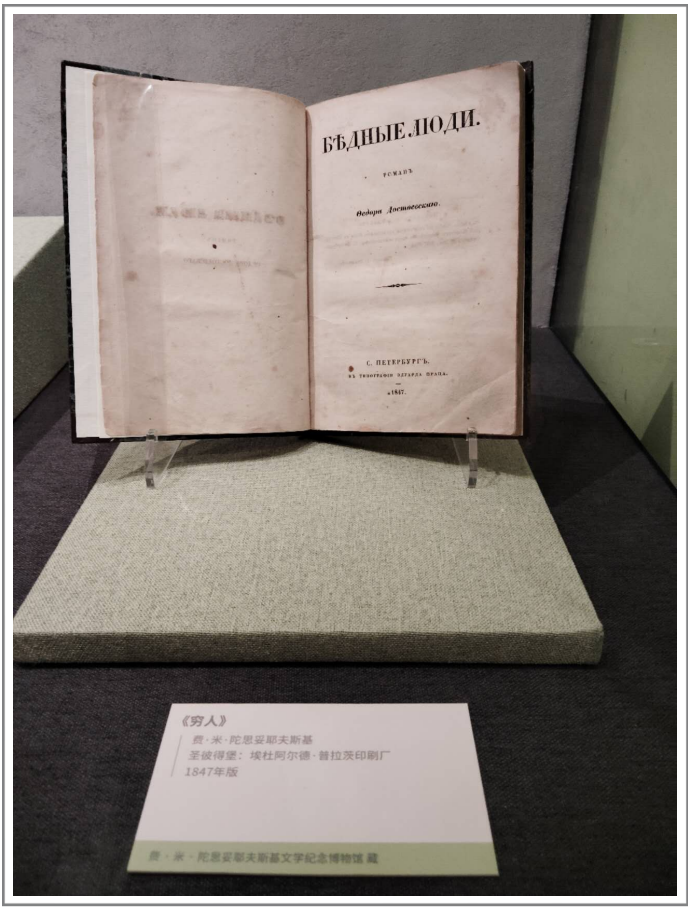
「真理はすでにあなたに示され、芸術家であるあなたに宣告されたのです。贈り物として、あなたはそれを手にしたのです。あなたの才能を大切にし、忠実でありなさい。どうかあなたが偉大な作家となりますように！」

この作品は完成から1年後に『ペテルブルク文集』で正式に発表されました。しかし正式出版に先立ち、原稿はすでにサンクトペテルブルクの文学界で大きな話題を呼んでいました。

『貧しき人々』は二人の主人公の書簡を通じて展開します。下級官吏マカール・ジェヴーシキンは心優しく、遠縁の若い娘ヴァルヴァーラ・ドブロセーロワを助けようと、あらゆる面で自分を切り詰めます。二人とも善良で孤独で弱く、残酷な都会の中で迷いながらも、春の日差しや優しい言葉といった、最もささやかで日常的なものの中に喜びを見出します。

しかし、この無邪気な牧歌は、彼らが必死に抵抗している卑劣な力によってやがて終わりを告げます。ヴァルヴァーラ（ヴァーリェンカ）の絶望的な境遇と、社会的身分を変えるチャンスが目前に迫ったことで、彼女はある結婚を受け入れることを余儀なくされます。そして小説は、ヴァーリェンカがベーコフの領地へと旅立ち、ジェヴーシキンの人生から永遠に姿を消すという彼の悲しみのうちに幕を閉じます。

書籍『貧しき人々』



出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：エドゥアルド・プラッツ印刷所
出版年：1847年版

※『貧しき人々』はドストエフスキーの処女作であり、1846年に発表されて一躍注目を集めた。こちらはその翌年（1847年）に刊行された版本で、作家の初期の成功を物語る資料である。ただし、次回作の『二重人格』の心理解剖が当時の読者には受けず、彼は多くの支持者を失うことになる。

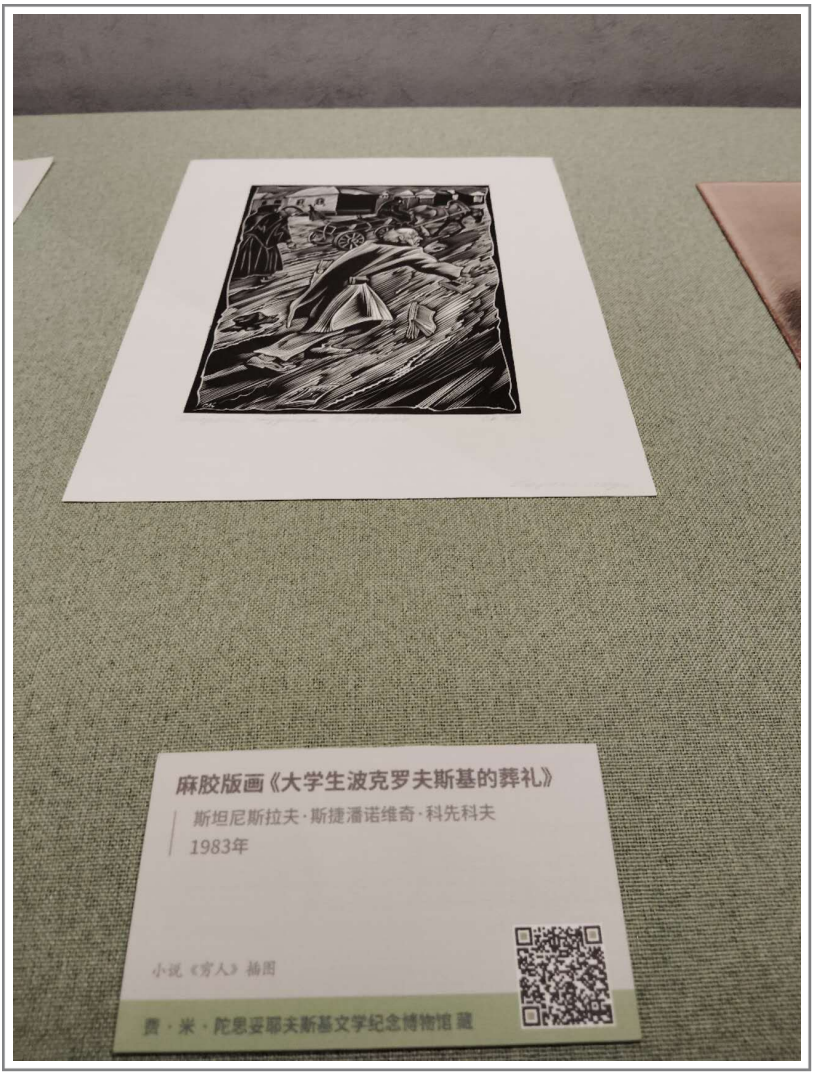
肖像画『ヴィッサリオン・グリゴリエヴィチ・ベリンスキー（複製）』



制作：イヴァン・アレクセーエヴィチ・アスタフィエフの原作に基づく複製
制作年：1880年～1919年

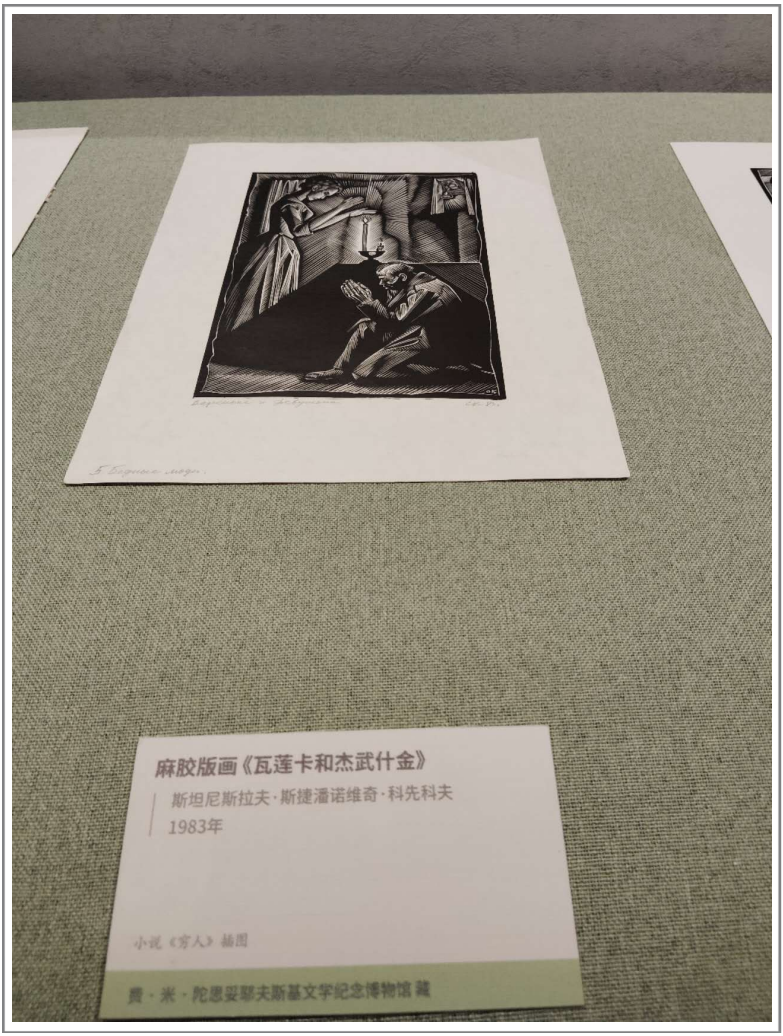
※ベリンスキーは、19世紀ロシアを代表する文芸批評家で、ドストエフスキーの処女作『貧しき人々』を絶賛したことで知られている。

麻膠版画『大学生ポクロフスキーの葬儀』



作者：スタニスラフ・ステパノヴィチ・コセンコフ
制作年：1983年
作品：小説『貧しき人々』挿絵
※ポクロフスキーは『貧しき人々』に登場する人物で、貧しい青年学生だ。彼の葬儀の場面は、作品の中でも特に哀切を帯びたエピソードとして知られている。

麻膠版画『ヴァーリェンカとジェヴーシキン』



作者：スタニスラフ・ステパノヴィチ・コセンコフ
制作年：1981年
作品：小説『貧しき人々』挿絵
※ヴァーリェンカ（ヴァルヴァーラ）とジェヴーシキン（マカール・ジェヴーシキン）は、『貧しき人々』の二人の主人公である。手紙のやり取りを通じて心を通わせる彼らの姿が、この麻膠版画（リノカット）で描かれている。

図版『19世紀60〜70年代の保護区地段風俗図解』



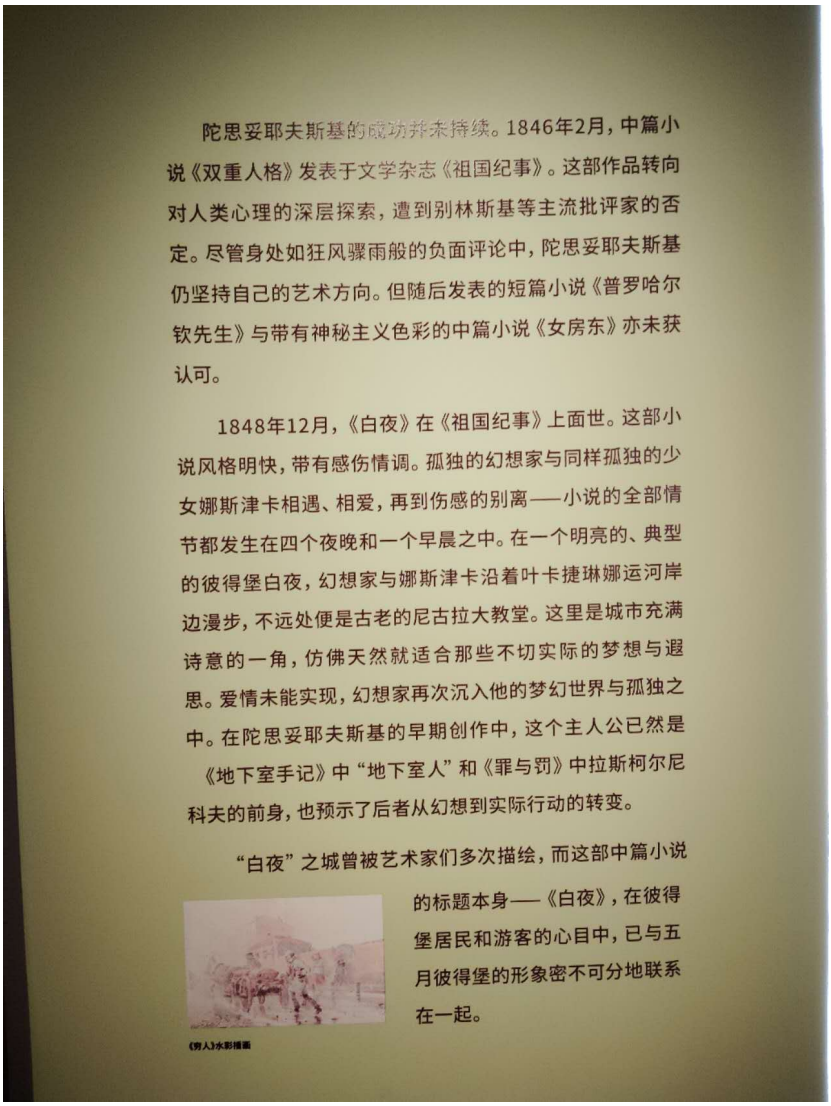
作者：ボリス・コスティゴフ

図画『プリャニシニコフ邸』



作者：ユーリ・アレクサンドロヴィチ・ポポフスキー
制作年：1972年
※プリャニシニコフ邸は、ドストエフスキーがサンクトペテルブルクで下宿していた建物で、処女作『貧しき人々』を執筆した場所として知られている。作家にとってゆかりの深いこの建物を描いた作品である。

説明「『二重人格』から『白夜』へ」



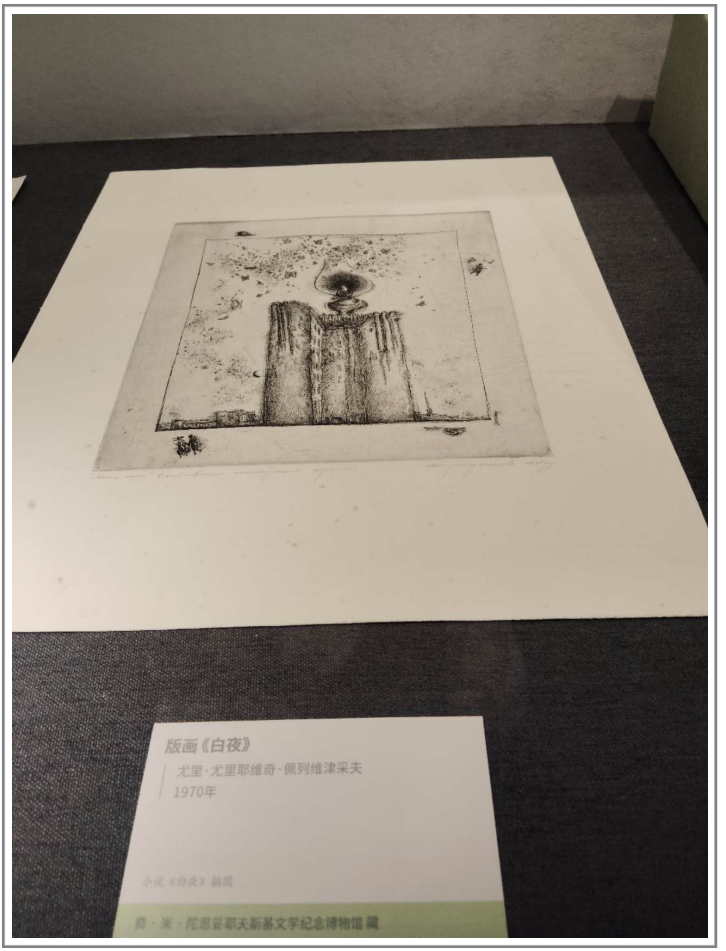
ドストエフスキーの成功は長く続きませんでした。1846年2月、中編小説『二重人格』が文学雑誌『祖国紀事』に発表されました。この作品は人間の心理を深く探求する方向へと転じたものでしたが、ベリンスキーをはじめとする主流の批評家たちから否定されました。否定的な評価の嵐にさらされながらも、ドストエフスキーは自身の芸術的方向性を

貫きました。しかし、続いて発表された短編小説『プロハルチン氏』や、神秘主義的な色彩を帯びた中編小説『女家主』もまた、認められることはありませんでした。

1848年12月、『白夜』が『祖国紀事』に掲載されました。この小説は明るい作風で、感傷的な調べを帯びています。孤独な幻想家と、同じく孤独な少女ナースチェンカが出会い、恋に落ち、そして切ない別れを迎える――小説のすべての出来事は、たった四つの夜と一つの朝のうちに展開されます。ある明るい、典型的なペテルブルクの白夜、幻想家はナースチェンカとエカテリーナ運河の岸辺を散歩し、そのすぐ近くには古いニコライ大聖堂が見えました。そこはこの街でも特に詩的な一角で、現実離れした夢想や瞑想にぴったりの場所です。恋愛は実らず、幻想家は再び自身の夢の世界と孤独の中へと沈み込んでいきます。ドストエフスキーの初期創作において、この主人公はすでに、『地下室の手記』の「地下室的人間」や『罪と罰』のラスコーリニコフの前触れであり、後に幻想から実際の行動へと移行する彼らを予告する存在でもありました。

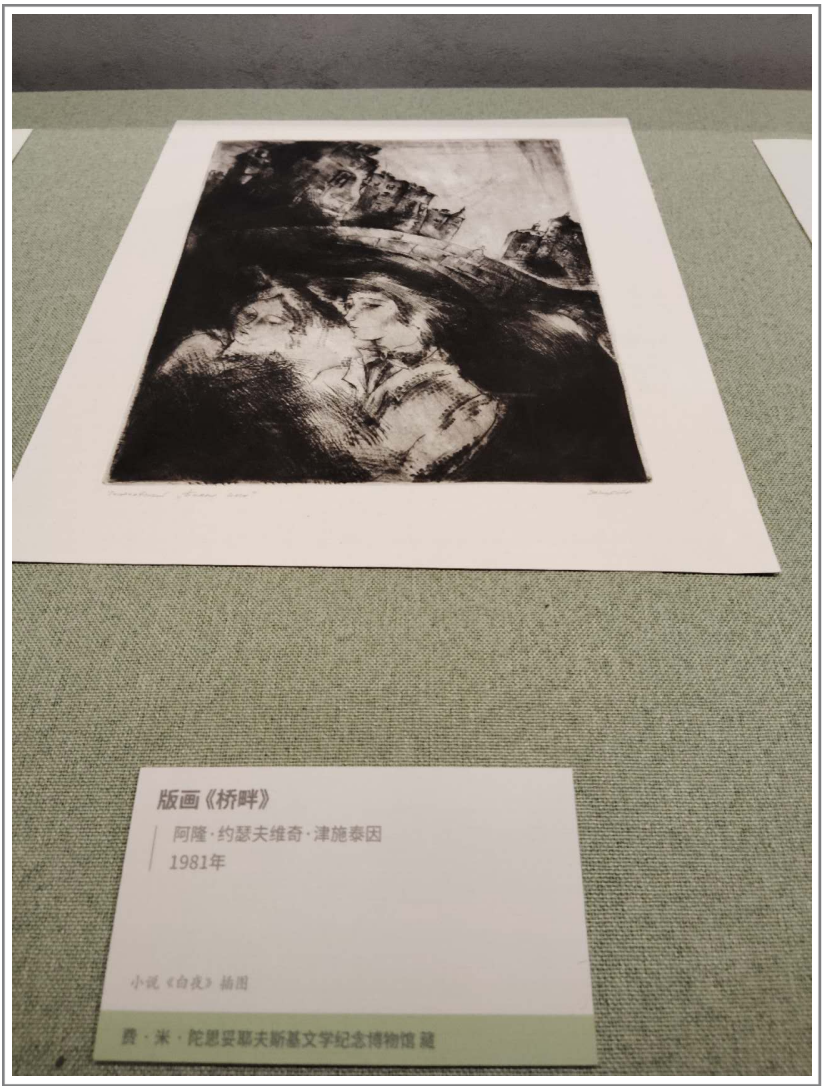
「白夜」の街は多くの芸術家によって描かれてきましたが、この中編小説のタイトルそのもの――『白夜』は、ペテルブルクの住民や観光客の心の中で、5月のペテルブルクのイメージと切っても切れないほどに結びついています。

版画『白夜』



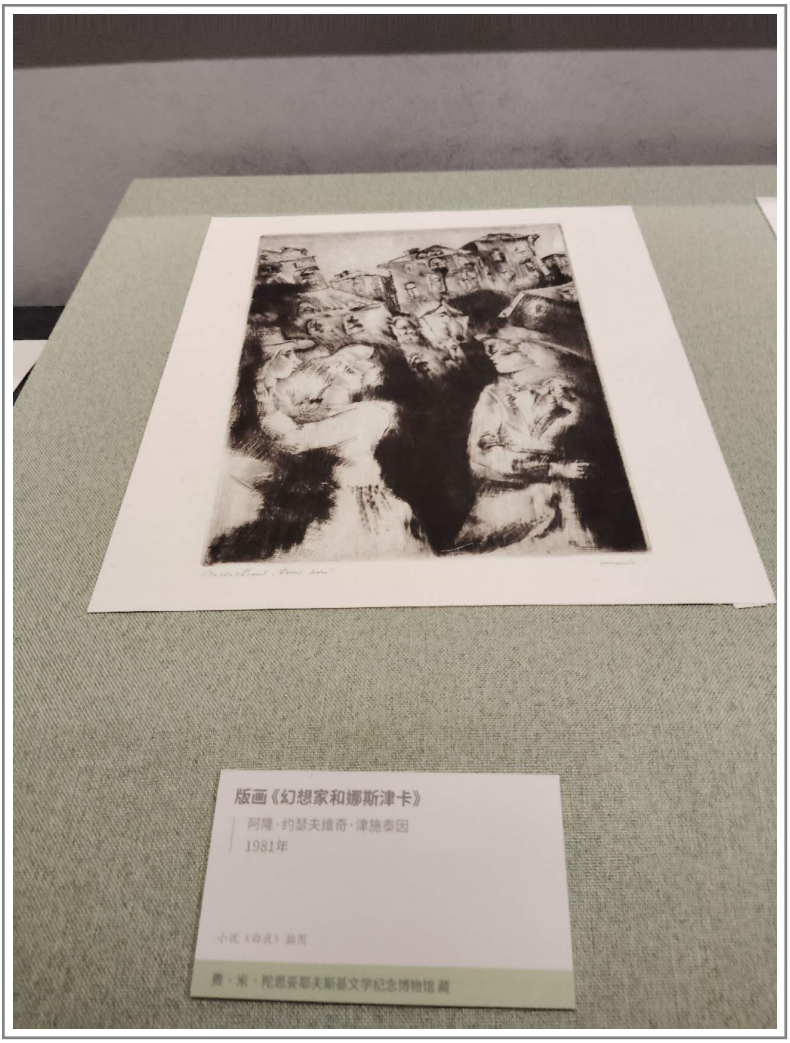
作者：ユーリ・ユーリエヴィチ・ペレヴィジンツェフ
制作年：1970年
作品：小説『白夜』挿絵
※『白夜』は、ドストエフスキーの初期の代表作で、ペテルブルクの白夜を舞台にした切ない恋物語である。ペレヴェゼンツェフはソ連・ロシアを代表する高名なグラフィックアーティストであり、本の挿絵や版画の大家として知られている。描かれているのは「街灯（ランプ）」と「サンクトペテルブルクの建物・運河」で、「孤独な若者（夢想家）」の心の中の景色を象徴的に表現している。

版画『橋畔』



作者：アロン・ヨシフォヴィチ・ジンシュテイン
制作年：1981年
作品：小説『白夜』挿絵
※同じく『白夜』の関連作品。橋は物語の重要な場面の一つとして登場する。

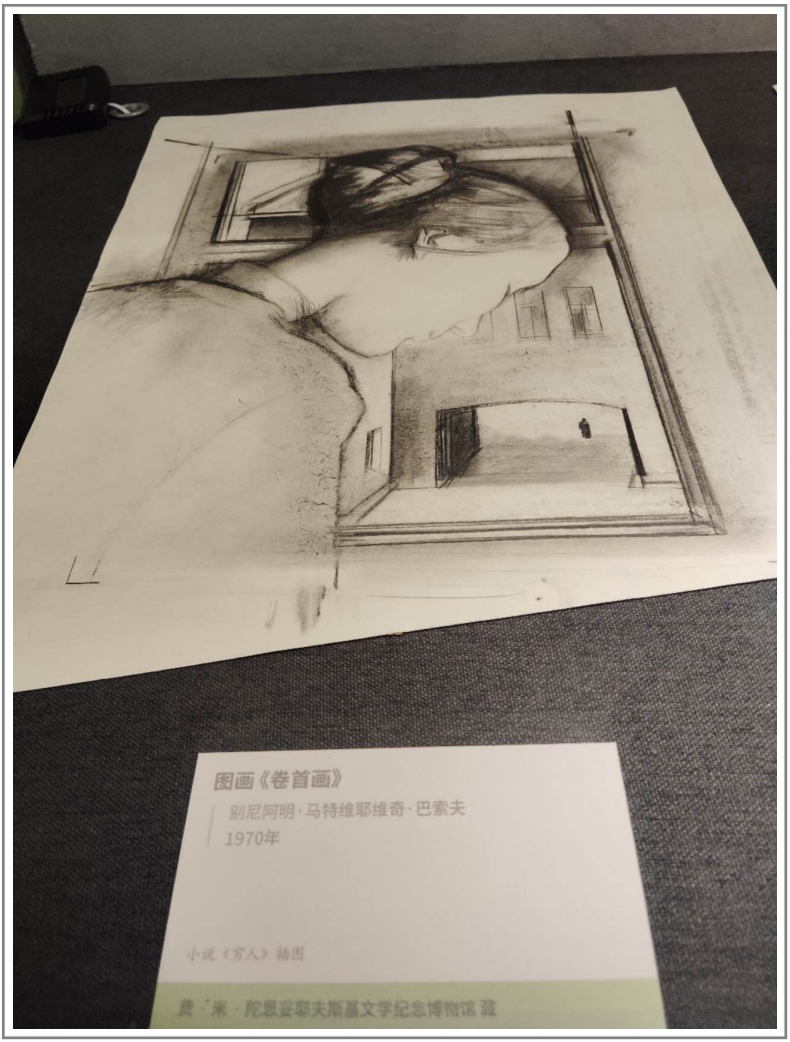
版画『幻想家とナースチェンカ』



作者：アロン・ヨシフォヴィチ・ツィンシュタイン
制作年：1981年
作品：小説『白夜』挿絵

※『白夜』の主人公である「幻想家」（語り手）と、ヒロインの「ナースチェンカ」（ナースチャ）が描かれている。二人が出会い、束の間の交流を紡ぐ、幻想的で哀愁漂う作品の雰囲気がよく伝わる挿絵である。

図画『巻頭絵』



作者：ベニアミン・マトヴェエヴィチ・バソフ
制作年：1970年
作品：小説『貧しき人々』挿絵

※「巻頭絵」とは、書籍の扉絵や章頭に配される装飾的な挿絵のこと。バソフはソ連時代に多くのロシア古典文学の挿絵を手がけた画家で、本作は『貧しき人々』の世界観を象徴的に描いた作品と考えられる。

図画『シーリ邸』



シリーズ：『ドストエフスキーのペテルブルク』シリーズより
作者：ボリス・ゲンナジエヴィチ・コスティゴフ
制作年：1993年
解説：ドストエフスキーは1847年からこの邸宅に居住し、中編小説『白夜』を執筆しました。また、1849年にはこの邸内で逮捕されました。

※当時、ドストエフスキーは、社会主義思想を語り合う、ペトラシェフスキー主催のサークルに参加していた。帝政ロシアはこれを反逆行為とみなし、関係者全員を政治犯として逮捕した。

第二部　流浪

1849年、反政府活動の疑いで逮捕され、約8カ月の獄中生活の末に銃殺刑を宣告されるが、処刑の瞬間に皇帝からの恩赦が届くという「模擬処刑」という残酷な演出を体験する。

一命を取り留めたものの、その代償として4年間のシベリア流刑を言い渡され、この「死と隣り合わせの恐怖」と「極限の再生」の経験が、後の偉大な文学作品に息づく深い人間洞察の原点となった。

説明「ペトラシェフスキー・サークルへの参加と仮処刑」



1846年春、ドストエフスキーはミハイル・ペトラシェフスキーと偶然知り合い、1847年から彼の自宅で開かれていた「金曜日の集まり」に参加するようになりました。そこで若者たちとともに革命傾向のある禁書を読み、空想的社会主義者の思想について議論しました。時が経つにつ

れ、平穏な集会は次第に政治的なサークルへと変質していきました。ヨーロッパでの革命の波を受けて、ニコライ1世政府はペトラシェフスキー・サークルにスパイを送り込みました。スパイの密告により、逮捕が始まりました。

1849年4月23日未明、ドストエフスキーは逮捕され、ペトロパヴロフスク要塞のアレクセイ堡の独房に収監され、そこで8か月間にわたって拘束されました。

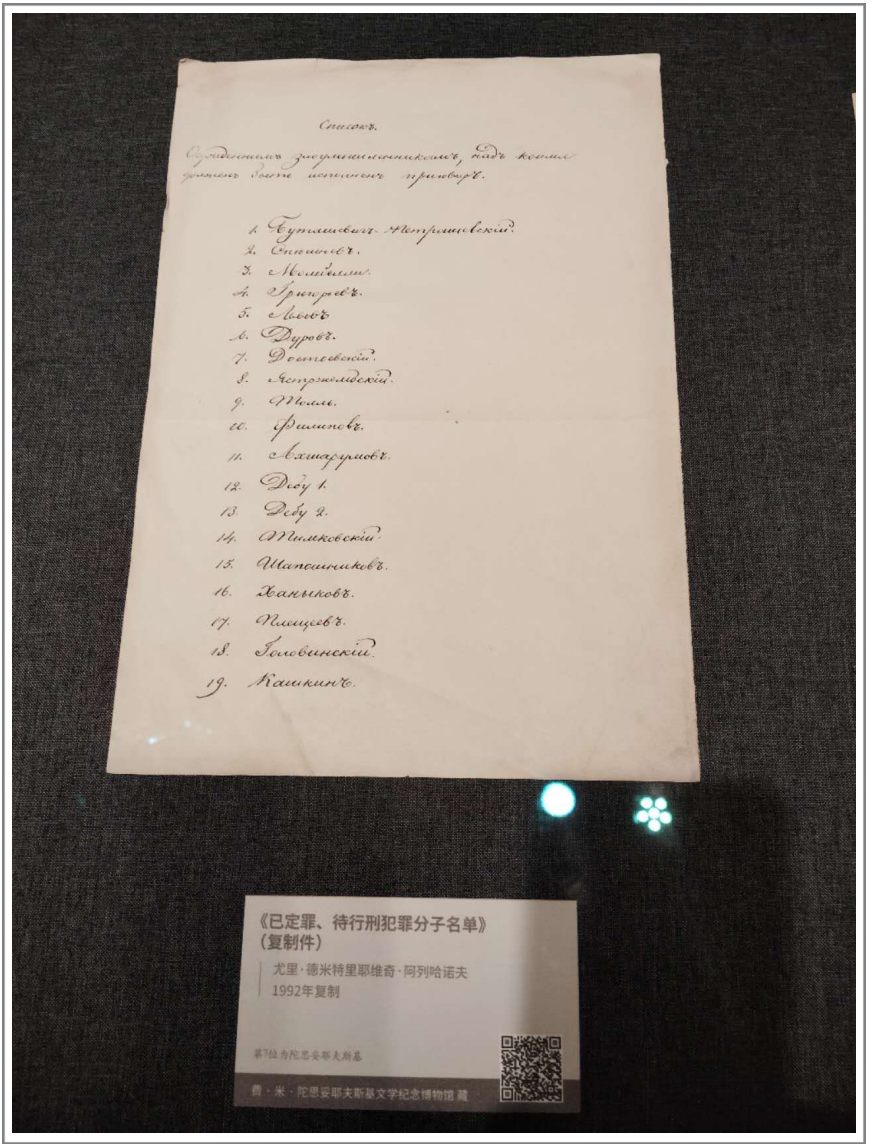
投獄中、兄から送られた書籍や雑誌が彼の精神的支えとなりました。この間にドストエフスキーは、明朗な短編小説『小さな英雄』を執筆しました。

1849年12月22日、ペトラシェフスキー・サークルの主要メンバーは、当時銃殺刑が執行されていたセミョーノフ校場へと連行されました。ところが、処刑の直前になって突然赦令が届き、ドストエフスキーの死刑は4年間の苦役に減刑され、その後は流刑となりました。

この「仮処刑」は、ニコライ1世が巧みに仕組んだ心理的震撼手段でした。この生死の境を体験したことは、ドストエフスキーのその後の創作に深い刻印を残しました。小説『白痴』では、主人公ムイシュキン公爵が、処刑直前の最後の数分間の感覚について深く思いを巡らせています。

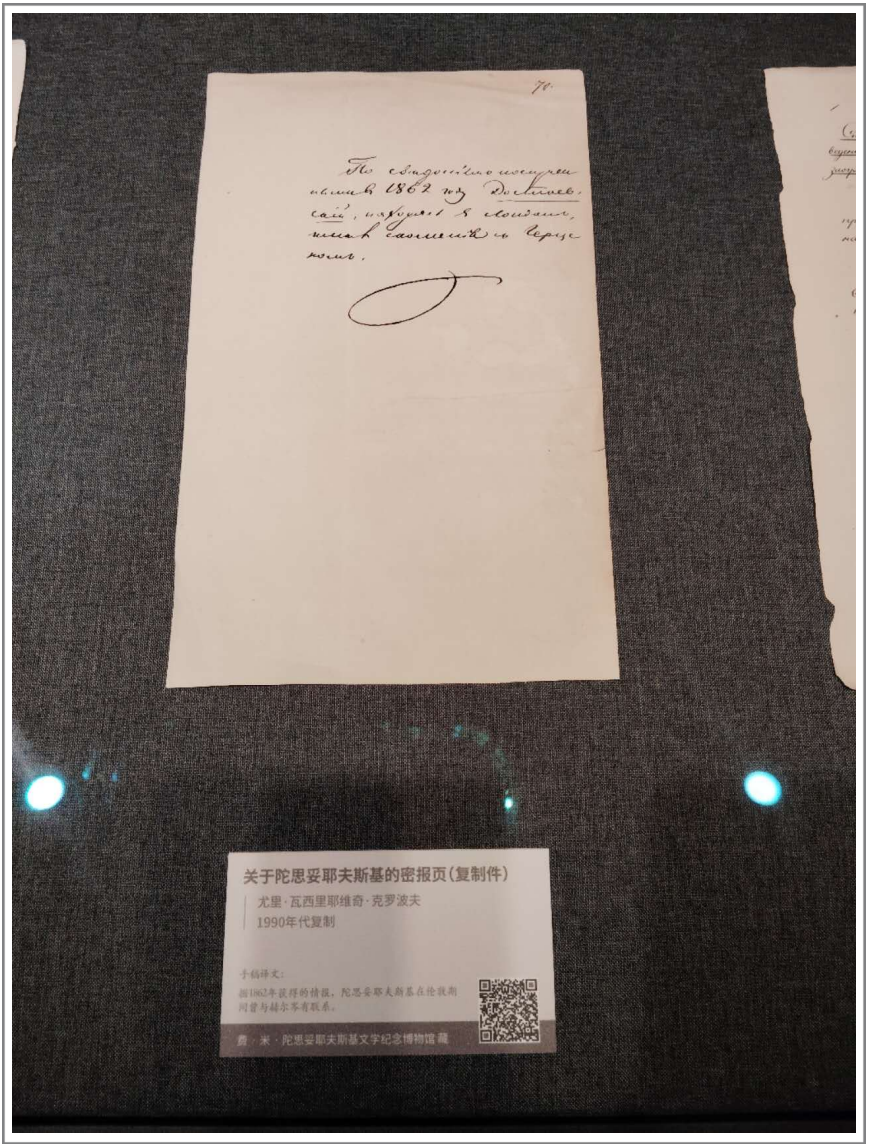
※要するに、ドストエフスキーたちへの死刑宣告は「見せしめ」だった。だが、当人たちはその事実を知らず、銃を向けられたその瞬間、まさに「死」を覚悟した。この「仮処刑」の瞬間に彼が感じた心理風景は、文学全体を貫く死と生、時間と永遠というテーマの原点となっている。

書状「有罪判決を受け、処刑を待つ犯罪者」



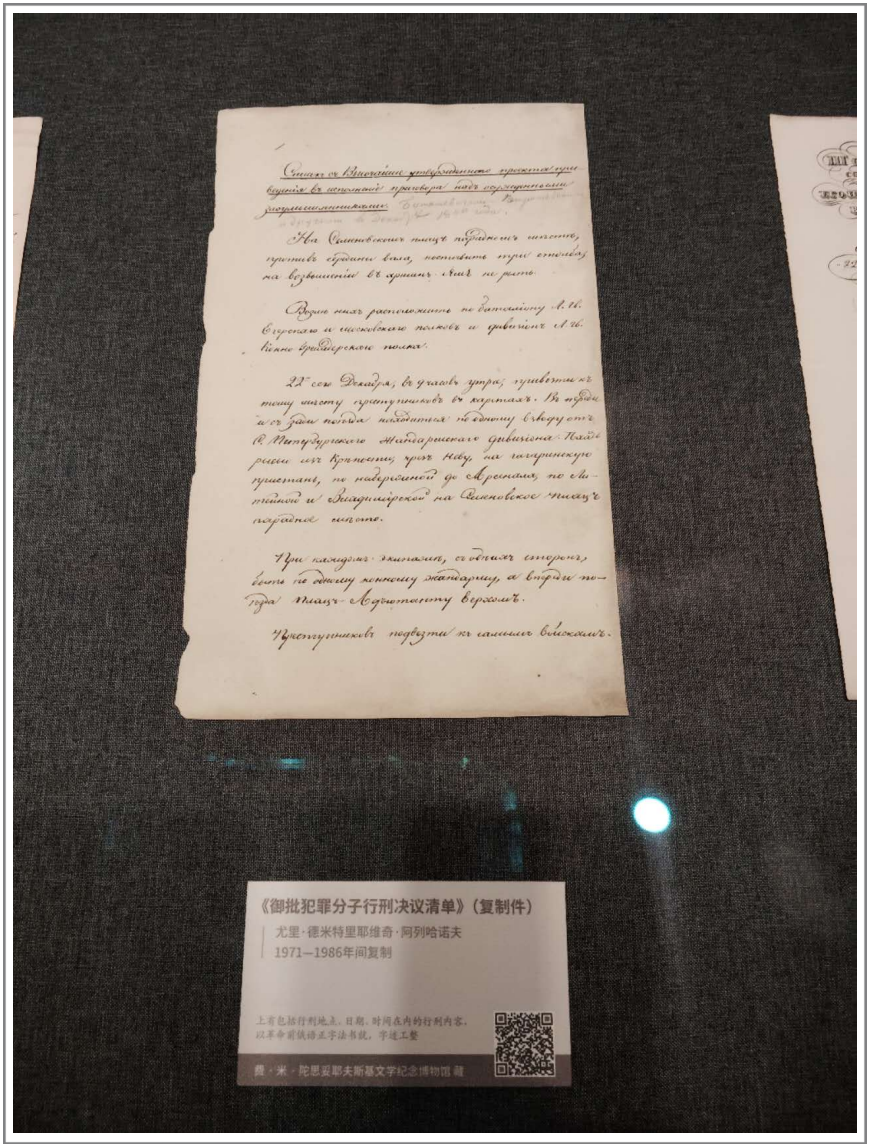
作者：ユーリ・ドミトリエヴィチ・アレハノフ
補足：1992年写し
※第7番目がドストエフスキーである。

書状「ドストエフスキーに関する密報頁（写し）」



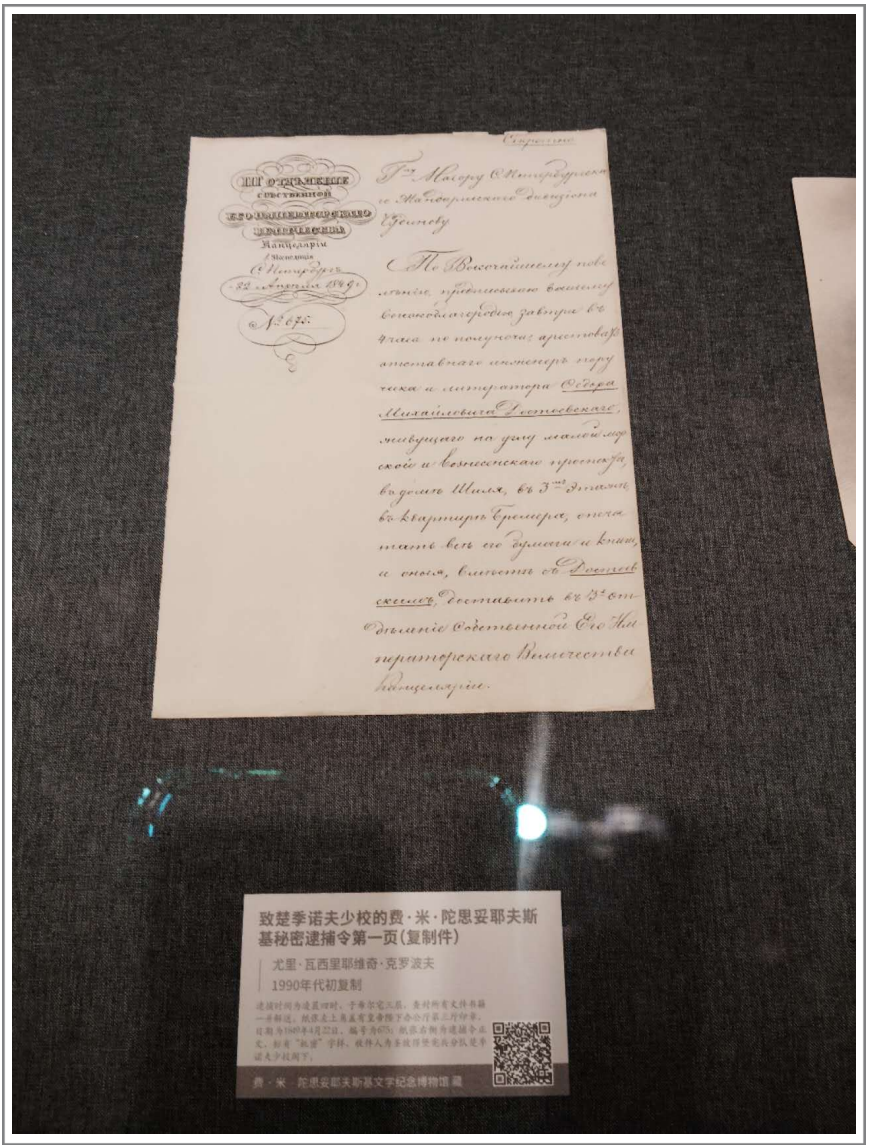
作者：ユーリ・ヴァシリエヴィチ・クロポフ
補足：1990年代写し
※手稿訳文：1862年に得た情報によると、ドストエフスキーはロンドン滞在中にヘルツェンと連絡を取り合っていた。

書状「御裁可による犯罪者処刑決議リスト（写し）」



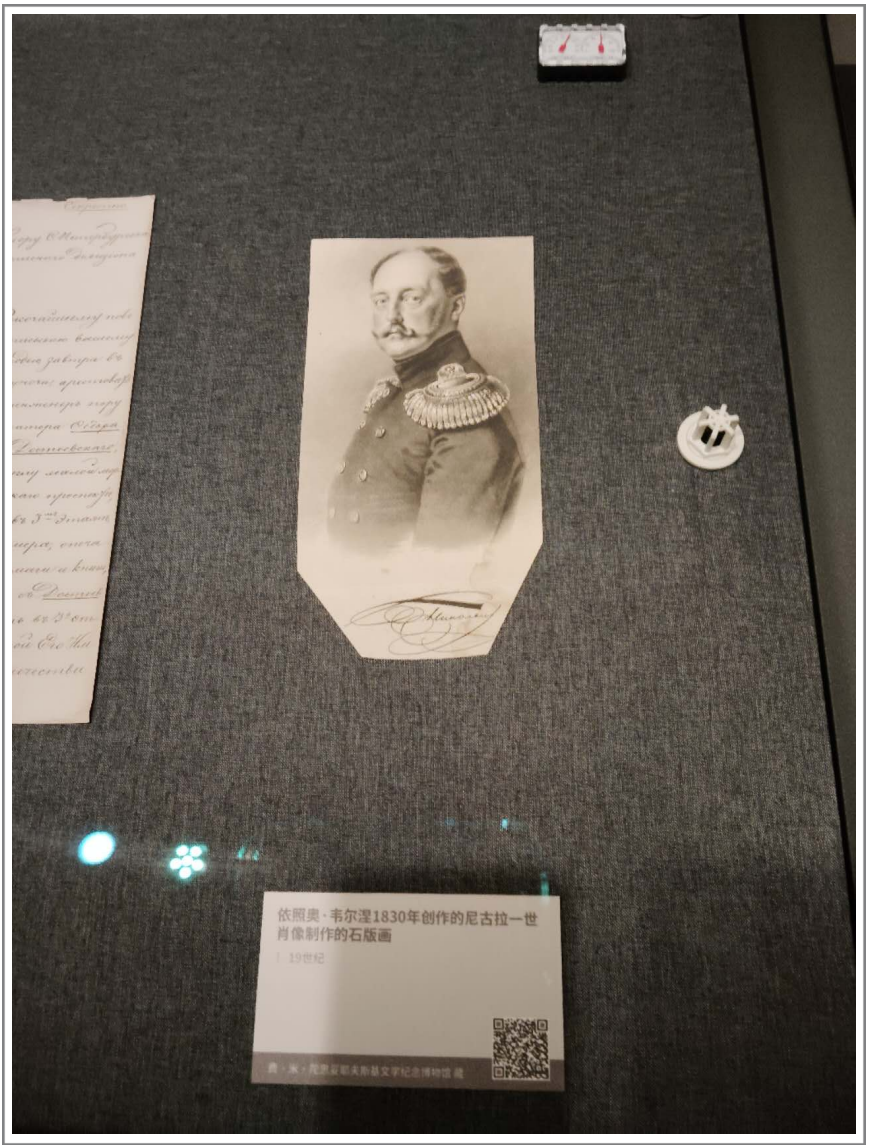
作者：ユーリ・ドミトリエヴィチ・アレハノフ
補足：1971年～1986年写し
※上には処刑場所、日付、時刻を含む処刑内容が、革命前のロシア語正書法で記されている。

書状「フェドロフ少佐宛て フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー秘密逮捕令第一頁（写し）」



作者：ユーリ・ヴァシリエヴィチ・クロポフ
補足：1990年代初頭写し

石版画「皇帝ニコライ1世の肖像画」



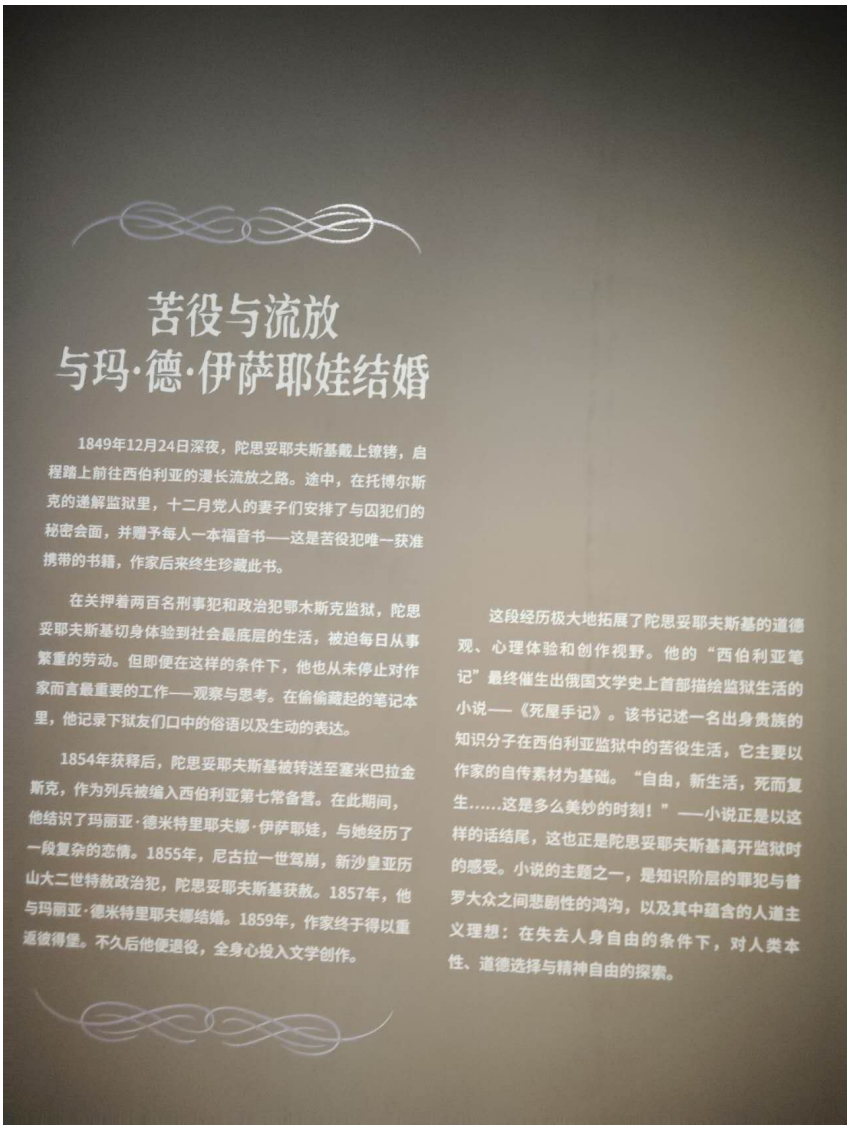
作者：オラース・ヴェルネ
補足：1830年制作

図画『セミョーノフ校場』



シリーズ：『ドストエフスキーのペテルブルク』シリーズより
作者：ボリス・ゲンナジエヴィチ・コスティゴフ
制作年：1993年
※セミョーノフ校場は、ドストエフスキーが1849年に仮処刑を経験した場所である。彼は銃殺刑の直前に減刑の赦令が届き、一命を取り留めた。

説明「マリア・ドミトリエヴナ・イサエワとの結婚」



1849年12月24日深夜、ドストエフスキーは足枷をはめられ、シベリアへの長い流刑の旅に出発しました。途中、トボリスクの送致監獄で、デカブリスト（十二月党人）の妻たちは囚人たちとの秘密の面会を手配し、各自に福音書を一冊ずつ贈りました。これは苦役囚が所持を許され

た唯一の書物であり、作家はその後生涯にわたってこの福音書を大切に保管し続けました。

二百人の刑事犯・政治犯が収容されていたオムスク刑務所で、ドストエフスキーは社会の最底辺の生活を身をもって体験し、毎日重労働を強いられました。しかし、そのような条件下にあっても、彼は作家にとって最も重要な仕事である観察と思考を決してやめませんでした。密かに隠し持ったノートには、獄友たちの口から聞いた俗語や生き生きとした表現が書き留められました。

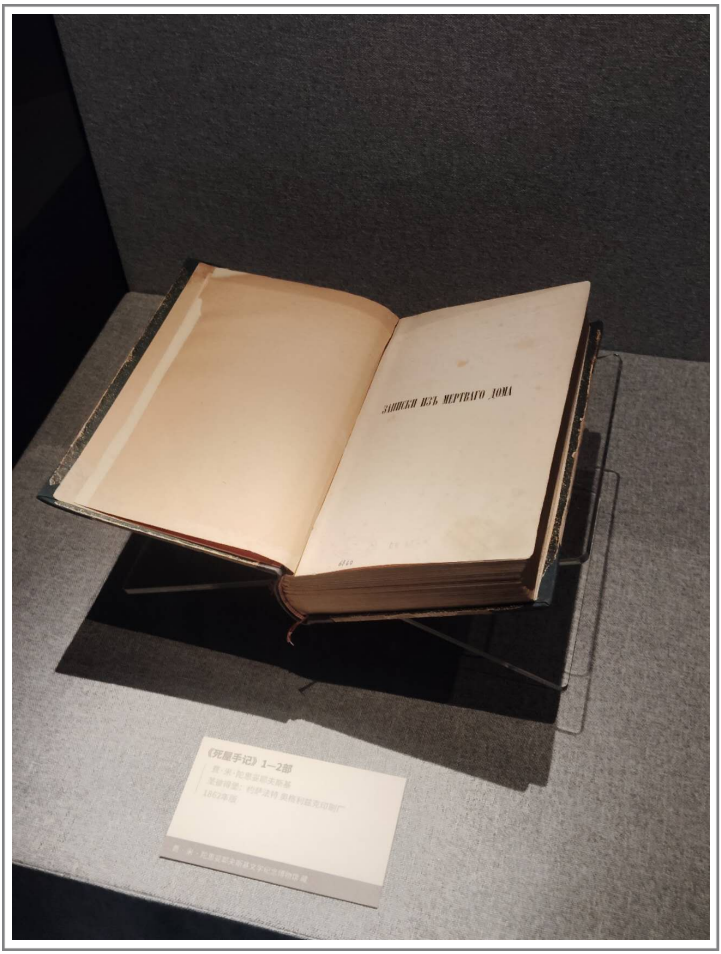
1854年に釈放された後、ドストエフスキーはセミパラチンスクに移送され、シベリア第七常備営の兵卒として編入されました。この間に彼はマリア・ドミトリエヴナ・イサエワと出会い、彼女との複雑な恋愛を経験しました。1855年、ニコライ1世が崩御し、新皇帝アレクサンドル2世が政治犯を特赦したことで、ドストエフスキーは恩赦を受けました。1857年、彼はイサエワと結婚し、サンクトペテルブルクへ戻りました。まもなく退役し、文学創作に専念するようになりました。

この経験は、ドストエフスキーの道徳観・心理的体験・創作の視野を大きく広げました。彼の「シベリア覚書」は、最終的にロシア文学史上初めて監獄生活を描いた小説――『死の家の記録』 を生み出すことになります。この作品は、貴族出身の知識人がシベリア刑務所で送る苦役生活を綴ったもので、主に作家自身の自伝的素材に基づいています。

「自由、新たな生活、死と復活……なんと素晴らしい瞬間だろう！」――小説はまさにこの言葉で結ばれており、これはドストエフスキーが刑務所を出るときに抱いた感覚そのものです。この小説のテーマの一つは、知識階級の囚人と一般大衆との間の悲劇的な溝と、そこに内包される人道的理想、すなわち人間の自由を奪われた条件下でも、人間性・道徳的選択・精神的自由を探求することにあります。

※トボリスクで十二月党人の妻たちから贈られた福音書は、ドストエフスキーが最も大切にした私物の一つで、現在も記念博物館に所蔵されている。『死の家の記録』は、シベリア流刑の実体験をもとに書かれた作品で、ソルジェニーツィンの『イヴァン・デニーソヴィチの一日』など後世の収容所文学にも大きな影響を与えた。

書籍『死の家の記録』 第1部・第2部



出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：イオサファト・オグリズコ印刷所
出版年：1862年版
※『死の家の記録』は、ドストエフスキーがシベリア流刑・苦役の実体験をもとに執筆した作品である。一応、冒頭部分では物語の体裁を保っているが、実質的にはノンフィクションに近い作品だ。本作は1860年から1861年にかけて雑誌『ロシア世界』に連載され、1862年に単行本（全2巻）として刊行された。

挿絵『最初の印象　カージン』



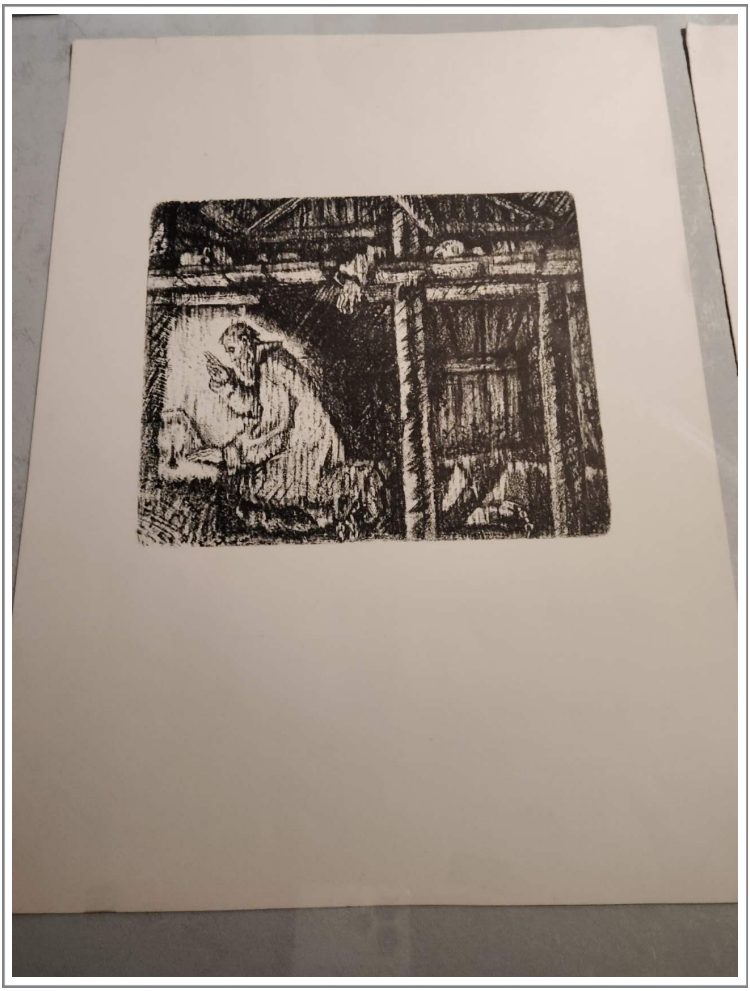
作者：アロン・イオシフォヴィチ・ジンシュテイン
制作年：1982年年
作品：『死の家の記録』挿絵

版画『イサイ・フォーミチ』



作者：ボリス・リヴォヴィチ・ネプムニャシチー
制作年：2012年
作品：『死の家の記録』挿絵
※イサイ・フォーミチは『死の家の記録』に登場するユダヤ人囚人で、刑務所内で独特の存在感を示すキャラクター。ユーモアと知恵を併せ持ち、他の囚人たちからも一目置かれる人物として描かれている。この版画は、その人物像を現代の視点で捉えた作品である。

石版画『旧儀式派信徒』



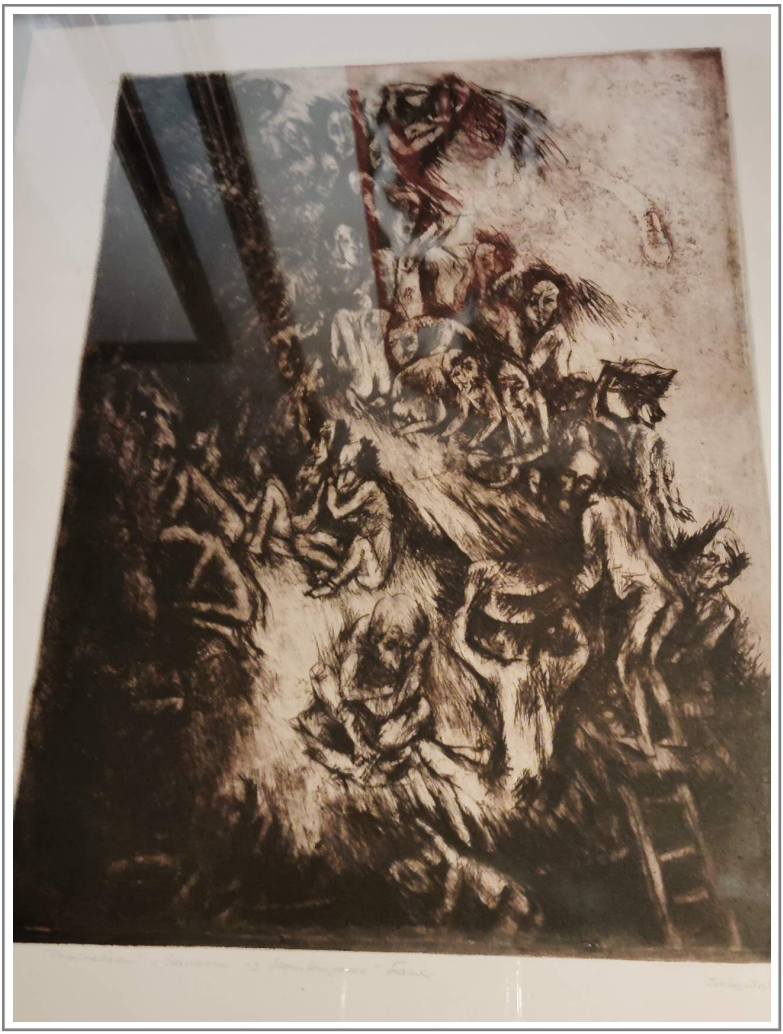
作者：アネル・ジノヴィエヴナ・トルカチョワ
制作年：1971年
作品：『死の家の記録』挿絵
※旧儀式派（ラスコーリニキ） は、17世紀のロシア正教会改革に反対し、古い典礼を守り続けた人々だ。ドストエフスキーは『死の家の記録』の中で、彼らが刑務所内でいかに信仰を貫き、他の囚人とは一線を画す清廉さを持っていたかを描いている。彼らはドストエフスキーにとって、精神的な強さと不屈の信仰の象徴として映っていた。

石版画『八つの眼』



作者：アネル・ジノヴィエヴナ・トルカチョワ
制作年：1971年
作品：『死の家の記録』挿絵
※先項『旧儀式派信徒』（1971年）と同じ作者。囚人たちを見張る看守の目を象徴的に表現したものだろうか。

版画『浴場』



作者：アロン・ヨシフォヴィチ・ジンシュテイン
制作年：1982年
作品：『死の家の記録』挿絵
※『死の家の記録』には、囚人たちが公衆浴場（バーニャ） に入る場面が生々しく描かれている。暑さ・蒸気・狭さ・裸体・喧騒――そこは刑務所の中でも特に人間の生の赤裸々な営みがあらわになる場所として印象的に綴られており、この版画はその情景を視覚化したものとなる。

版画『苦役動物』



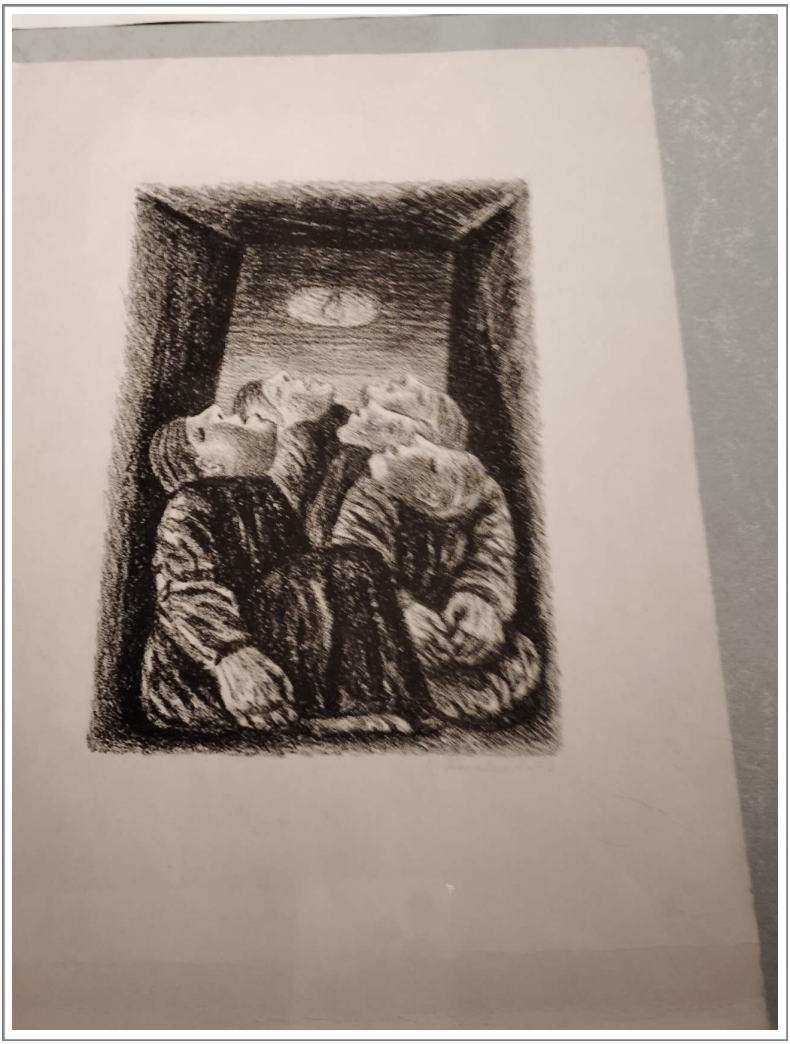
作者：アロン・ヨシフォヴィチ・ジンシュテイン
制作年：1982年
作品：『死の家の記録』挿絵
※おそらく『死の家の記録』挿絵であり、刑務所で用いられていた農耕用の家畜を題材とした作品だと思われる。

石版画『浴場』



作者：エレナ・ヴァシリエヴナ・オフチンニコワ
制作年：1983年
作品：『死の家の記録』挿絵
※先のジンシュテイン（1982年）の『浴場』とは別の画家による作品。同じ題材でも作者が異なると、表現や雰囲気がまったく違うのが面白い。囚人たちの生々しい人間模様が描かれている点は共通している。

石版画『眠る者』



作者：ニコライ・アレクサンドロヴィチ・コシェリコフ
制作年：1973年
作品：『死の家の記録』挿絵
※『死の家の記録』では、囚人たちが雑魚寝で眠る場面が度々描かれている。この作品もそのうちの一つで、過酷な環境にあってもなお「眠り」という誰にでも等しく訪れる営みを通して、人間の弱さとたくましさの両面が表現されていると考えられる。

版画『娼婦』



作者：ボリス・リヴォヴィチ・ネプムニャシチー
制作年：2010年
作品：『死の家の記録』挿絵
※『死の家の記録』では、囚人たちの過去や刑務所内外での人間模様が描かれるが、その中で登場する女性たちの境遇――特に貧困や社会の底辺で生きる者たちの姿も重要なモチーフの一つだ。この版画もそのようなテーマに切り込んだ作品と考えられる。

版画『絶望』



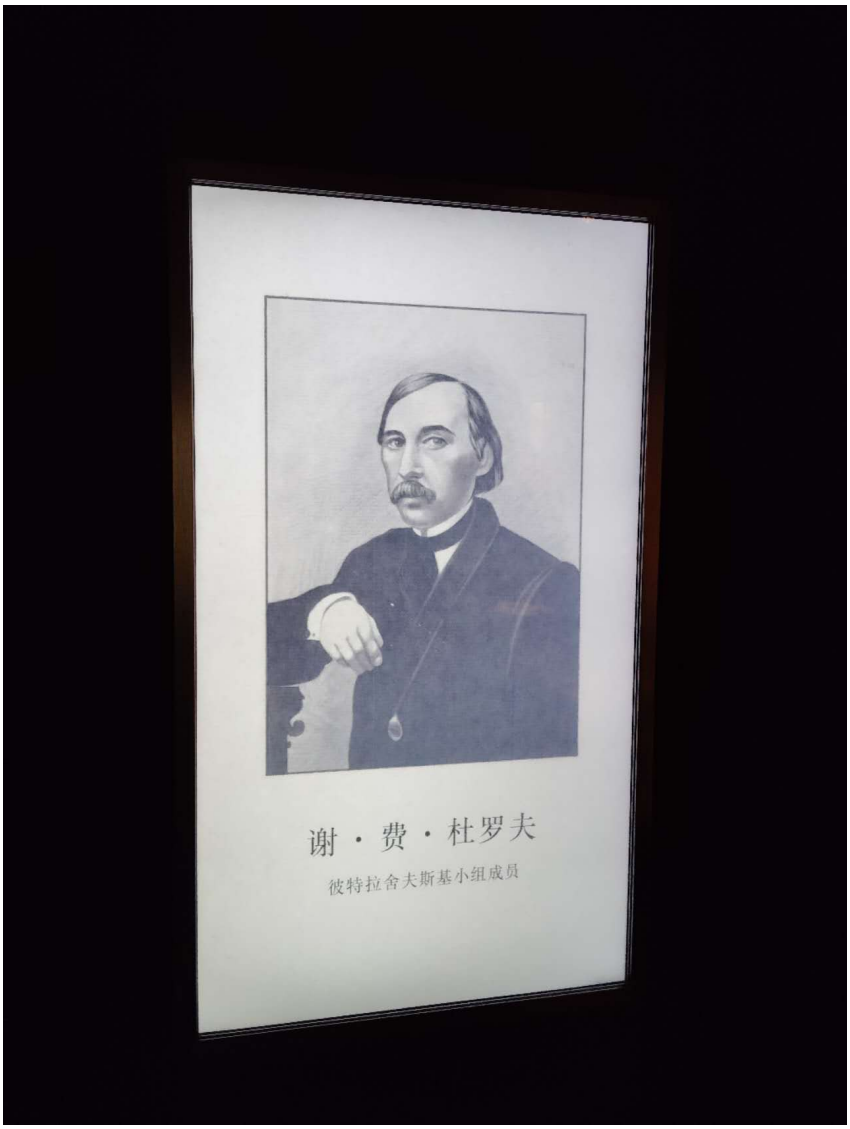
作者：ボリス・リヴォヴィチ・ネプムニャシチー
制作年：2012年
作品：『死の家の記録』挿絵
※「絶望」というタイトルが示すとおり、苦役囚たちが直面する精神的・肉体的な限界、あるいは将来への見通しの立たなさを表現した作品だと考えられる。

肖像画「ミハイル・ヴァシリエヴィチ・ブタシェヴィチ＝ペトラシェフスキー」



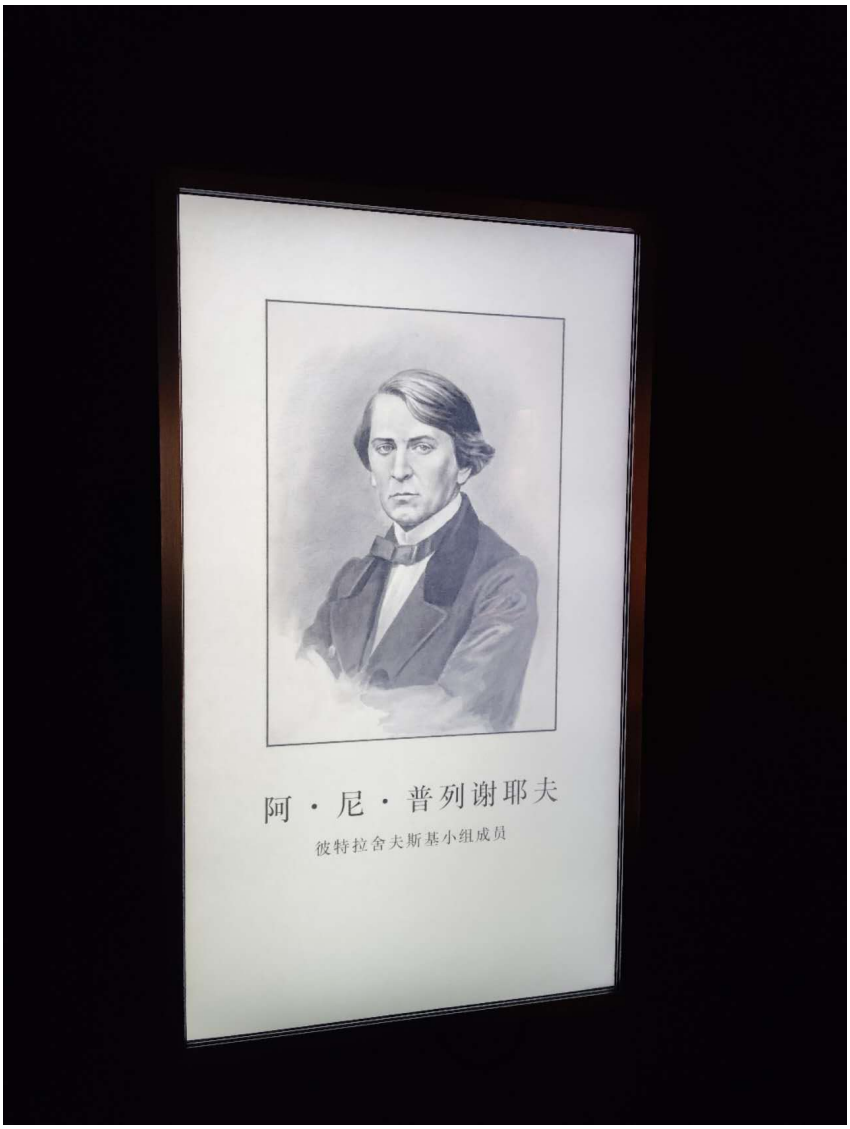
※ペトラシェフスキー・サークルの指導者。フランスの空想社会主義思想に影響を受け、自宅で「金曜日の集会」を開いていた。

肖像画「セルゲイ・フョードロヴィチ・ドゥーロフ」



※ペトラシェフスキー・サークルのメンバー。作家・詩人でもあった。

肖像画「アレクセイ・ニコラエヴィチ・プレシチェーエフ」



※ペトラシェフスキー・サークルのメンバー。ロシアの著名な詩人で、後にドストエフスキーと親交を続けた。

肖像画「ナタリア・ドミトリエヴナ・フォンヴィージナ」



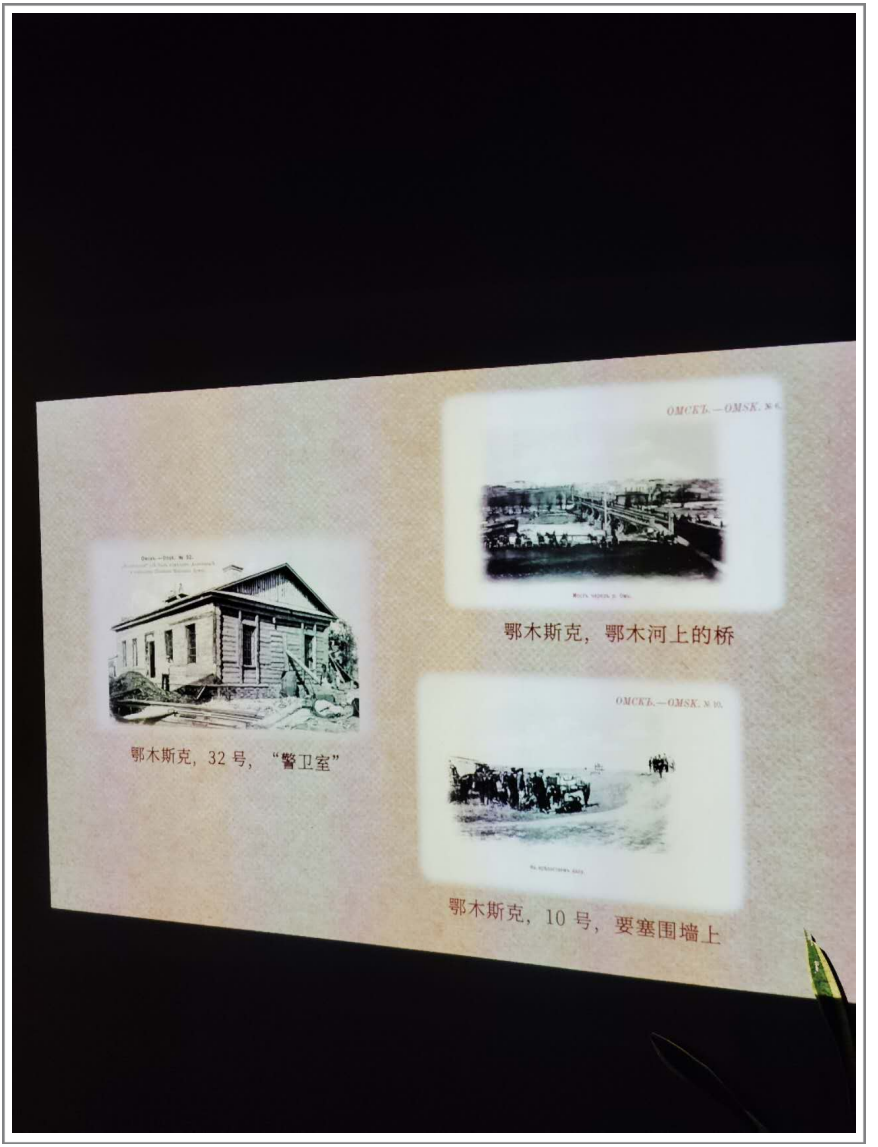
※デカブリスト（十二月党人）の妻。トボリスクで、流刑のためにシベリアへ向かうペトラシェフスキー・サークルのメンバーと面会し、福音書を彼らに贈った。

肖像画「プラスコヴィヤ・エゴロヴナ・アンネンコヴァ」



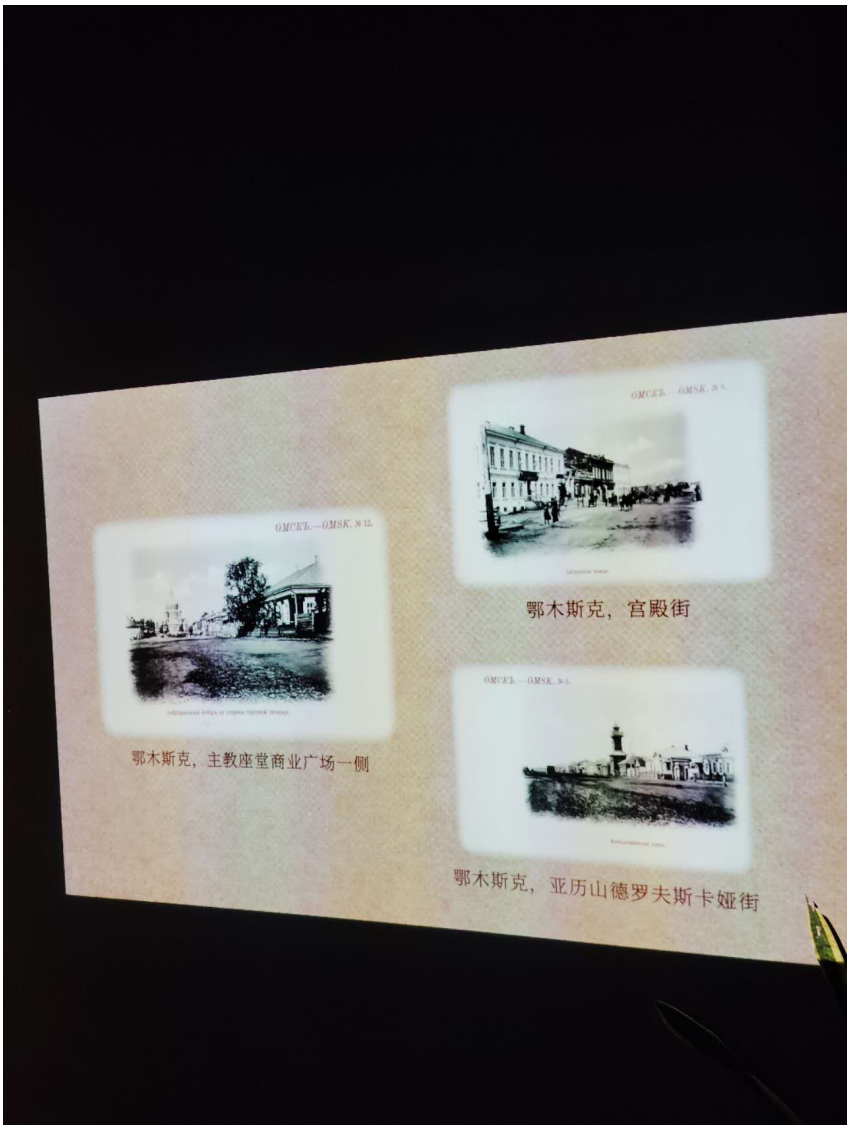
※デカブリストの妻。同じくトボリスクでペトラシェフスキー・サークルのメンバーと面会し、福音書を贈った。

図画「オムスクの光景・人物（1）」



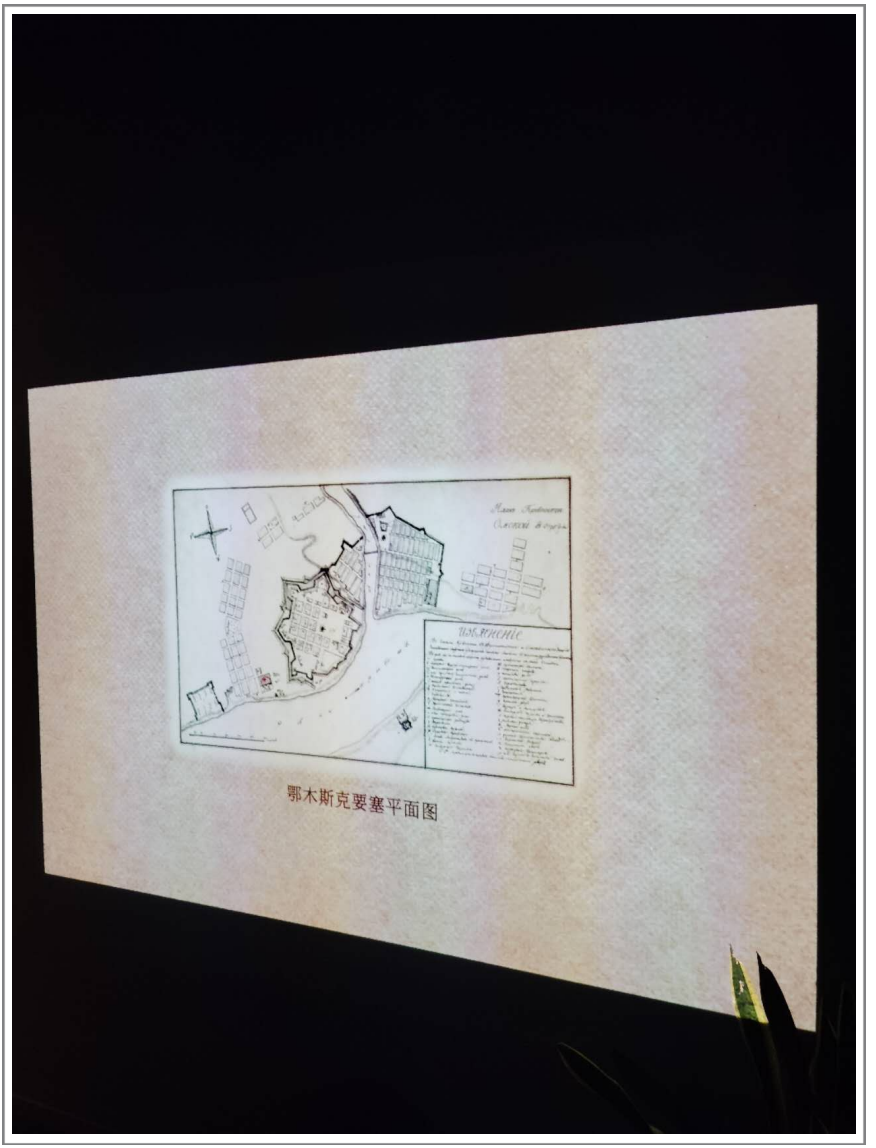
「オムスク、オム川の橋」
「オムスク、32番『警備詰所』」
「オムスク、10番 要塞の壁の上」

図画「オムスクの光景・人物（2）」



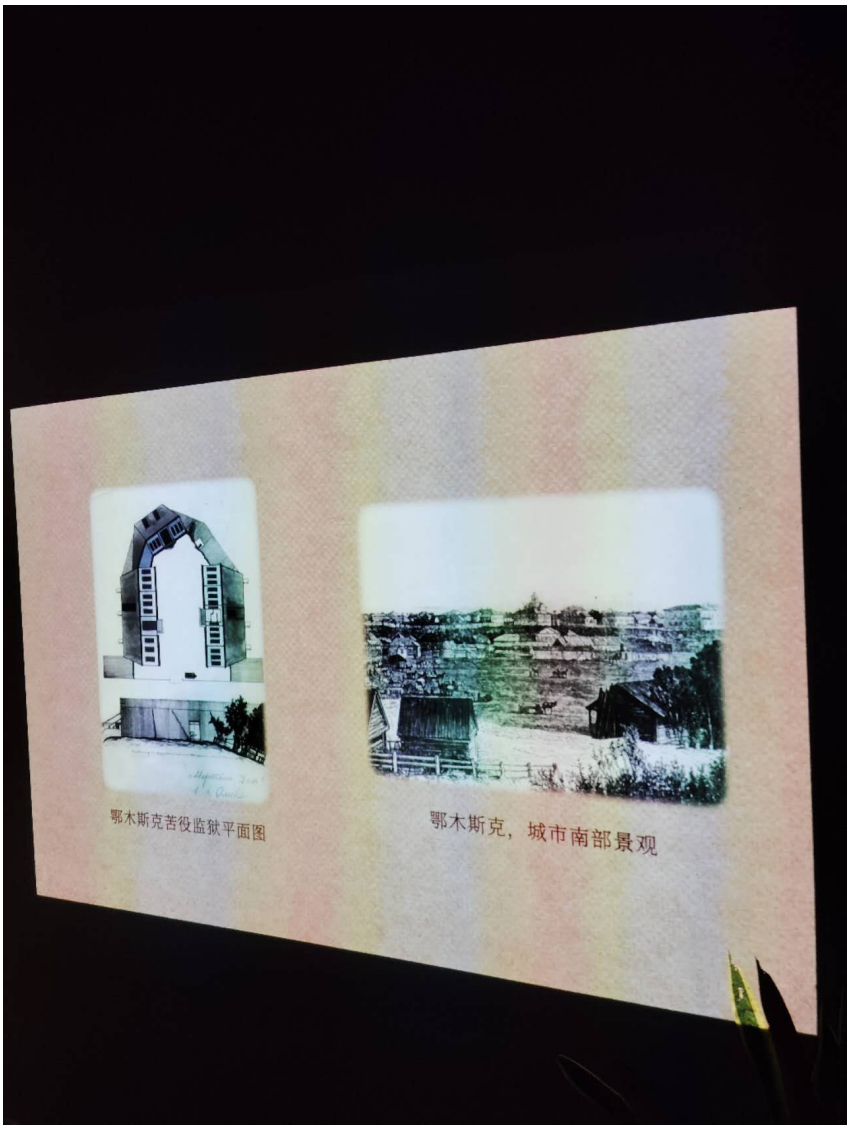
「オムスク、宮殿通り」
「オムスク、主教座聖堂の商業広場側」
「オムスク、アレクサンドロフスカヤ通り」

図画「オムスクの光景・人物（3）」



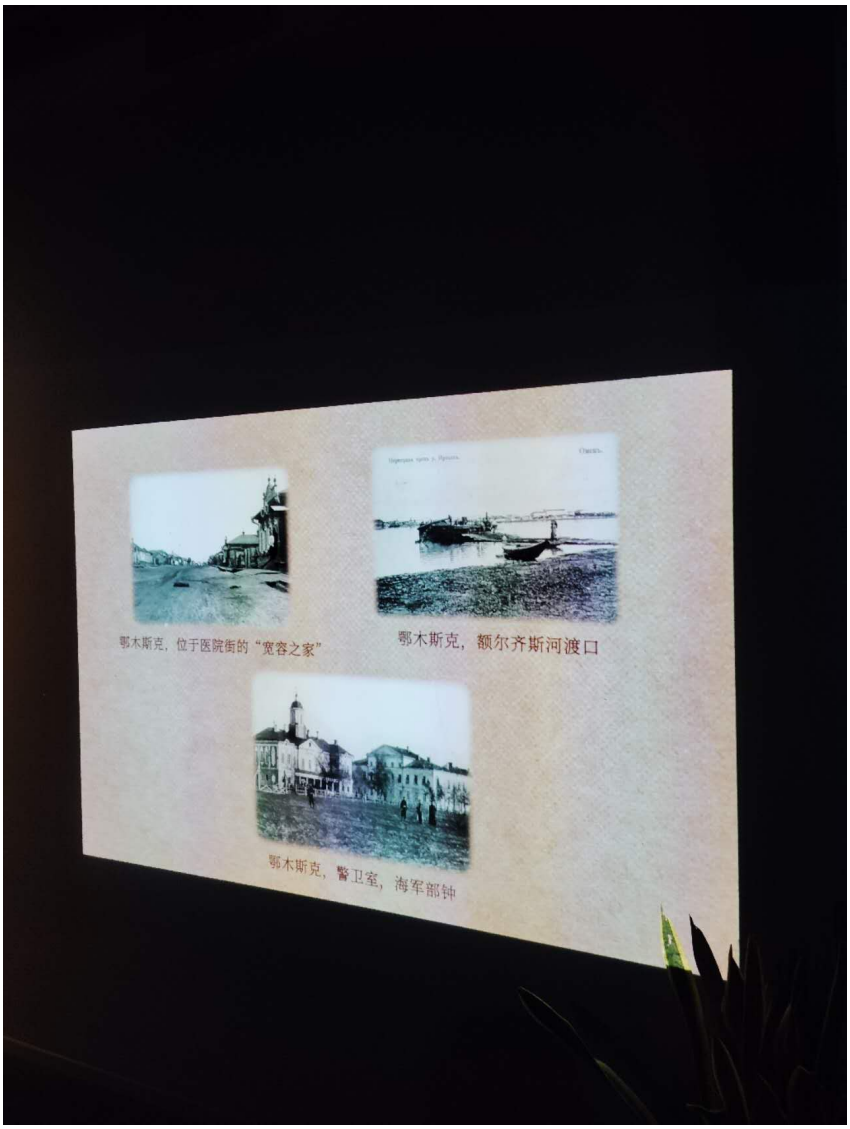
「オムスク苦役刑務所の平面図」

図画「オムスクの光景・人物（4）」



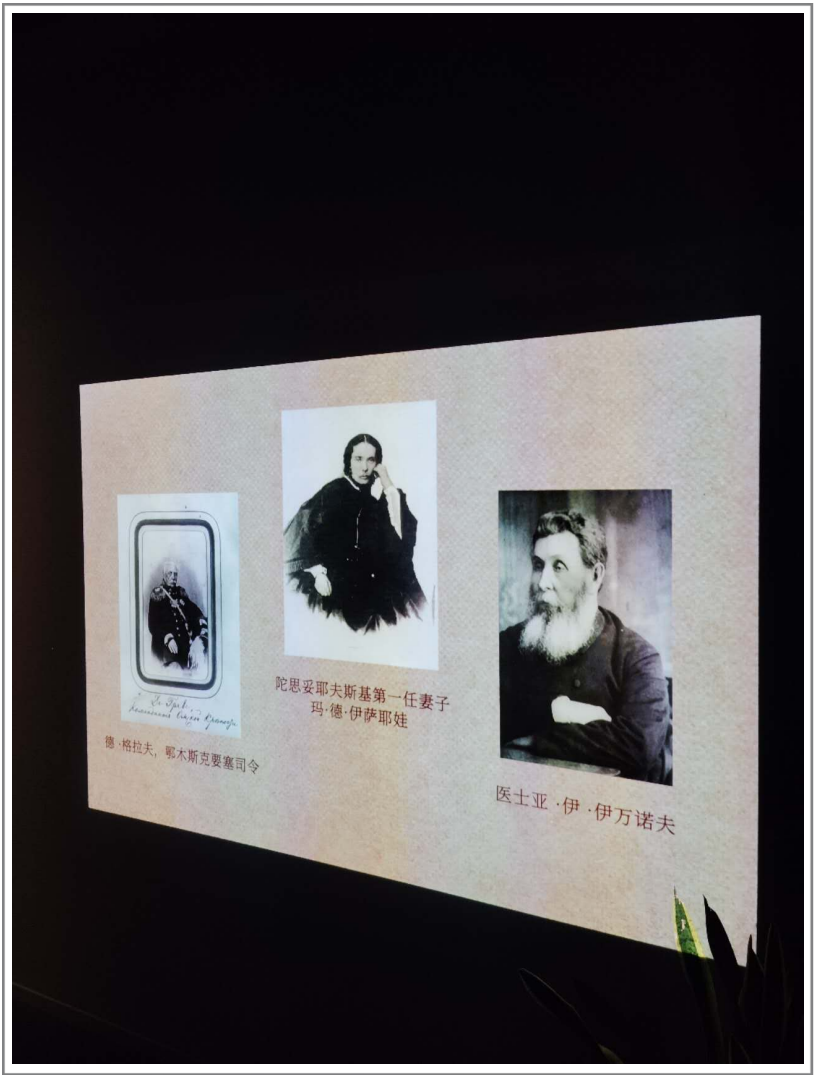
「オムスク苦役刑務所の平面図」
「オムスク、都市南部の景観」

図画「オムスクの光景・人物（5）」



「オムスク、病院通りにある『寛容の家』（おそらく刑務所関連施設）」
「オムスク、イルティシ川の渡し場」
「オムスク、警備詰所（海軍省の鐘）」

図画「オムスクの光景・人物（6）」



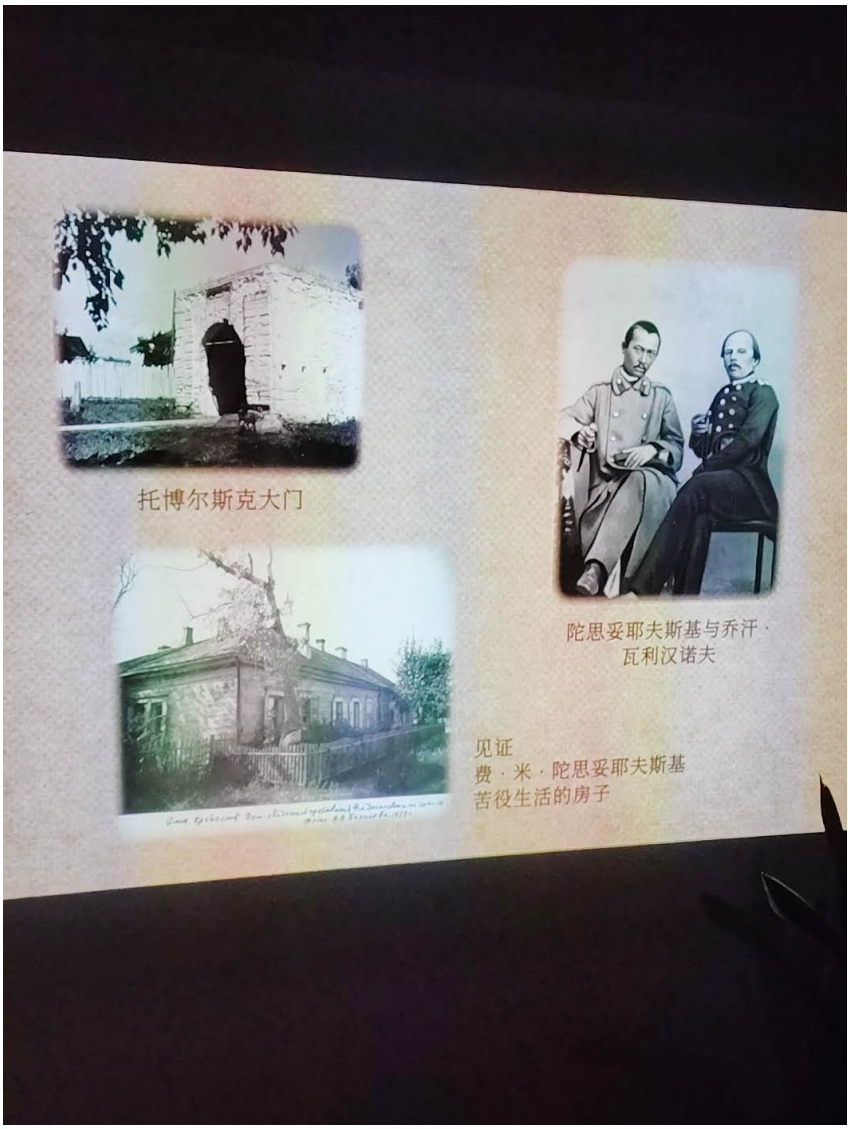
マリア・ドミトリエヴナ・イサエワ（ドストエフスキーの最初の妻）
アレクセイ・フョードロヴィチ・デ・グラーヴェ（オムスク要塞司令官）
A・I・イヴァノフ（ロシア・オムスク軍病院の療補助員：フェルツシェル）
※オムスク時代に関係する人物たち。グラーヴェ司令官と医師イヴァノフはドストエフスキーの恩人とも言える人物だ。

図画「オムスクの光景・人物（7）」



「アンネンコワ宛の手紙」
※アンネンコワは十二月党人の妻で、トボリスクでドストエフスキーに福音書を贈った人物の一人。彼女に宛てた手紙の存在が示されている。
「オムスクの外壁」「オムスクの外観」

図画「オムスクの光景・人物（8）」



「トボリスクの門」
※ドストエフスキーがシベリア流刑の途上で通過したトボリスクの町の門の写真。トボリスクは、彼が囚人として初めてシベリアに足を踏み入

れた町で、ここで十二月党人の妻たちから福音書を贈られた場所としても有名である。

「ドストエフスキーとチョカン・ヴァリハノフ」
※ヴァリハノフはカザフスタン出身の探検家・民族学者で、セミパラチンスクでドストエフスキーと親交を持った。二人は深い友情で結ばれていた。

「苦役生活の家」
※ドストエフスキーがオムスクの刑務所を出た後、セミパラチンスクで兵役中に住んでいた家。

図画「オムスクの光景・人物（9）」



「セミパラチンスクにてドストエフスキーが居住していた家」
※彼はシベリアでの流刑期間を終えた後、1854年から1859年「まで当地で兵役に就き、この家で生活していた。

第三部　起動

シベリアから帰還したドストエフスキーは、文壇への復帰を果たすと同時に、兄ミハイルと意気投合して雑誌『時代』を創刊。『死の家の記録』で名声を不動のものにし、挫折を華麗に挽回するかに見えた。

しかし私生活は地獄そのもの。持病のてんかん発作に加え、元々相性の悪かった妻マリアとの不仲は悪化し、彼女は進行する結核に蝕まれ、家庭は病棟と化す。

追い打ちをかけるように最愛の兄ミハイルが急逝。経営の才覚を失った雑誌はたちまち多額の負債を抱え廃刊に追い込まれ、莫大な借金だけがドストエフスキーに重くのしかかる。

説明「ドストエフスキー兄弟による雑誌『時代』の創刊」



ペテルブルクへ戻った後、ドストエフスキーは再び文学活動と社会活動に没頭し、創作の絶頂期を迎えました。

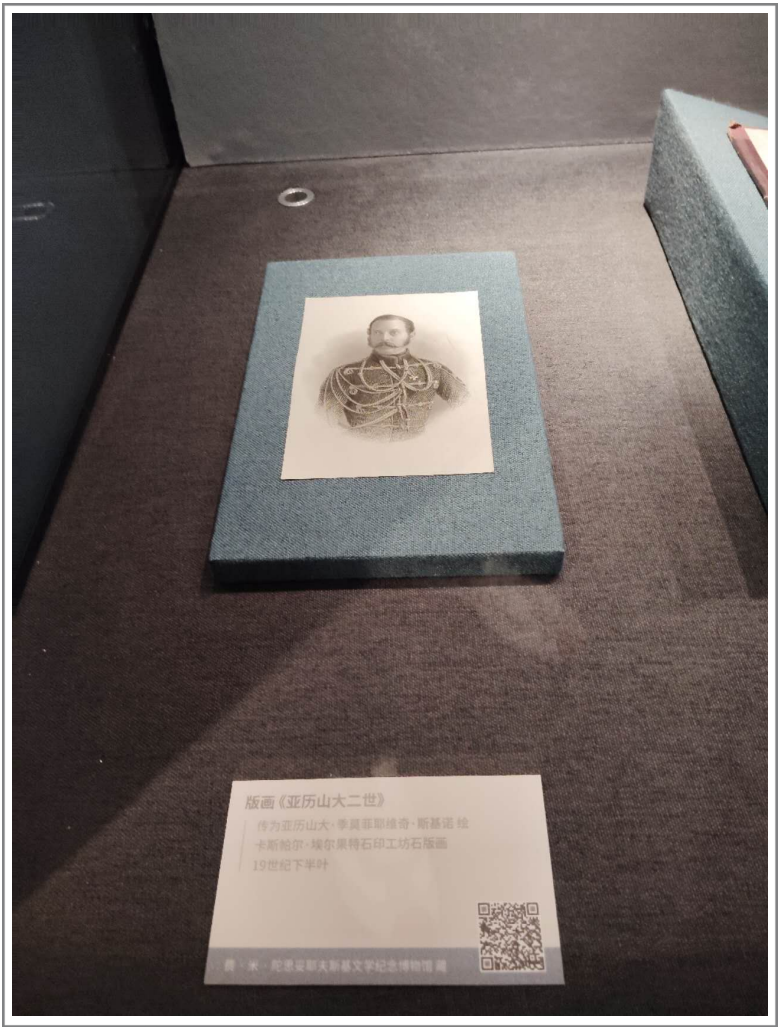
1860年代はロシアの改革の時代でした。社会生活は日増しに活発になり、様々な傾向を帯びた多数の雑誌が創刊されました。ドストエフス

キー兄弟――フョードルとミハイルは、共同で雑誌『時代（Время）』を出版し始め、その創刊号は1861年1月に発行されました。雑誌の編集長はミハイル・ドストエフスキーが務め、彼が財務・出版・そして一部の編集業務のすべてを担いました。フョードル・ミハイロヴィチは主な文学編集者として携わりました。

『時代』誌は「根基主義（ポチヴェンニチェストヴォ）」の綱領を奉じ、知識階級が人民の下へ帰り、民族の土壌に根を下ろすべきだと主張しました。この雑誌には、同時代の作家たちの文学作品が掲載されたほか、差し迫った社会問題や政治問題に関する記事も発表されました。ドストエフスキーはここで『死の家の記録』の連載を開始し、自身の記事も掲載しました。『時代』は瞬く間に、最も注目を集める刊行物の一つとなりました。

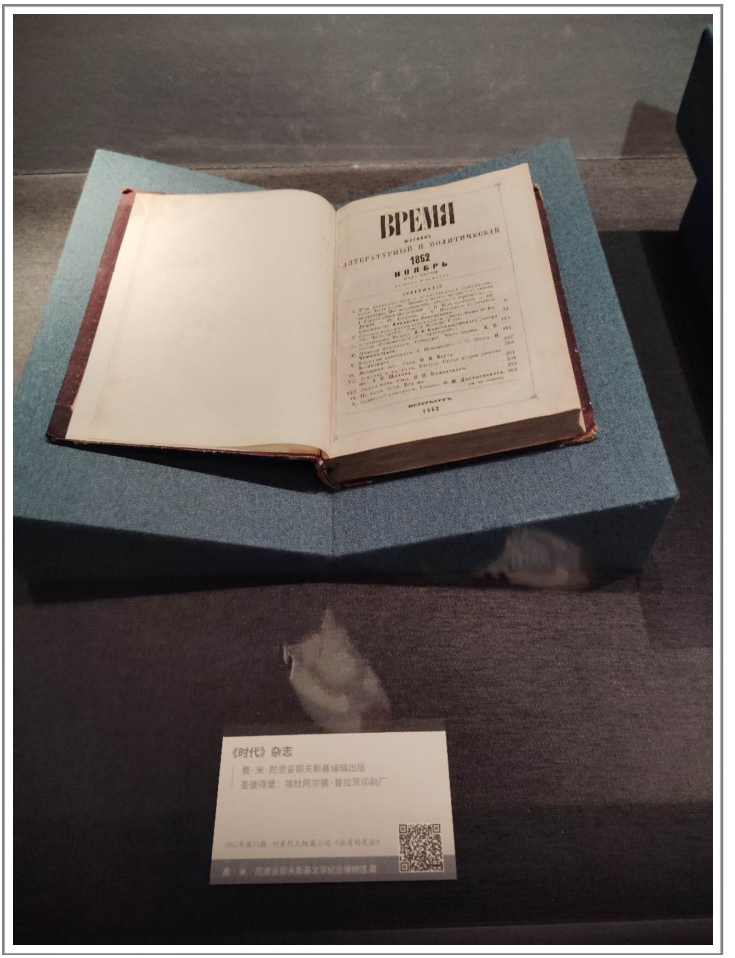
※「根基主義（土壌主義）」 は、スラヴ派と西洋派の間をとる独自の思想で、ロシアの民族性・正教・民衆の精神を重視する立場である。ドストエフスキー後期の思想的核心でもある。

版画『アレクサンドル2世』



作者：アレクサンドル・ティモフェエヴィチ・スキノ作と伝えられる
技法：カスパル・エルゴット石版工房による石版画
制作年代：19世紀下半葉（後半）
※アレクサンドル2世（在位1855–1881）は、「解放皇帝」と呼ばれ、1861年に農奴解放令を発布したことで知られている。また、ペトラシェフスキー事件で死刑判決を受けていたドストエフスキーらに対し、仮処刑の直前に減刑の赦令を下したのもこの皇帝である。

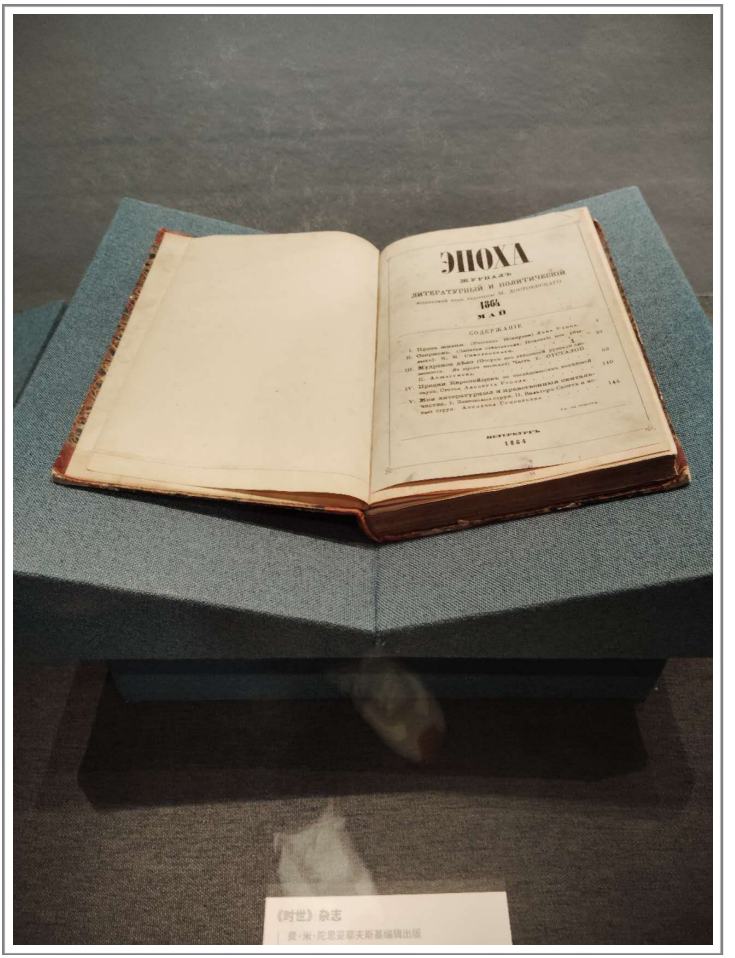
雑誌『時代』



編集・出版：フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー
印刷所：サンクトペテルブルク、エドゥアルド・プラッツ印刷所
内容：1862年11月号。ドストエフスキーの短編小説『いやな話』が掲載された号

※ドストエフスキーの短編小説『いやな話』は、高官が部下の結婚式に突然乱入するという風刺的な物語で、当時の官僚社会を鋭く描いている。『時代』誌は1861年に兄弟で創刊され、根基主義（土壌主義） の思想を掲げた重要なメディアであった。

雑誌『時世』



編集・出版：フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー
印刷所：サンクトペテルブルク、リューミン出版会社
内容：1864年第5号。ドストエフスキーの「シチェドリン氏、あるいはニヒリストたちの分裂」が掲載された号

※『時世』は、兄ミハイルが1864年に『時代』の後継誌として創刊したが、創刊直後の1864年7月に兄が急逝したため、ドストエフスキーが単独で編集を引き継いだ。だが、雑誌は経営難により1865年に廃刊となった。

説明『虐げられし人々』



『虐げられし人々』は、ドストエフスキーが苦役を終えてから執筆した最初の長編小説であり、彼が文壇の主流に復帰するための試みでもありました。当時のロシアは大変革の時代にあり、農奴制廃止・司法改

革・経済改革が次々と実施されていました。社会は大きな希望に満ちていると同時に、厳しい試練にも直面していました。

この長編小説は、作家の創作が成熟へと向かう過渡期を象徴する作品です。ドストエフスキーはここで「小さな人々」のテーマをさらに発展させましたが、この作品では初めて人物とプロットが複雑に絡み合う構成を築き上げました。

ワルコフスキー公爵は、冷酷・利己的・邪悪の化身であり、小説中のすべての主要人物の不幸の根源です。彼は自分の執事であり高潔な人間であるイフメネフの領地を横領し、さらに自分の息子アリョーシャを裕福な相続人カーチャと結婚させるために、イフメネフの娘ナターシャとアリョーシャの恋愛を破綻させました。

ネリーは公爵の私生児であり、彼女の姿を通して一人の少女の悲劇が描かれています——世の中の醜悪さに早すぎるほどに直面し、善への信頼を失い、風変わりで誇り高く孤独な存在となっていく過程が示されています。

※この作品は、ドストエフスキーがシベリアから戻った後、『時代』誌に連載した復帰作として位置づけられる。児童虐待・貧困・社会的不正義といったテーマが色濃く反映されており、後の『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』へと続く道筋を示す重要な作品だ。

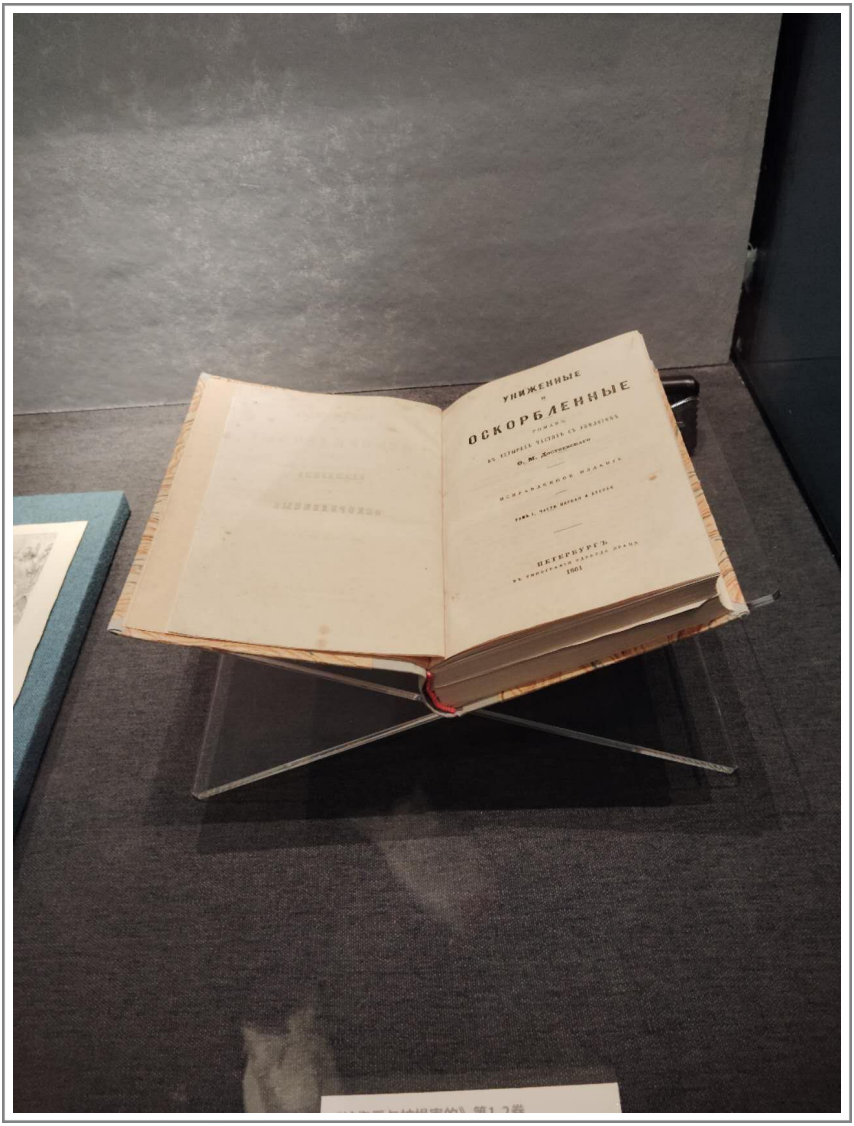
石版画『虐げられし人々』



作者：ミハイル・グリゴリエヴィチ・ロイテル
制作年：1946年
作品：小説『虐げられし人々』挿絵

※本作は、ドストエフスキーがシベリアから戻った後に発表した長編小説（1861年）で、「小さな人々」の悲哀と社会の不条理を描いた作品である。この挿絵は、その世界観を視覚化したものとして、1946年に制作された。

書籍『虐げられし人々』 第1巻〜第2巻



出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：エドゥアルド・プラッツ印刷所
出版年：1861年版
※本作は雑誌『時代』に連載され、大きな反響を呼んだ。

版画『ブロノワの家にて』



作者：セルゲイ・グリゴリエヴィチ・ベクートヴィチ
制作年：1985年
※この版画は、ドストエフスキーの小説『虐げられし人々』の一場面を描いている。ブロノワ（ブブノワ） は小説に登場する女家主で、強欲で冷酷な性格の人物だ。彼女のアパートに、物語の重要な登場人物である少女ネリーとその貧しい母が住んでおり、家賃を払えないためにブロノワからひどい仕打ちを受ける。この版画は、その悲惨な場面を描いたものと考えられる。

版画『ネリーとイワン・ペトローヴィチ』



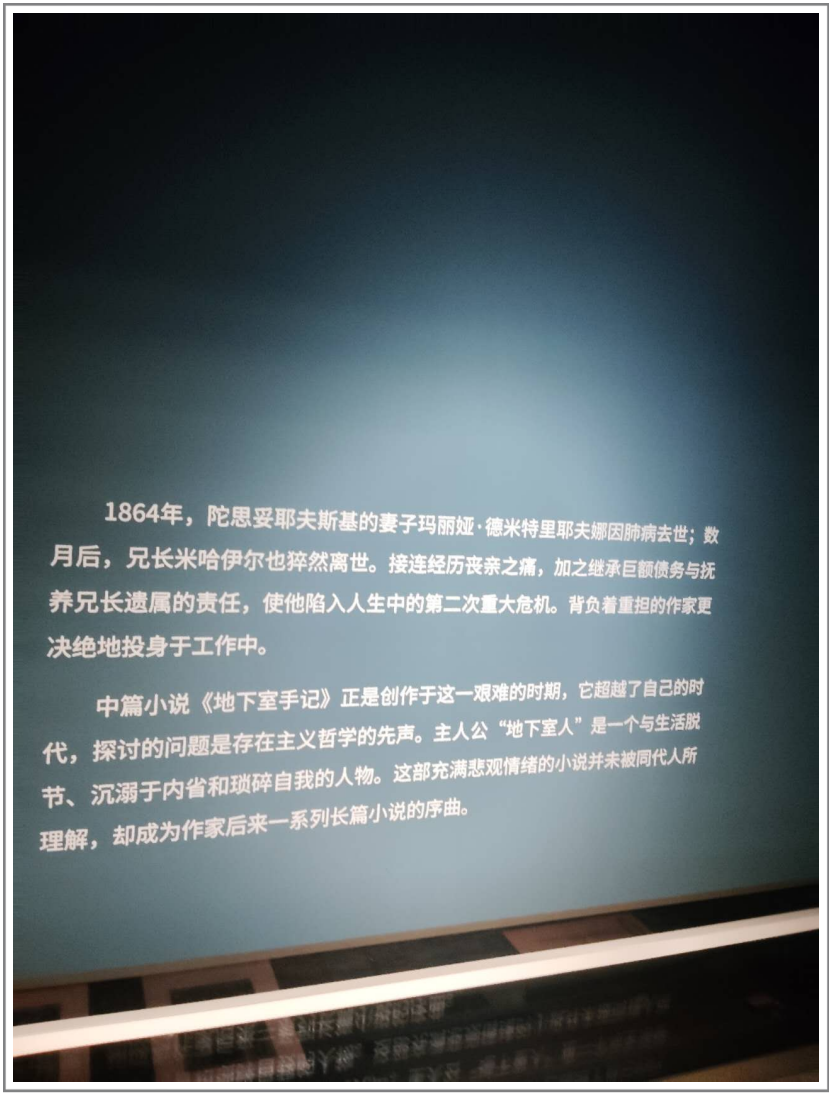
作者：ウラジーミル・ペトローヴィチ・バレネフ
制作年：1977年
作品：小説『虐げられし人々』挿絵
※ネリーは『虐げられし人々』に登場する貧しい少女で、物語の中で重要な役割を果たします。イワン・ペトローヴィチはこの小説の語り手であり、ネリーと深く関わる人物だ。二人の交流は、作品の感動的な核心の一つとなっている。

水彩画『虐げられし人々』



所収：画集『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー作品のための15枚の水彩挿絵』第14図
作者：ニコライ・ニコラエヴィチ・カラジン
制作年：1893年
掲載：雑誌『絵画評論』付録
※ニコライ・ニコラエヴィチ・カラジン（1842–1908）は、ロシアの画家・挿絵画家で、多くの古典文学作品の挿絵を手がけた。この水彩画は、ドストエフスキーの『虐げられし人々』を題材にしたシリーズの1点で、1893年に『絵画評論』誌の付録として刊行されたもの。

説明「混沌の生活、混沌の文学へ」



1864年、ドストエフスキーの妻マリヤ・ドミトリエフナが肺病で亡くなりました。その数か月後には兄ミハイルも急死しました。相次ぐ喪失に加え、巨額の負債の相続と兄の遺族の扶養という責任が彼にのしかかり、人生で二度目の大きな危機に陥りました。重い荷を背負った作家は、より一層仕事に没頭するようになりました。

中編小説『地下室の手記』は、まさにこの困難な時期に書かれました。この作品はその時代を超え、実存主義哲学の先駆けとも言える問題を探求しています。主人公「地下室の人」は、現実の生活から乖離し、内省と取るに足らない自己意識に溺れる人物です。このペシミズム（悲観主義） に満ちた小説は同時代の人々には理解されませんでしたが、作家のその後の一連の長編小説への序曲となりました。

※『地下室の手記』（1864年）は、ドストエフスキーの後期大作（『罪と罰』『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』）へと続く思想的基盤を築いた作品である。「地下室的人間」の過剰な自意識や自由意志への問いは、20世紀の実存主義哲学（ニーチェ、サルトルなど）に大きな影響を与えた。この作品は、当時の急進的批評家たちからは「病的すぎる」と酷評されたが、現在ではドストエフスキー文学の傑作の一つに数えられている。

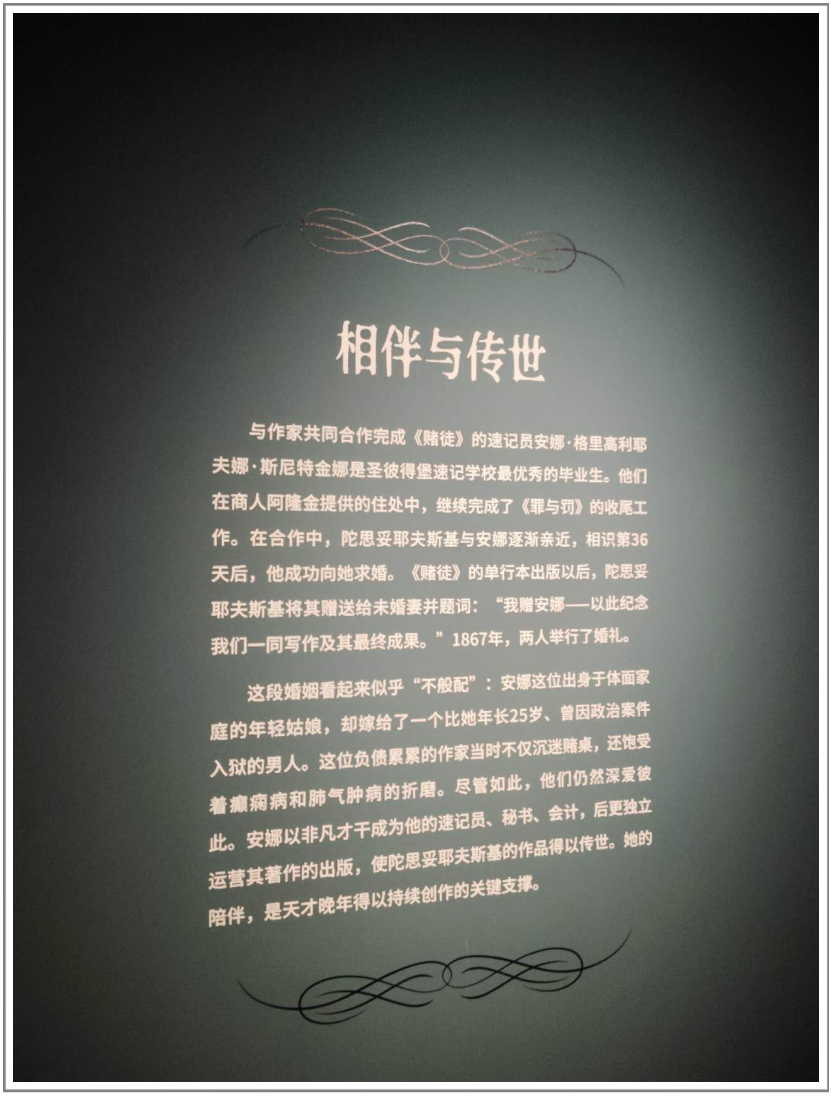
第四部　復活

奔放な愛人ポリーナ・スースロワに振り回され、心身ともに疲弊していた彼のもとに、兄の死で背負った莫大な借金と、出版社から突き付けられた「期限内に新作を書けなければ全著作権を没収」という鬼のような契約が追い打ちをかける。

絶体絶命の窮地で現れたのが、20歳の速記者アンナ・スニートキナ。彼女の驚異的な速記力を武器に、彼は正気を保ちながら長編『賭博者』をわずか26日間という前代未聞のスピードで書き上げ、執筆地獄を生き延びる。

この奇跡的な共闘がやがて愛情に変わり、彼はアンナに求婚。彼女という“最強のパートナー”を得て精神的な安定を取り戻した彼は、並行して執筆していた社会の深淵をえぐる大作『罪と罰』も見事に完成させ、作家としての完全なる復活を果たしたのだった。

説明「伴侶と遺産の継承」



作家と共に『賭博者』を完成させた速記者アンナ・グリゴリエヴナ・スニートキナは、サンクトペテルブルク速記学校の最も優秀な卒業生でした。二人は商人アロンキンが提供した住居で、『罪と罰』の最終章の作業も続けて行いました。共同作業を通じてドストエフスキーとアンナは次第に親しくなり、出会ってから36日目には、彼は彼女に求婚するこ

とに成功しました。『賭博者』の単行本が出版された後、ドストエフスキーはそれを婚約者に贈り、次のような献辞を添えました。

「私はアンナに贈る――私たちが共に書き、その最終的な成果を記念して。」

1867年、二人は結婚式を挙げました。

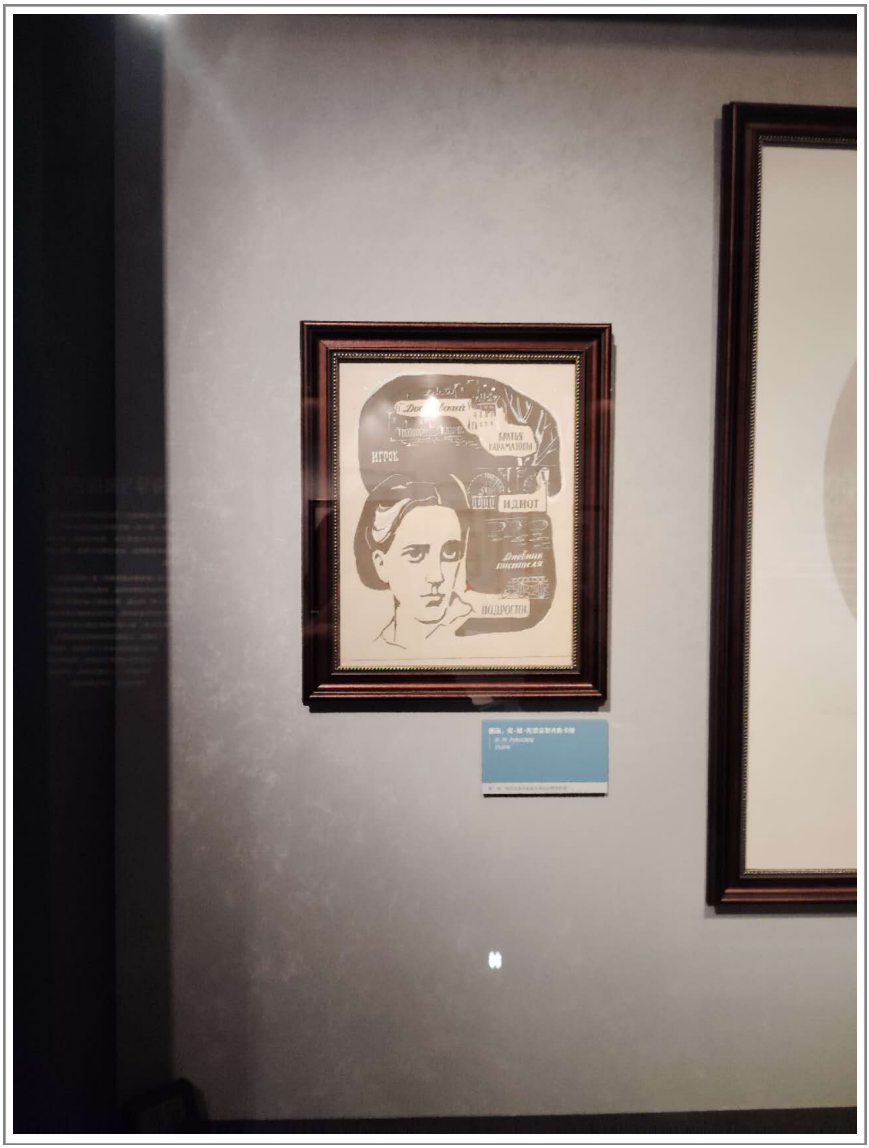
この結婚は一見「不釣り合い」に見えました。アンナは由緒ある家庭に生まれた若い娘でありながら、25歳年上で、かつて政治事件で投獄されたことのある男性と結婚したのです。この借金まみれの作家は、当時ギャンブルに没頭していただけでなく、てんかんと肺気腫に苦しめられていました。それでもなお、二人は深く愛し合いました。アンナは非凡な才能を発揮し、彼の速記者・秘書・会計係となり、後には独立して彼の著作の出版を手がけ、ドストエフスキーの作品を後世に伝えることに貢献しました。彼女の伴侶としての支えは、天才が晩年に創作を続けるための重要な力となったのです。

収蔵品「アンナ・グリゴリエヴナのフォルダ（複製）」



制作年：2001年

図画『アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ』



制作：アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ（ドストエフスキーの妻）のコラージュ
作者：イ・ア・アブラモワ
制作年：1966年

書籍『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー全集』 第1巻



出版地：サンクトペテルブルク
出版社：フョードル・ステロフスキー出版
出版年：1865年

※この全集は、ドストエフスキー自身が編集・改訂に関わった最初の全集の一つで、彼の創作活動の転換期（『罪と罰』執筆直前）に刊行された。ステロフスキー出版社から出されたこの版は、それまでに発表された作品を収録したもので、作家の生涯を通じて数回刊行された全集の最初の試みだった。

図画『小市民街7号』



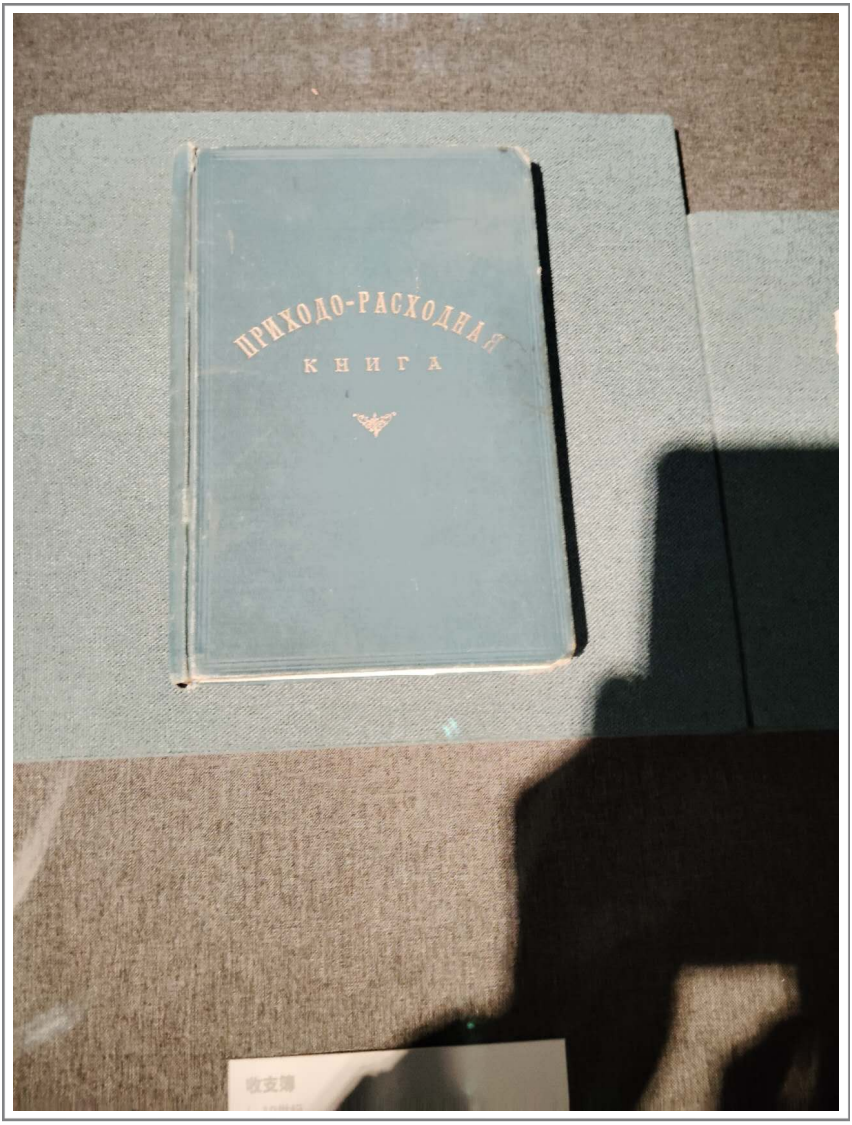
シリーズ：『ドストエフスキーのサンクトペテルブルク』シリーズより
作者：パリス・ゲンナジエヴィチ・コスモゴフ
制作年：1993年
解説：これはドストエフスキーが1864年から1867年にかけての作品
――ここで『罪と罰』と『賭博者』を執筆したとされています。

版画『アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ』

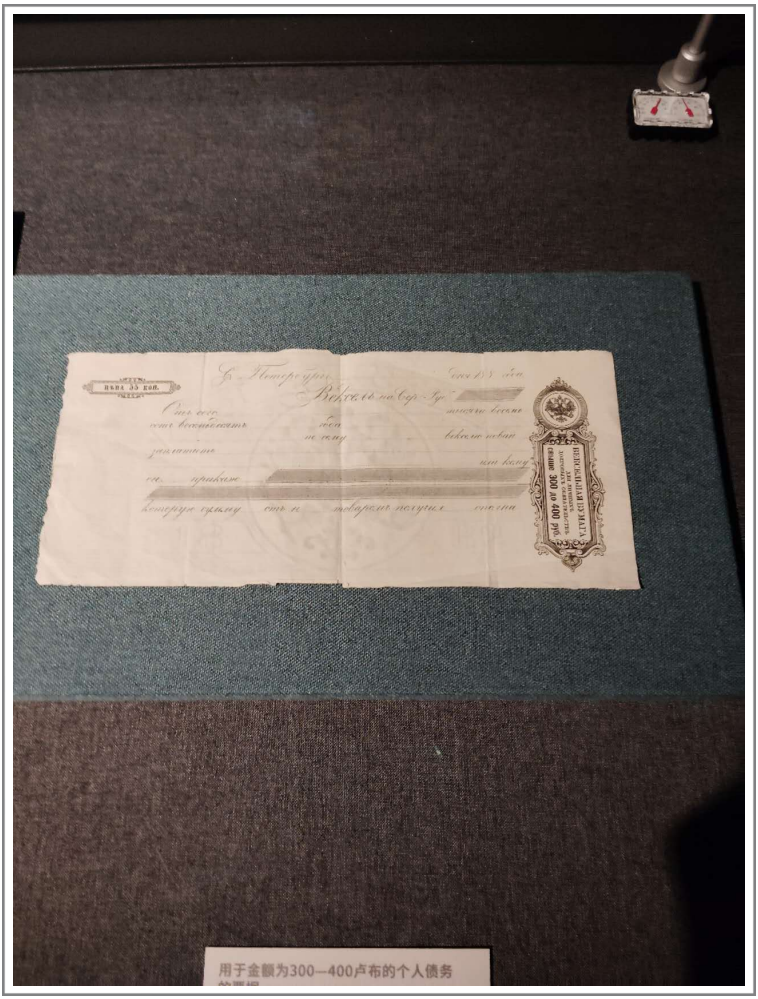


作者：レオニード・イワノヴィチ・ジコエフ
制作年：1988年

収蔵品「アンナ・グリゴリエヴナの収支簿」

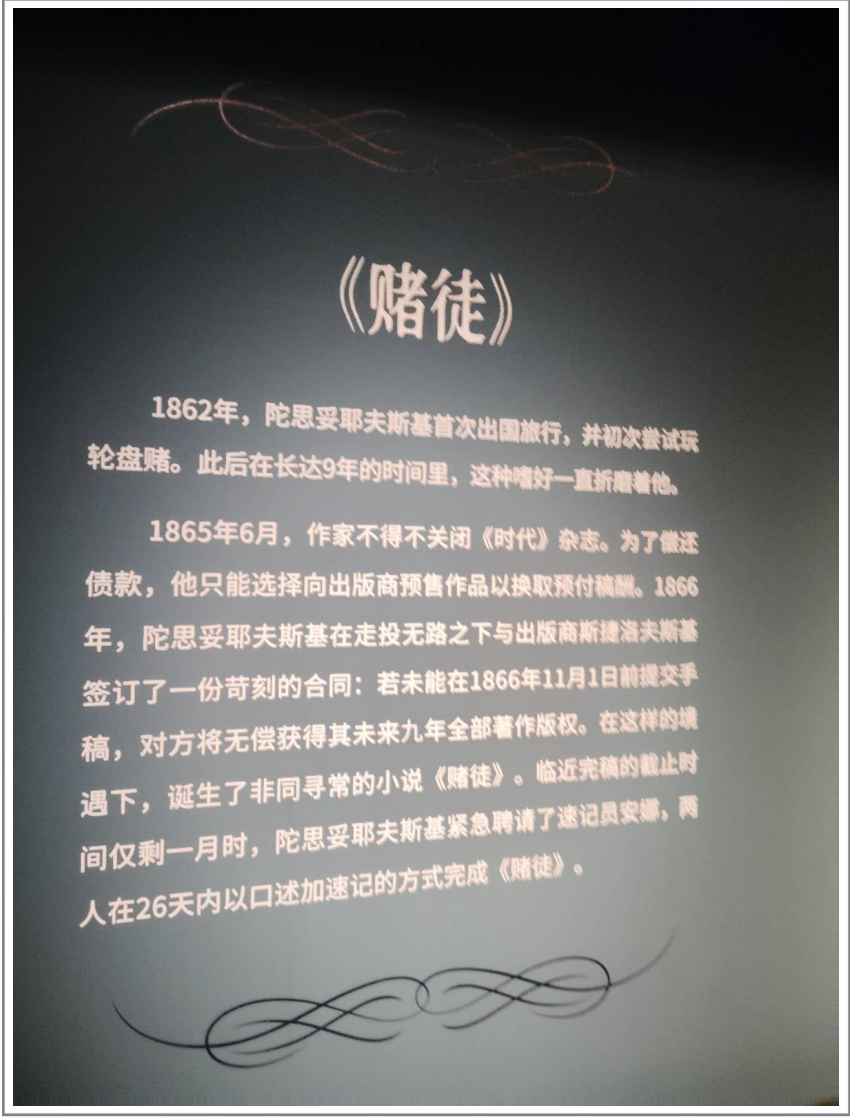


収蔵品「個人債務の為の手形（300〜400ルーブル分）」



年代：1880年代
※ドストエフスキーは、兄ミハイルの雑誌事業の失敗や自身のギャンブル依存症により、生涯にわたって深刻な借金に悩まされていた。1860年代から1880年代にかけて、彼は多くの手形や借用書を残しており、この展示品はそのうちの1点と考えられる。特に晩年は妻アンナの出版事業によって徐々に返済が進んだが、作家の経済的苦境は彼の創作活動に常に影を落としていた。『賭博者』が極度の締切逼迫の中で書かれたのも、借金返済のためであった。

説明『賭博者』



1862年、ドストエフスキーは初めての海外旅行に出かけ、そこで初めてルーレットに手を出しました。その後9年間にわたって、このギャンブル癖は彼を苦しめ続けました。

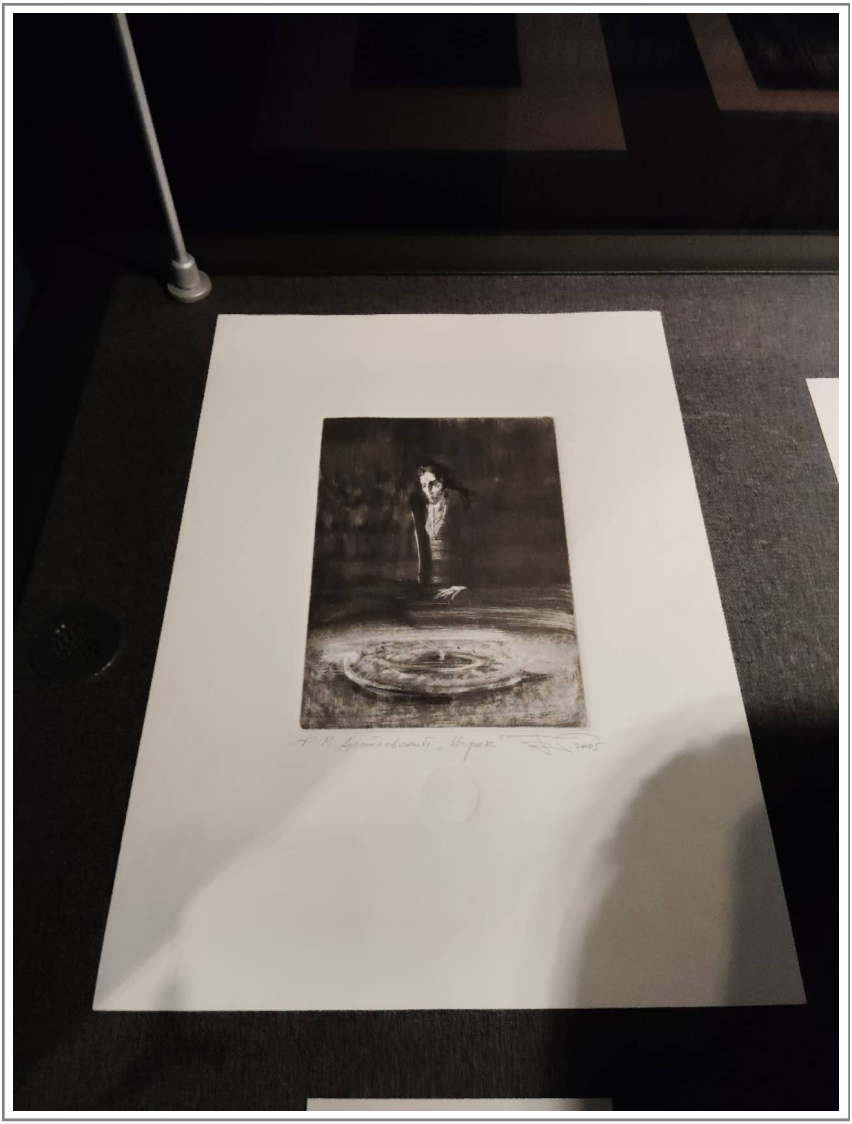
1865年6月、作家は雑誌『時代』を廃刊せざるを得なくなりました。借金を返済するためには、出版社に作品を前売りして前金を受け取る以

外に道はありませんでした。1866年、ドストエフスキーは追い詰められた末に、出版社ステロフスキーと過酷な契約を結びました。すなわち、1866年11月1日までに原稿を提出できなければ、今後9年間の全著作権を無償で譲渡するという内容でした。

このような状況下で、まさに異例の小説『賭博者』 が生まれました。締切まであと1か月というところで、ドストエフスキーは急遽速記者アンナ（アンナ・グリゴリエヴナ・スニートキナ）を雇い入れ、二人はわずか26日間で口述筆記と速記を駆使して『賭博者』を書き上げました。

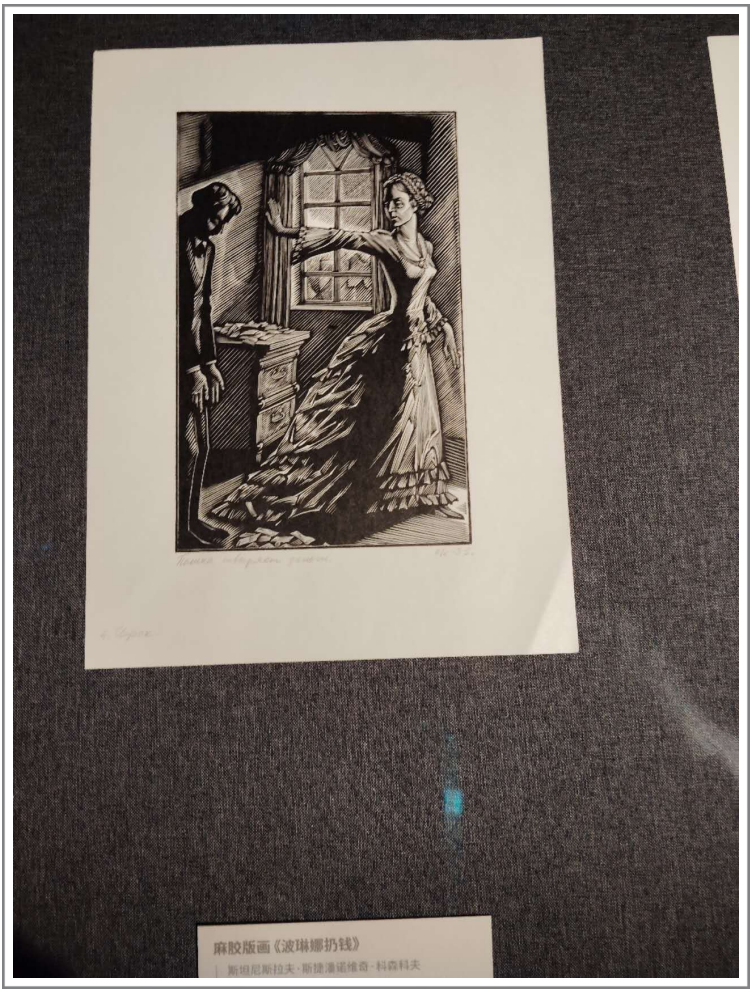
※この26日間という驚異的な執筆速度は、アンナの速記技術とドストエフスキーの集中力によるものであった。この共同作業がきっかけで二人は親密になり、1867年に結婚した。先述の通り、アンナはその後、作家の秘書・会計・出版責任者として、彼の創作活動を生涯支え続けました。『賭博者』は、ドストエフスキー自身のギャンブル依存症の経験が色濃く反映された、自伝的要素の強い作品としても知られている。

石版画『アレクセイ・イワノヴィチ』



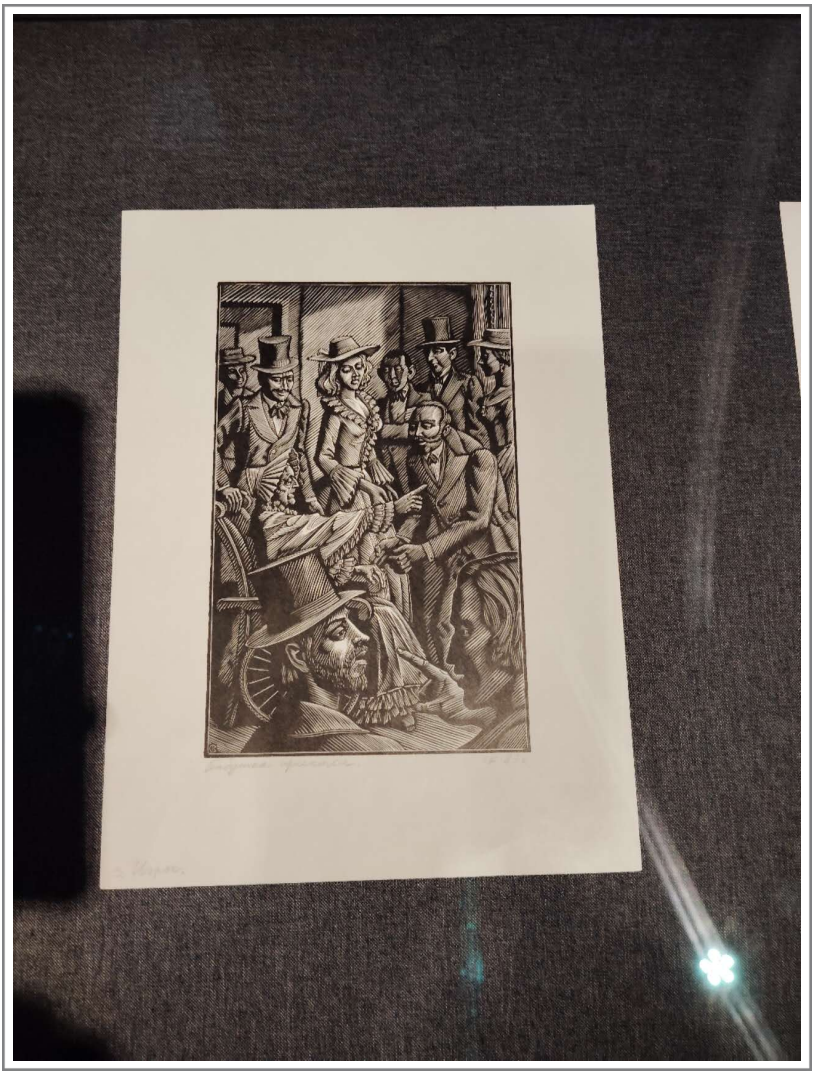
作者：ヴァレリー・ヴァシリエヴィチ・ババノフ
制作年：2005年
※アレクセイ・イワノヴィチは、ドストエフスキーの小説『賭博者』（1866年）の主人公である。若い家庭教師で、ルーレットに没頭し、金と恋愛の間で引き裂かれていく人物として描かれている。

麻膠版画『ポリーナが金を投げる』



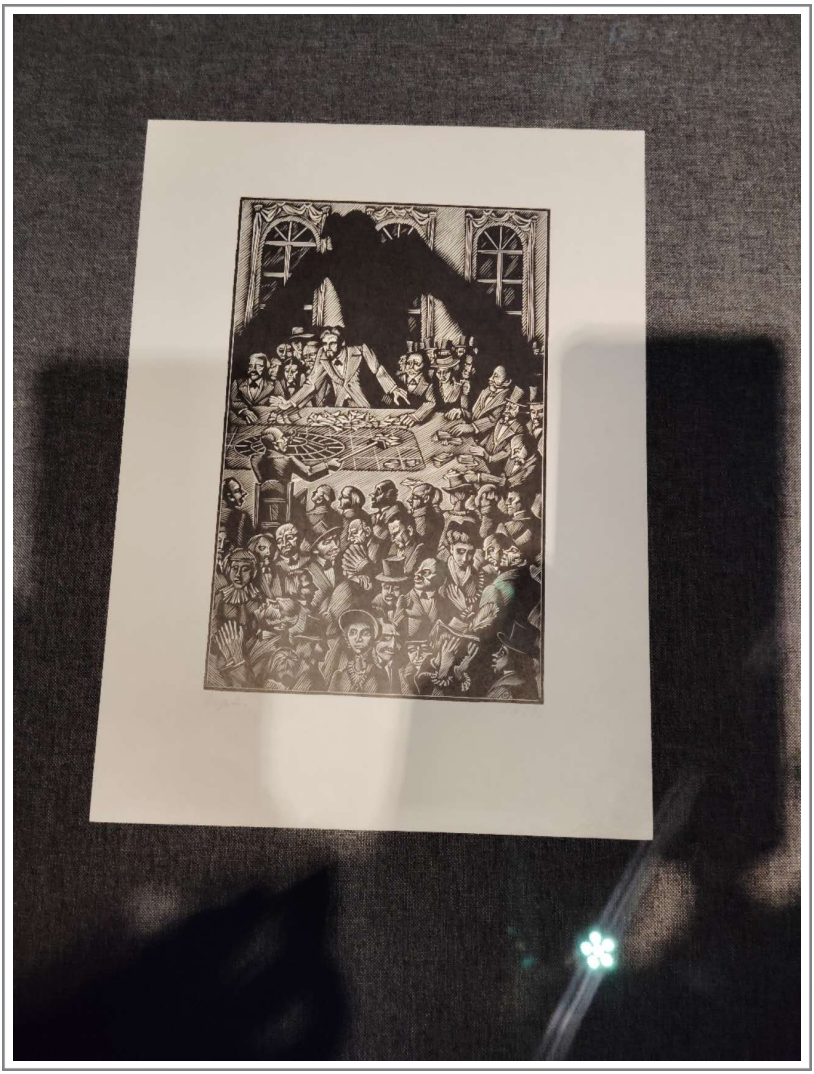
作者：スタニスラフ・ステパノヴィチ・コセンコフ
制作年：1983年
作品：小説『賭博者』挿絵
※本作に登場するポリーナ・アレクサンドロヴナ・プラスコーヴィヤは、『賭博者』のヒロインで、主人公アレクセイ・イワノヴィチが恋い焦がれる女性である。なお、このポリーナは、ドストエフスキーがアンナと出会う前、ヨーロッパで複雑な恋愛関係になったポリーナ・スースロワをモデルとしている。

麻膠版画『祖母の到着』



作者：スタニスラフ・ステパノヴィチ・コセンコフ
制作年：1983年
作品：小説『賭博者』挿絵
※『賭博者』の中盤で、「祖母（バーブシュカ）」が登場する。彼女はモスクワから訪れた老いた地主で、ルーレットに没頭する周囲の人間たちをよそに、自らも賭博に熱中するという名場面がある。

麻膠版画『賭局』



作者：スタニスラフ・ステパノヴィチ・コセンコフ
制作年：1983年
作品：小説『賭博者』挿絵
※「賭局」は、ルーレットを中心としたカジノの場面を描いた作品だ。『賭博者』の中で最も緊張感あふれる瞬間――主人公たちが一攫千金を夢見てルーレットに熱中する様子が表現されている。

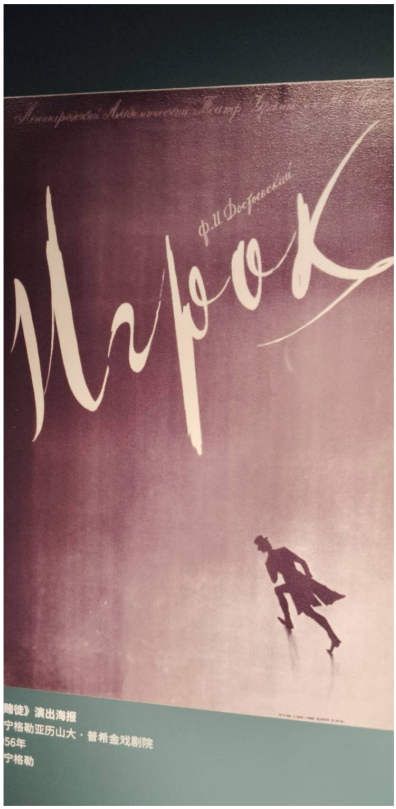
上演シーン「プーシキン話劇場『賭博者』」



※プーシキン話劇場（現：アレクサンドリンスキー劇場）は、サンクトペテルブルクの名門劇場で、ドストエフスキー作品の舞台化も数多く行われている。

公演ポスター『賭博者』

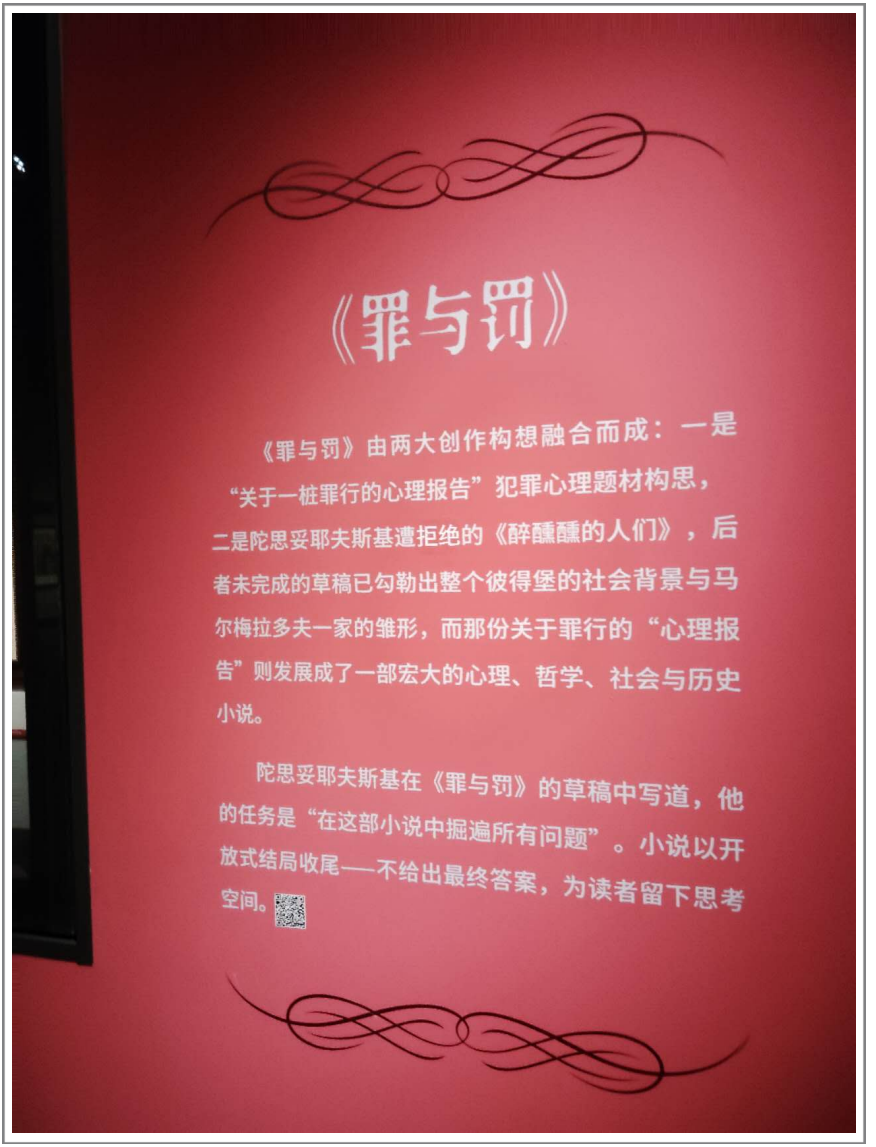




「『賭博者』公演ポスター」
劇場：レニングラード・アレクサンドル・プーシキン劇場
年代：1956年
場所：レニングラード（現サンクトペテルブルク）

「プロコフィエフのオペラ『賭博者』公演プログラム表紙」
制作：ヴァネムイネ劇場（エストニア、タルトゥ市）
劇場創立100周年記念公演のためのプログラム
年代：1970年

説明『罪と罰』



『罪と罰』は、二つの創作構想が融合して生まれました。一つは「ある犯罪の心理的報告」という犯罪心理テーマの構想、もう一つはドストエフスキーが拒否された『酔っぱらった人々』（『醉醺醺的人们』）という作品です。後者の未完成の草稿には、すでにペテルブルクの社会背

景全体とマルメラードフ一家の原型が描き出されていました。そして、あの犯罪に関する「心理的報告」は、壮大な心理的・哲学的・社会的・歴史的小説へと発展していきました。

ドストエフスキーは『罪と罰』の草稿の中で、自身の課題を次のように記しています。「この小説において、あらゆる問題を掘り尽くすこと。」

この小説は開放的な結末で締めくくられています――すなわち、最終的な答えを提示せず、読者に考える余地を残しているのです。

※『酔っぱらった人々』 は、ドストエフスキーが『罪と罰』以前に構想していた作品で、貧困とアルコール依存症に苦しむ人々を描こうとしたものであった。この構想は『罪と罰』の中にマルメラードフ一家のエピソードとして吸収された。「あらゆる問題を掘り尽くす」という言葉は、この作品が単なる犯罪小説ではなく、人間存在・道徳・自由・神・社会正義などあらゆるテーマを網羅する総合小説として書かれたことを示す。

巻頭絵『罪と罰』



作者：ウラジーミル・ペトローヴィチ・バノフ
制作年：1980年

影絵・インスタレーション『罪と罰』



※すべて『罪と罰』の登場人物。おそらく、左から金貸しのアリョーナ、スヴィドリガイロフの夢に出てきた少女（または彼が自殺に追い込んだ使用人の娘？）、ロージャの救済を導くソーニャ（またはロージャの妹ドーニャ？）、塗装職人ニコライ、ロージャの妹ドーニャの婚約者であるルージン。

図画『罪と罰』



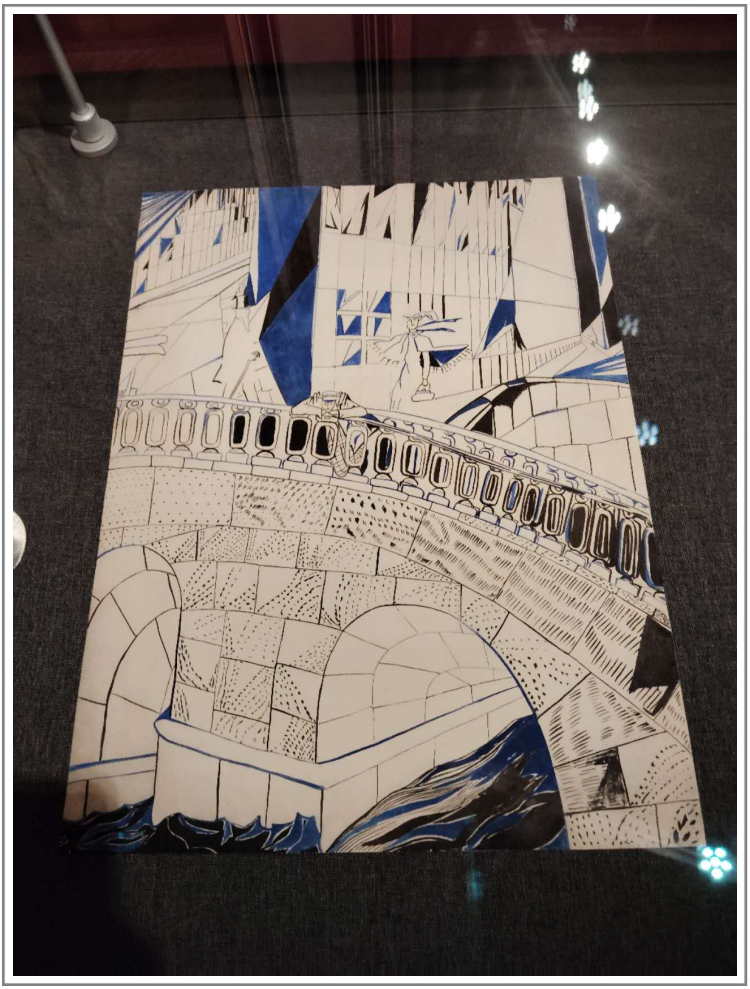
作者：ヴャチェスラフ・ユリエヴィチ・ザベリン
制作年：1980年
※ヴャチェスラフ・ユリエヴィチ・ザベリンは、ロシアの現代画家・グラフィックアーティストで、多くの古典文学作品の挿絵を手がけている。本作は、ドストエフスキーの代表作『罪と罰』をテーマにした1980年の作品である。

図画『マルメラードフ』



作者：ヴャチェスラフ・ユリエヴィチ・ザベリン
制作年：1980年
※マルメラードフは、『罪と罰』に登場する重要な人物である。元は官吏であったが酒びたりの生活に甘んじて、貧困にあえぐ家族を顧みずに破滅する。彼の長女ソーニャは、それにより家族を養うために自らの体を売ることを余儀なくされる。マルメラードフはペテルブルクの底辺社会を象徴する存在であり、彼の語る物語を通してラスコーリニコフの心の中で「殺人」という考えがさらに深まっていくという、作品の中枢を担う人物だ。

図画『罪と罰』



作者：ナジェージダ・ウラジミロヴナ・レーモントワ
制作年：1918年

※ナジェージダ・ウラジミロヴナ・レーモントワは、ロシアの画家・グラフィックアーティストで、1910年代から1920年代にかけて活動した。本作は1918年という、ロシア革命直後の激動期に制作された『罪と罰』の挿絵である。なお、これは終盤、兄のロージャの異様な様子を妹のドーニャが初めて目にする場面である。

図画『アヴドーチヤ・ラスコーリニコワ』



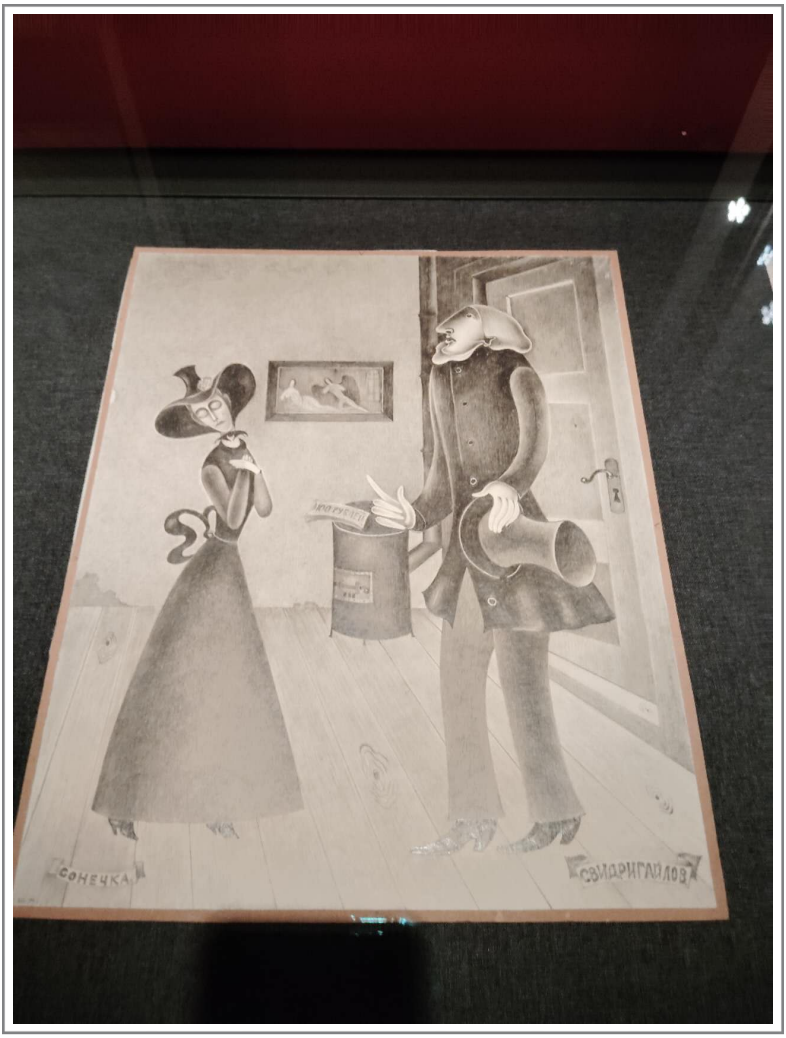
作者：アレクセイ・アレクセーエヴィチ・シュマリノフ
制作年代：1930年代
※アヴドーチヤ・ロマノヴナ・ラスコーリニコワ（通称ドーニャ）は、『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフの妹だ。誇り高く、自己犠牲的な性格で、兄を深く愛し、彼の窮地を救おうと奔走する重要な女性キャラクターである。作者はソ連時代のグラフィックアーティストで、父のД.А.シュマリノフも有名な挿絵画家だという。

図画『呼び鈴を引きに行く』



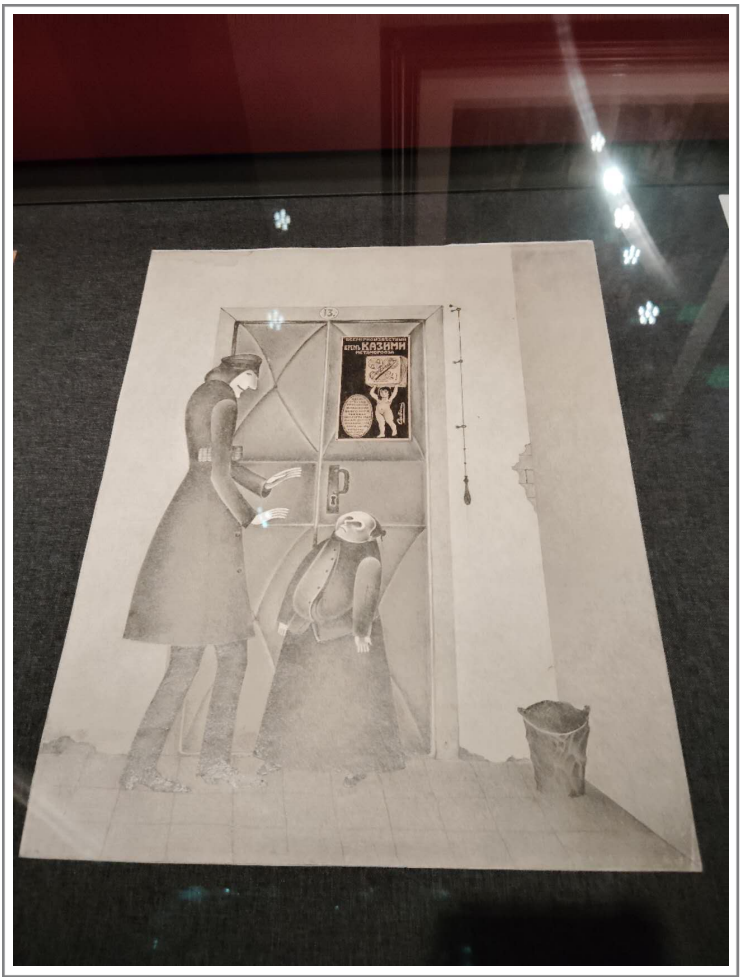
作者：アレクセイ・アレクセーエヴィチ・シュマリノフ
制作年代：1930年代
※「呼び鈴を引きに行く」は、『罪と罰』の冒頭付近の名場面だ。ラスコーリニコフは、殺人を実行する前に「試しに」高利貸しの老婆の部屋を訪れ、呼び鈴を引いて反応を確かめる。この行為は、彼の中での「準備」と「迷い」を象徴する瞬間である。

図画『ソーネチカとスヴィドリガイロフ』



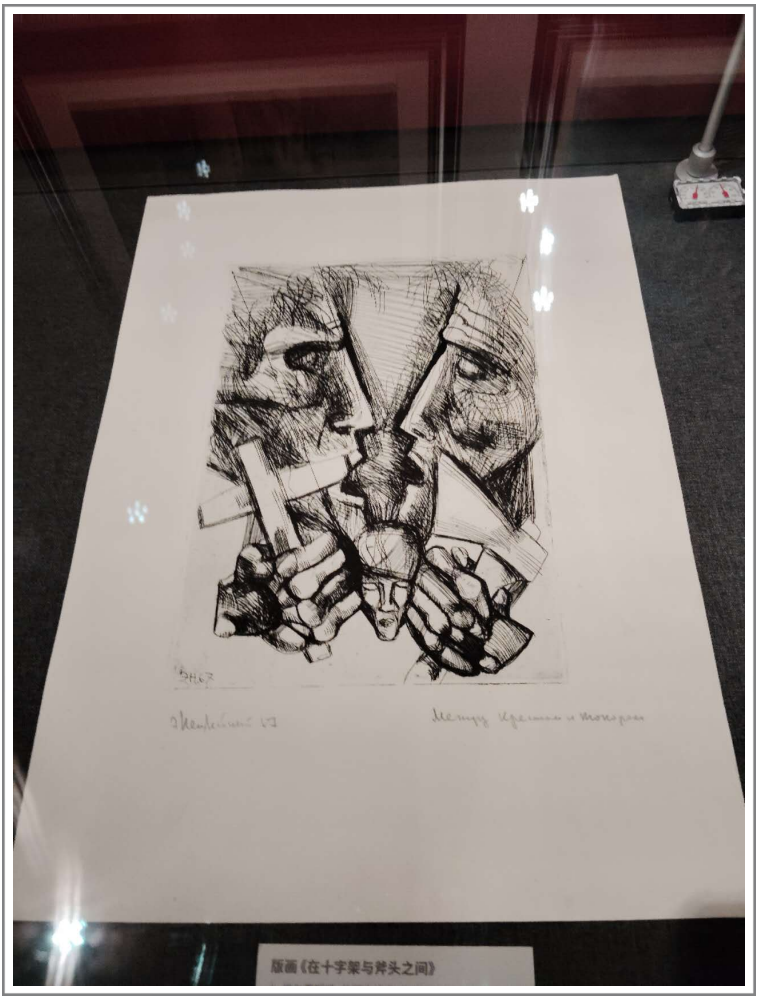
作者：ミハイル・ミハイロヴィチ・シェミャキン
制作年：1965年
※ソーネチカ（ソーニャ） は『罪と罰』のヒロインで、貧しいながらも純粋な信仰を持ち、自らの身を犠牲にして家族を支える女性だ。スヴィドリガイロフ は、退廃的でニヒリスティックな人物であり、ラスコーリニコフとは「自らの罪とどう向き合うか」という点で対照的な存在として描かれる。

図画『ラスコーリニコフと高利貸しの老婆』



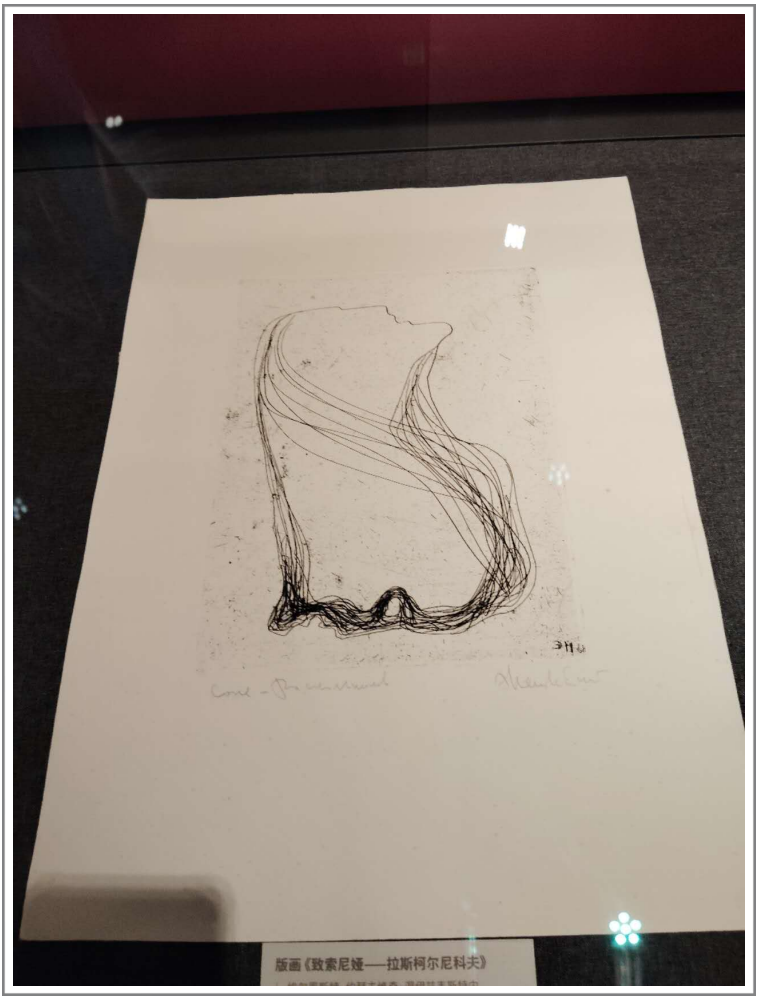
作者：ミハイル・ミハイロヴィチ・シェミャキン
制作年：1977年
※これは『罪と罰』における有名な場面のひとつ――主人公ラスコーリニコフが高利貸しの老婆（アリョーナ・イワーノヴナ）を斧で殺害する直前を描いた作品だ。

版画『十字架と斧の間で』



作者：エルンスト・ヨシフォヴィチ・ネイズヴェストヌイ
制作年：1967年
※エルンスト・ネイズヴェストヌイ（1925–2016）は、ソ連の非公式芸術家・彫刻家で、自由な表現を求めて体制と対立したことで知られている。彼の作品は力強く、しばしば人間の苦悩や精神性をテーマにしている。この作品は『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフが直面する二つの道――信仰による贖罪（十字架） か、理論に基づく闘争（斧） か――を象徴的に表していると考えられる。

版画『ソーニャへ ― ラスコーリニコフ』



作者：エルンスト・ヨシフォヴィチ・ネイズヴェストヌイ
制作年：1968年
※『十字架と斧の間で』（1967年）と同じネイズヴェストヌイの作品で、その翌年に制作された『罪と罰』挿絵。タイトルは「ソーニャ（ソーネチカ）へ」という献辞の形を取っており、ラスコーリニコフがソーニャに告白し、彼女の信仰に触れる象徴的な場面を表現したものと考えられる。

石版画『罪』



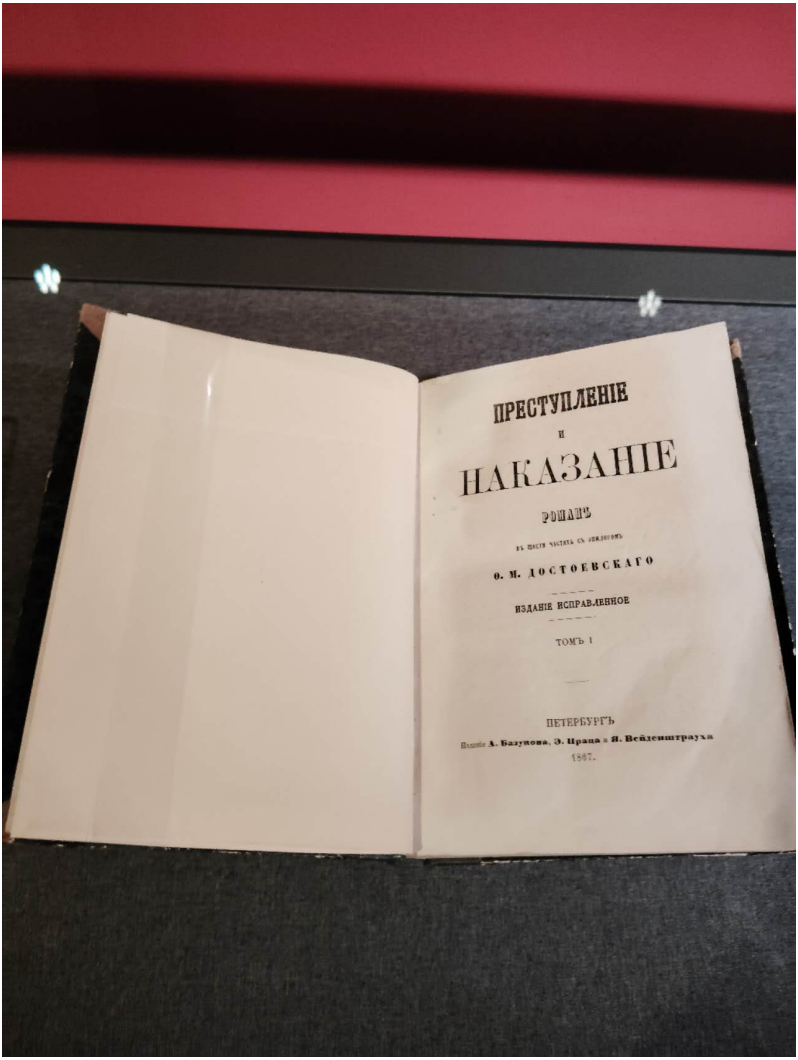
作者：ヴィクトル・セミョーノヴィチ・ヴェリネル
制作年：1974年
※ヴィクトル・セミョーノヴィチ・ヴェリネル（1918–2004）は、ソ連のグラフィックアーティスト・版画家で、多くのロシア古典文学の挿絵を手がけた。これはスヴィドリガイロフが救いを求めてロージャの妹ドーニャを追い回す光景を象徴的に示していると思われる。

石版画『罪』



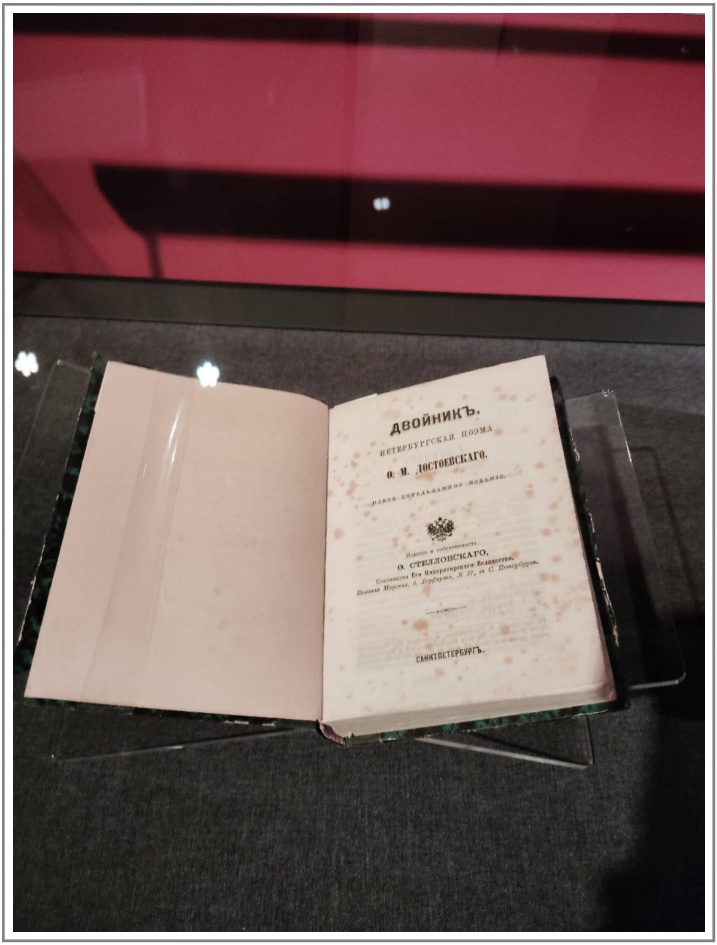
作者：ヴィクトル・セミョーノヴィチ・ヴェリネル
制作年：1974年
※ロージャによる殺害場面を象徴的に再現した作品。中央にいるのが金貸しアリョーナ、床に倒れているのがその妹のリザヴェータ、唖然として立ち尽くす男がロージャだと思われる。

書籍『罪と罰』



出版地：サンクトペテルブルク
出版社：ア・バズノフ、エ・プラッツ、ス・ヴィマンシュトラウフ出版社
出版年：1867年版
※この1867年版は、『罪と罰』の初版単行本（第1巻・第2巻）である。1866年に雑誌『ロシア報知』に連載された後、翌年に単行本化された。

書籍『ドストエフスキー作品合本』



出版地：サンクトペテルブルク
出版社：フョードル・ステロフスキー出版
出版年：1866年版
※この1866年版の合本は、ステロフスキーから出版されたものだ。1866年は、ドストエフスキーが『罪と罰』を執筆中であり、同時に『賭博者』をアンナと共に26日間で書き上げた激動の年でもある。ステロフスキーは、ドストエフスキーと過酷な契約（1866年11月1日までに新作を納めなければ、今後9年間の全著作権を無償譲渡するという内容）を結んだ出版社としても知られている。

図画『中庭』



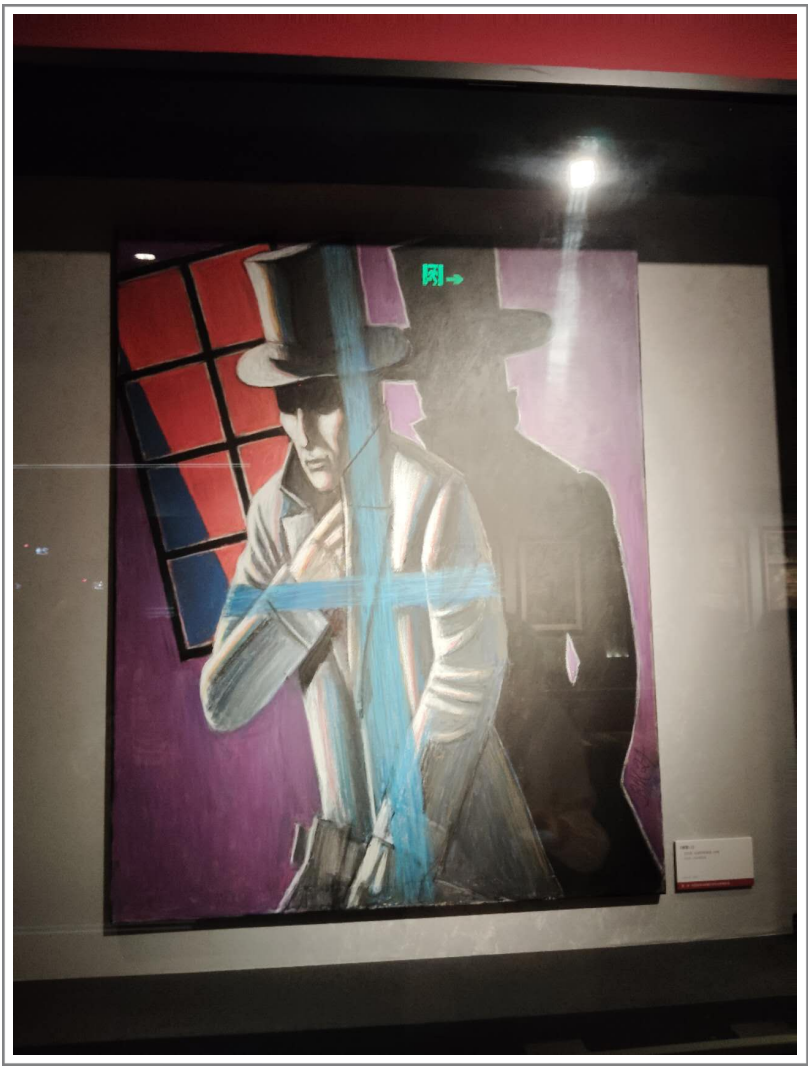
作者：ヴァレリー・アンドレエヴィチ・ミシン
制作年：2023年～2024年
※ミシンは現代ロシアの画家で、近年ドストエフスキーをテーマにした作品を制作している。おそらくこれはロージャが殺害現場へ向かう途中、誰にも遭遇せず中庭（ д в о р） を通り抜けた場面であろう。

図画『階段』



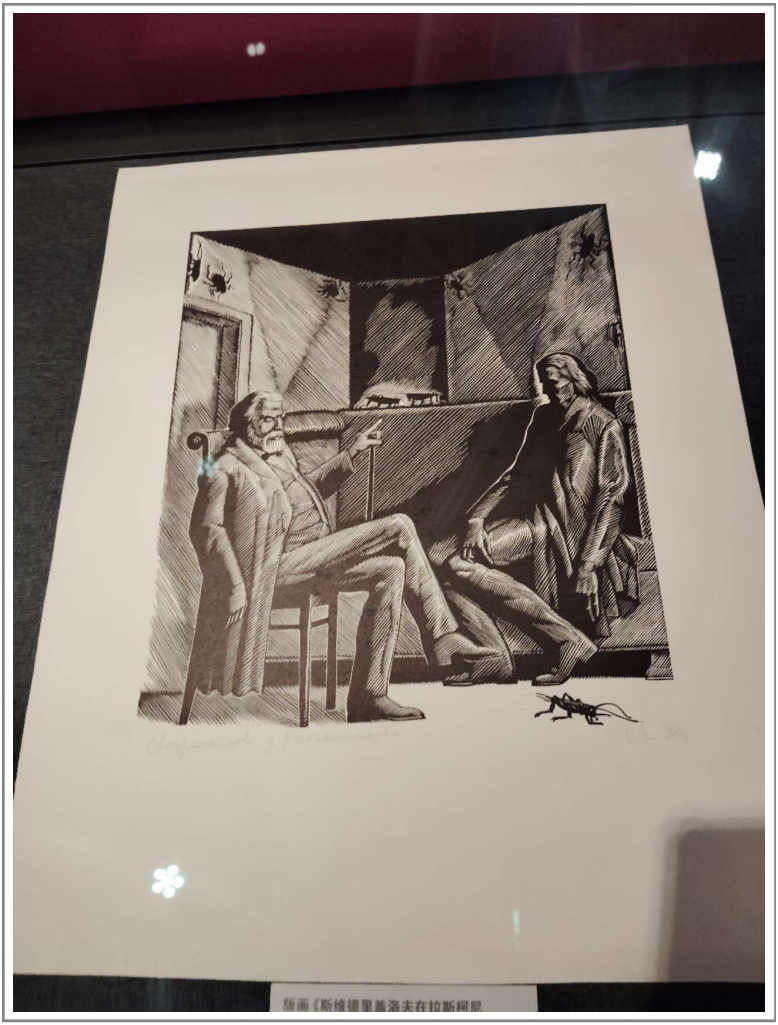
作者：ヴァレリー・アンドレエヴィチ・ミシン
制作年：2023年～2024年
※先ほどの場面の続きであると考えられる。建物に入り、四階まであがっていく。おそらく、犯行前の調査場面ではない。ロージャの陰に斧の柄らしきものが描かれている。

図画『側影』



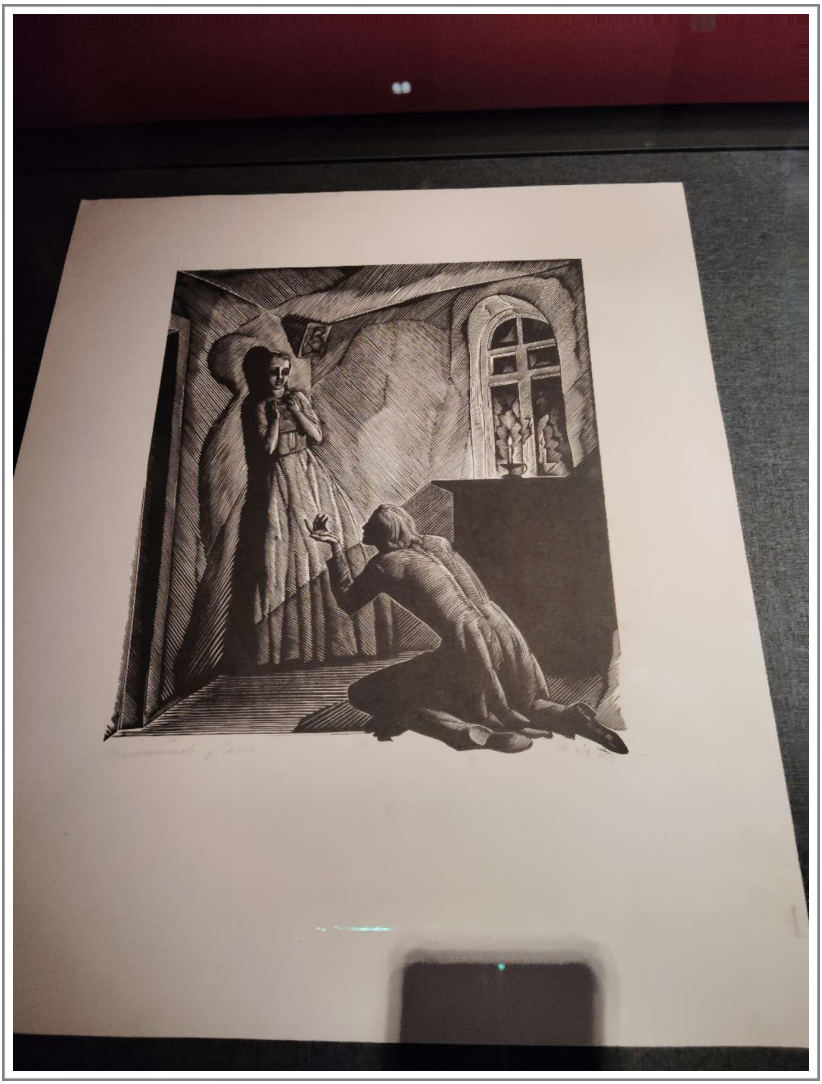
作者：ヴァレリー・アンドレエヴィチ・ミシン
制作年：2023年～2024年
作品：『罪と罰』挿絵
※同じミシンの作品で、同じ時期に制作されたシリーズの一環。『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフの内面的な二面性や影の部分を象徴していると考えられる。

版画『スヴィドリガイロフがラスコーリニコフのもとに』



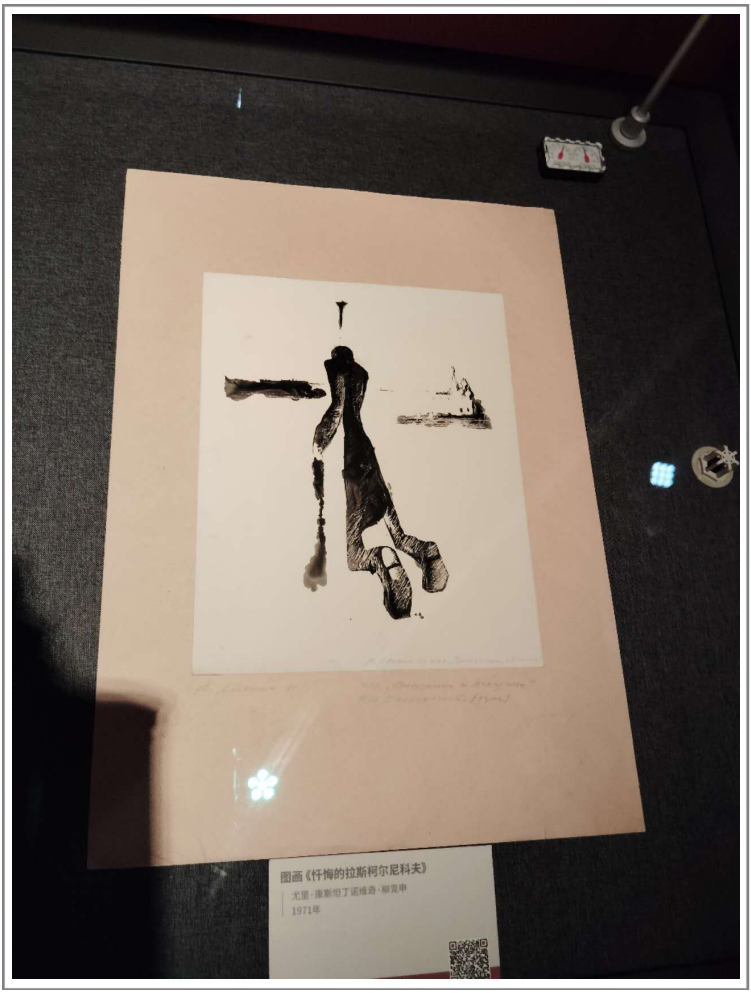
作者：スタニスラフ・ステパノヴィチ・コセンコフ
制作年：1970年
※コセンコフは『貧しき人々』や『賭博者』の挿絵を制作していた作家で、1970年にも『罪と罰』の挿絵も手がけている。スヴィドリガイロフは、退廃的でニヒリスティックな人物であり、ラスコーリニコフと同じように罪を背負う、もう一人の自分（分身） とも言える存在である。ただ、その罪に対する見方は明確な対照性を持っている。

版画『ラスコーリニコフがソーニャのもとに』



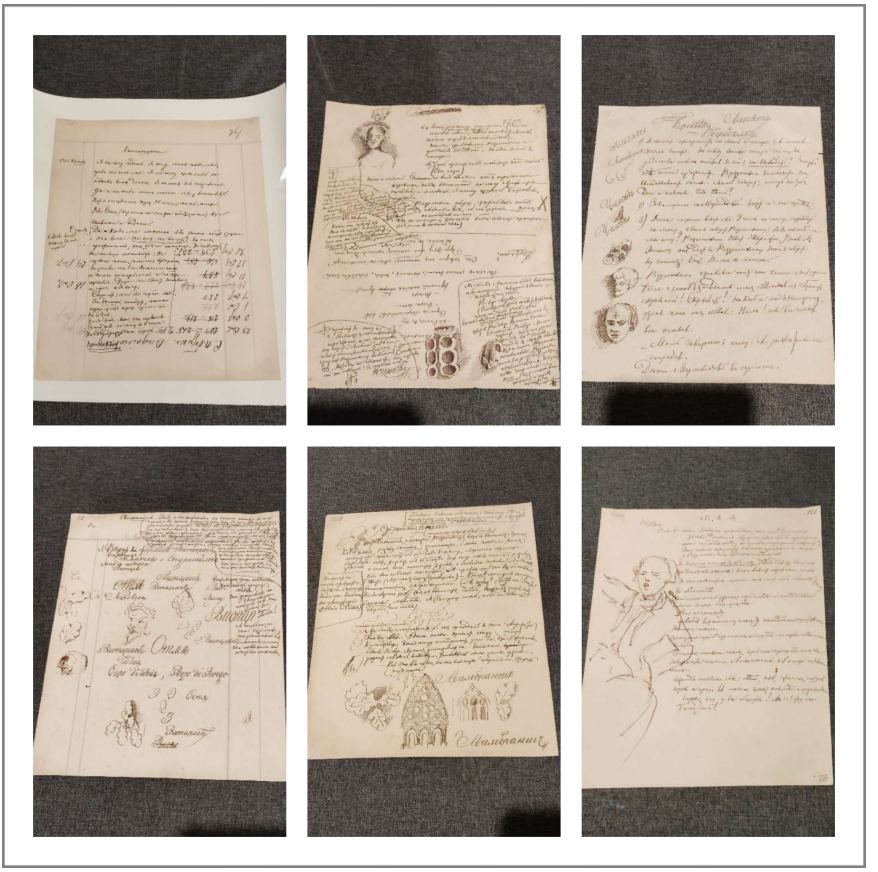
作者：スタニスラフ・ステパノヴィチ・コセンコフ
制作年：1970年
※「ラスコーリニコフがソーニャのもとに」は、小説の中でも最も重要な場面の一つ——ラスコーリニコフが自らの罪をソーニャに告白し、彼女の信仰と向き合う瞬間を描いている。贖罪と救済のテーマが象徴的に現れる展開だ。

図画『悔悛するラスコーリニコフ』



作者：ユーリ・コンスタンティノヴィチ・リュクシン
制作年：1971年
※ユーリ・コンスタンティノヴィチ・リュクシン（1934–2000）は、ソ連・ロシアのグラフィックアーティストで、多くのロシア古典文学の挿絵を手がけた。本作は『罪と罰』の終盤、主人公がソーニャの前で自らの罪を告白し、悔い改める場面を描いたものと考えられる。これは小説全体のクライマックスの一つであり、ラスコーリニコフの精神的転換点を象徴する瞬間である。

原稿『罪と罰』（複製）



複製作者：ユーリ・ドミトリエヴィチ・アレハノフ
制作年代：1970年代

※この手稿は、『罪と罰』執筆時の原稿を複製したものだ。アレハノフによる複製作業は、1970年代以降、『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』など、主要な長編作品の原稿複製に及んでいる。原稿には、推敲の跡や構成の変更、速記法で書かれた草稿など、作家の思考過程が色濃く残されている。

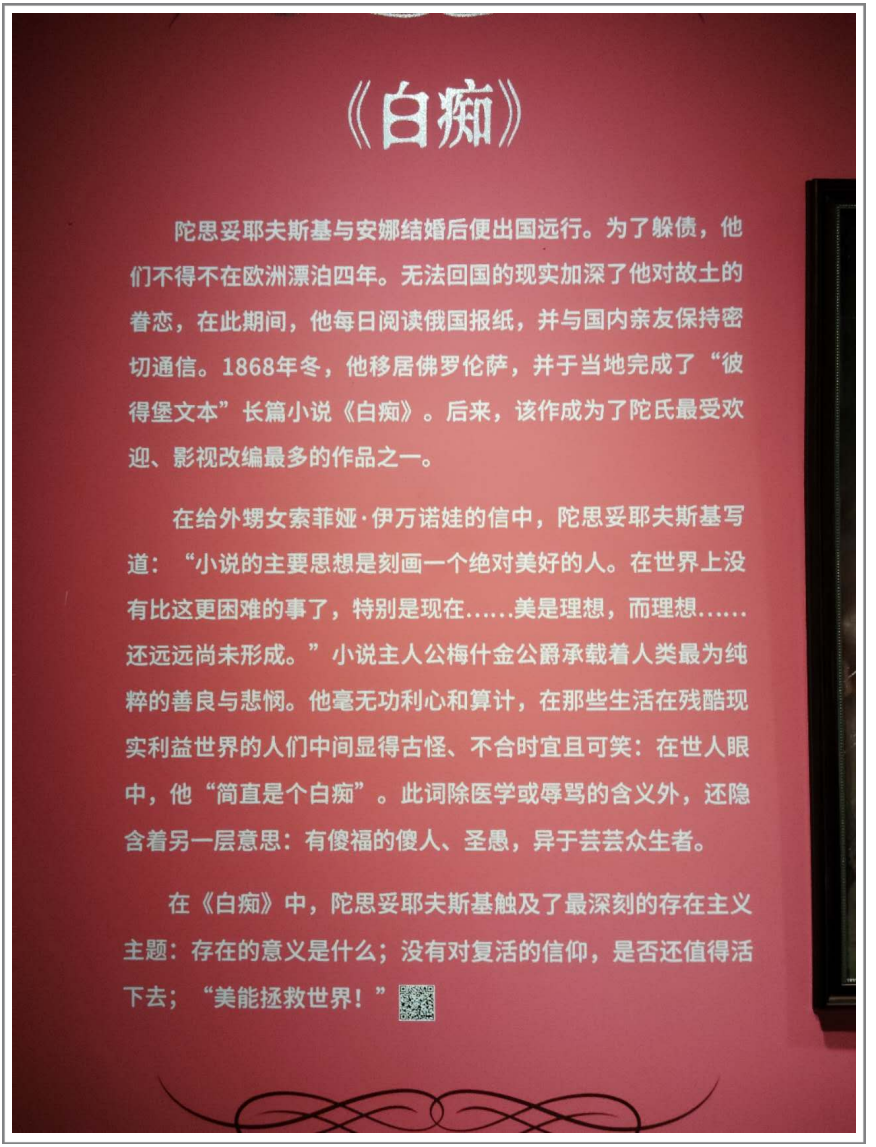
第五部　熟成

アンナとの結婚生活は欧州放浪の貧窮から始まり、『白痴』を書き上げた矢先に生後3カ月の娘ソフィアを夭折させる悲しみに見舞われるが、彼女の献身的な支えにより次女リュボフ、長男フョードルと子供にも恵まれ、彼は父としての喜びを知る。

ロシアへ帰国後、ニヒリズムの危険な熱病を描いた『悪霊』や“偶然の家族”の崩壊をテーマにした『未成年』を次々と発表し、作家としての射程を劇的に拡張させていく。

そしてこの時期最大の武器となったのが、自らが一人編集長を務める月刊誌『作家の日記』。時事評論から私小説までを縦横無尽に綴り空前の支持を得て、アンナが出版・財務を一手に引き受けたことで、彼はついに“執筆だけ”に没頭できる理想の創作環境を手中に収めたのだった。

説明『白痴』



ドストエフスキーはアンナと結婚した後、海外へと旅立ちました。借金から逃れるため、彼らは4年間もの間ヨーロッパを流浪せざるを得ませんでした。帰国できないという現実は彼の故郷への想いを一層深め、その間も毎日ロシアの新聞を読み、国内の親戚や友人と緊密に手紙を交

わし続けました。1868年の冬、彼はフィレンツェに移り住み、そこで「ペテルブルク・テクスト」の長編小説『白痴』を完成させました。この作品は後に、ドストエフスキー作品の中でも最も人気が高く、映像化された回数が多い作品の一つとなりました。

姪のソフィヤ・イワノワに宛てた手紙の中で、ドストエフスキーはこう記しています。

「この小説の主要な思想は、絶対的に美しい人間を描くことである。世界上にこれほど困難なことはない。特に今は……美は理想であり、理想は……まだほど遠く形成されていない。」

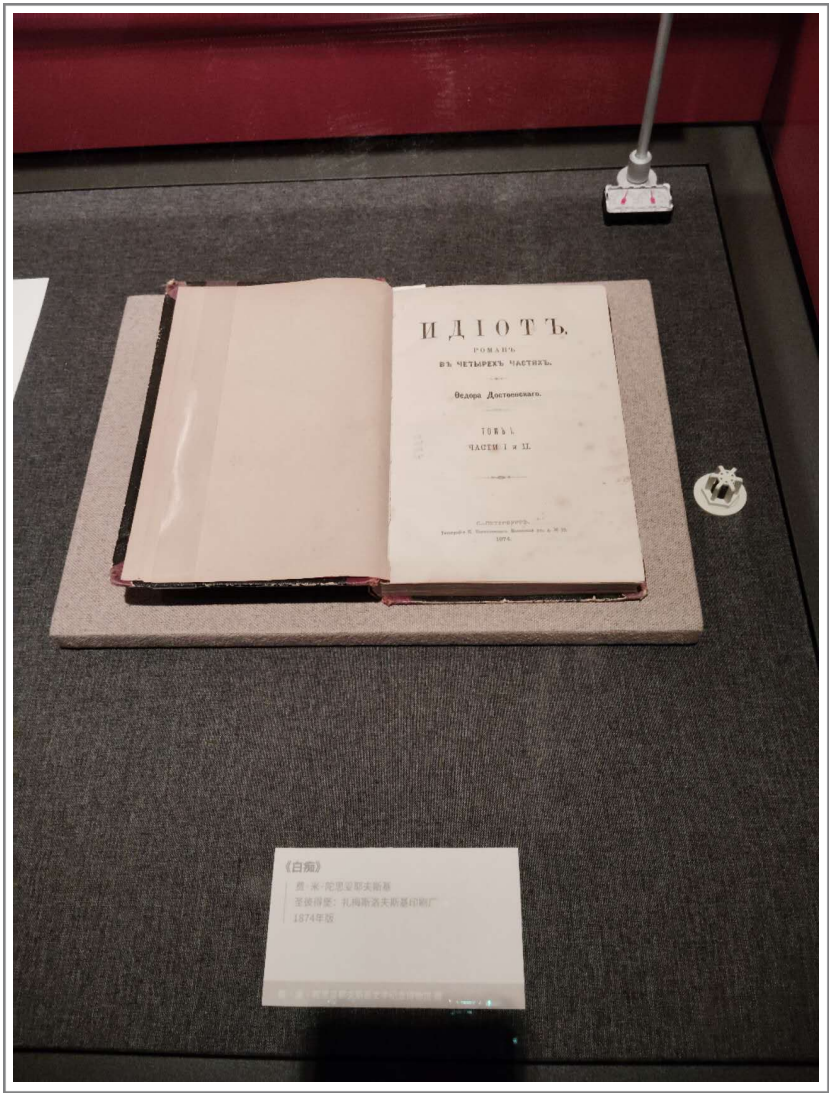
主人公ムイシュキン公爵は、人間が持ちうる最も純粋な善良さと慈悲を体現しています。彼には功利心や打算がまったくなく、残酷な現実の利害の世界に生きる人々の間では、奇妙で、場違いで、滑稽に見えます。世間の目には、彼は「まったくの白痴（イジオット）」に映るのです。この言葉には、医学的な診断名や侮蔑的な意味のほかに、もう一つの含意が隠されています——「幸運な愚か者」「聖愚」、すなわち大衆とは異なる存在という意味です。

『白痴』の中でドストエフスキーは、最も深遠な実存主義的テーマに切り込みました。存在の意味とは何か、復活への信仰なしに生きる価値があるのか、そして——

「美は世界を救う！」

※「ペテルブルク・テクスト」とは、サンクトペテルブルクを舞台にした文学作品群を指す文学批評用語だ。『白痴』はその代表的な作品の一つとされている。「美は世界を救う」は、『白痴』の中でムイシュキン公爵が発する言葉で、ドストエフスキーの思想を象徴する最も有名なフレーズの一つである。

書籍『白痴』



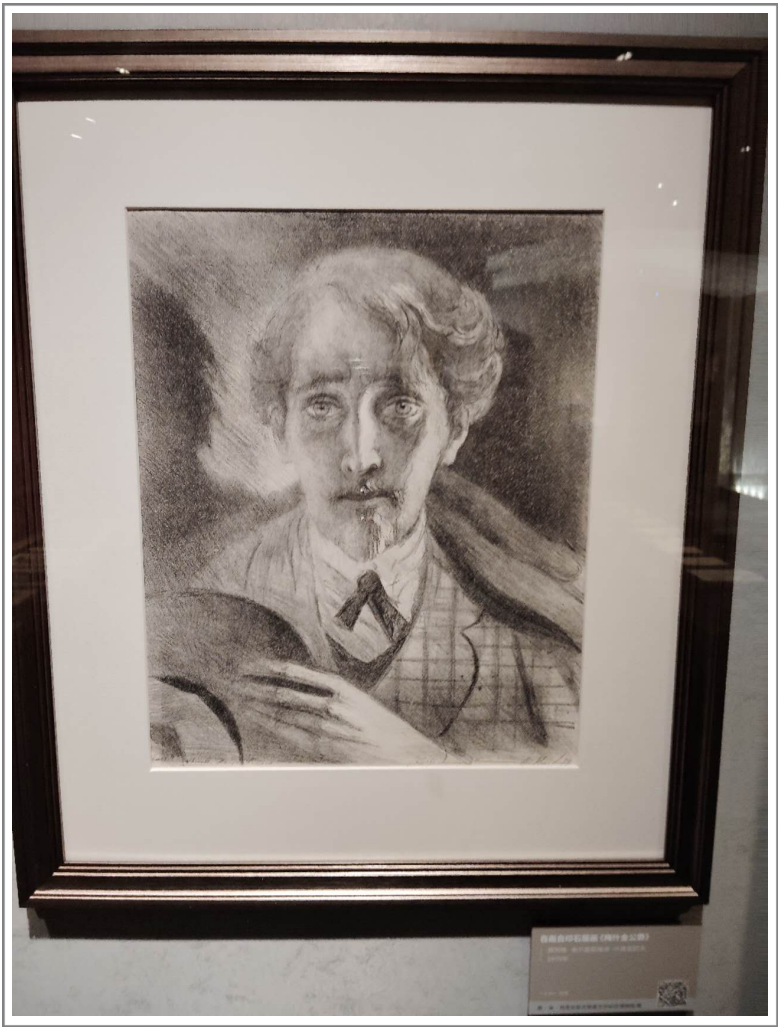
出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：ザメスロフスキー印刷所
出版年：1874年版
※『白痴』は1868–1869年に雑誌『ロシア報知』に連載され、1874年にこの版本が刊行された。単行本としての普及版の一つと考えられる。

石版画『ナスタシヤ・フィリポヴナ』



作者：ヴィクトル・セミョーノヴィチ・ヴェリネル
制作年：1973年
作品：『白痴』挿絵
※ナスタシヤ・フィリポヴナは、ドストエフスキーの小説『白痴』（1868–1869年）のヒロインである。美しく情熱的だが、深い傷を負った女性で、幼少期に虐待され、その後も不幸な人生を送る。彼女は主人公ムイシュキン公爵と、対照的な存在であるロゴージンに多大な影響を与えながら、物語全体の悲劇的な核心を担う。

自画自印石版画『ムイシュキン公爵』



作者：オレグ・セルゲーエヴィチ・エフセーエフ
制作年：1979年
作品：『白痴』挿絵
※エフセーエフはロシアの現代版画家で、古典文学の挿絵を多く手がけている。ムイシュキン公爵は、『白痴』の主人公である。純真無垢でキリストのような愛と慈しみを持つ理想的な人物として描かれているが、そのために「世間」と折り合えず、悲劇的な結末を迎える。

石版画『競売』



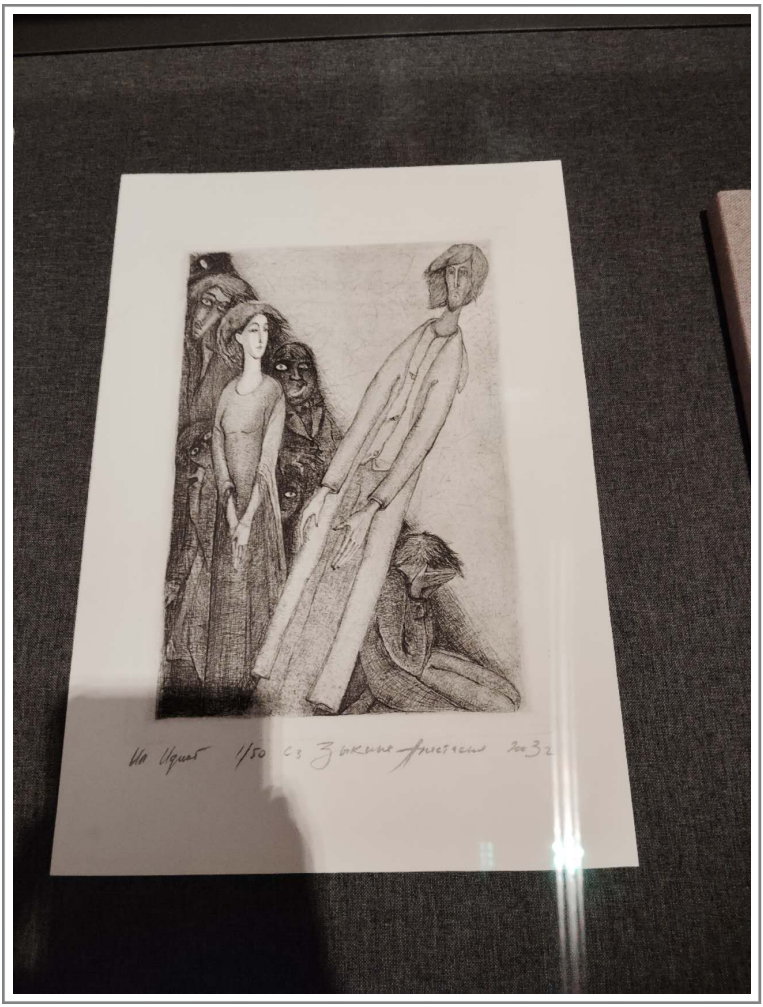
作者：ヴィクトル・セミョーノヴィチ・ヴェリネル
制作年：1972年
作品：『白痴』挿絵
※本作は、小説の終盤でナスタシヤ・フィリポヴナがロゴージンとムイシュキン公爵の間で「争われる」象徴的なシーンを示している。

ボリス・エイフマンのバレエ『白痴』



作者：サマリン・ヴァレンティン（マリア・ティル・ヴァルグレック）
制作年：1980年
場所：フランス、パリ
※ボリス・エイフマン（1946–）は、ロシアの著名なバレエ振付家で、文学作品を題材にした革新的なバレエを数多く手がけている。彼はドストエフスキーの『白痴』をバレエ化し、1980年にパリで上演した。

版画『ムイシュキン公爵とナスタシヤ・フィリポヴナ』



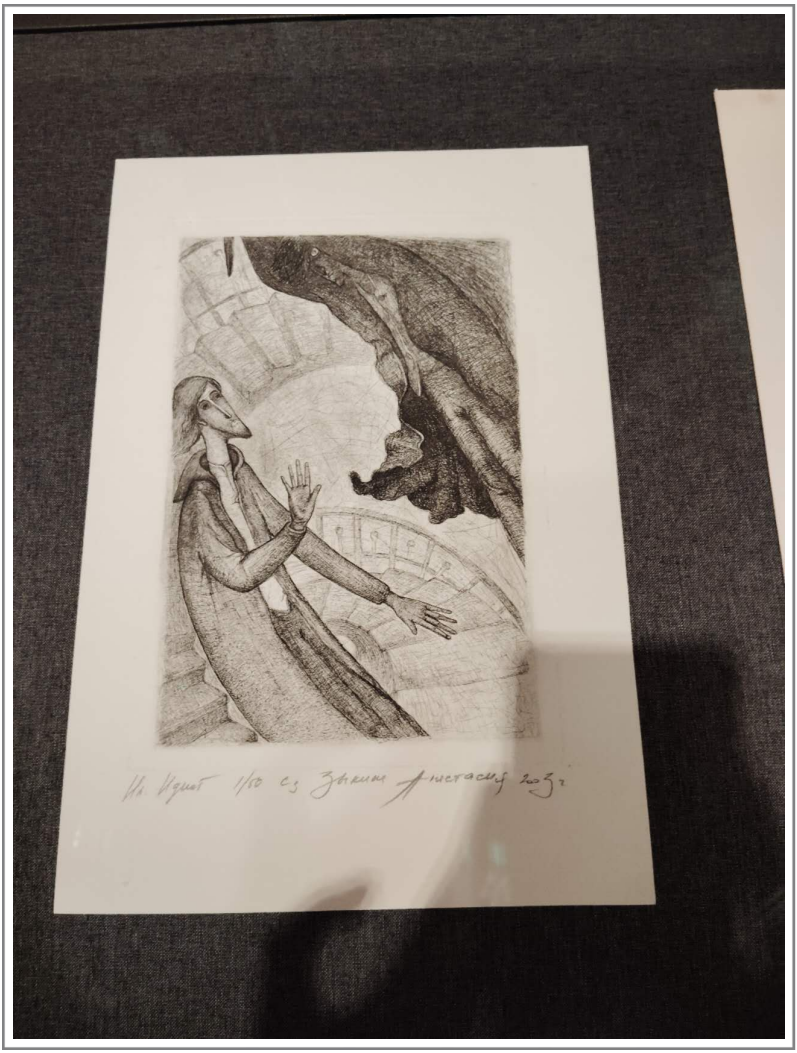
作者：アナスタシヤ・アレクサンドロヴナ・ラギナ
制作年：2003年
作品：『白痴』挿絵
※この作品は、『白痴』の二人の中心人物――主人公ムイシュキン公爵とヒロインのナスタシヤ・フィリポヴナ――を描いている。アナスタシヤ・ラギナはロシアの現代版画家で、2003年の作品は比較的新しいドストエフスキー挿絵の一例である。

麻膠版画『ロゴージンとムイシュキン公爵』



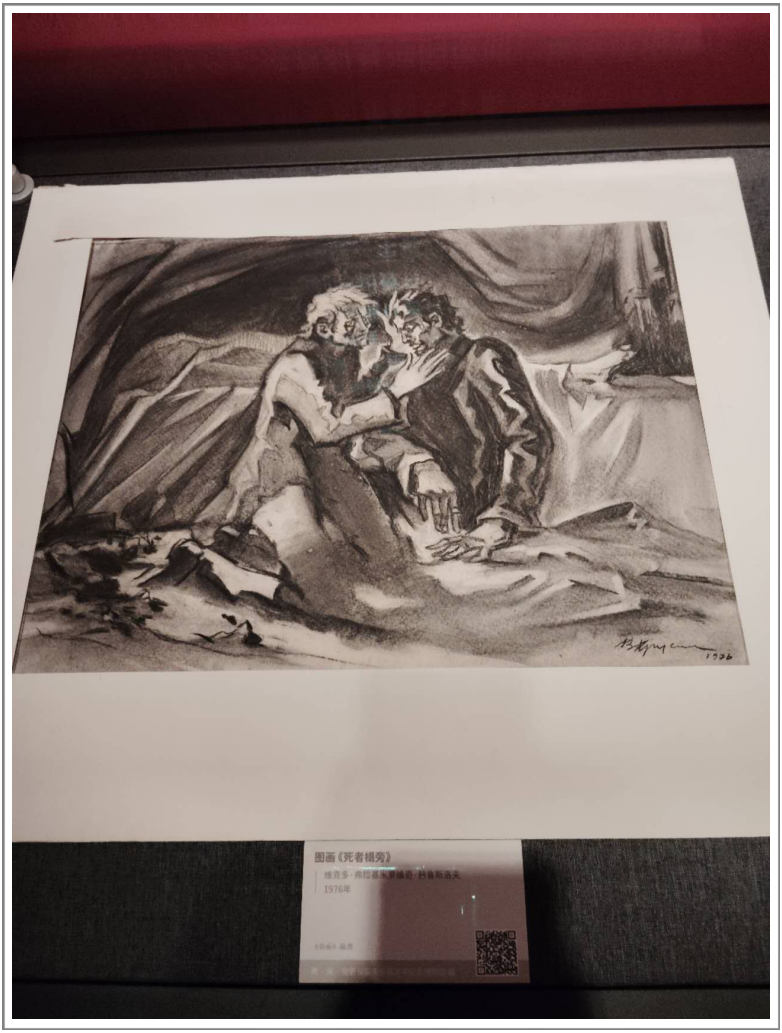
作者：アンドレイ・アレクセーエヴィチ・ウシン
制作年：1956年
作品：『白痴』挿絵
※アンドレイ・ウシン（1905–1960）は、ソ連のグラフィックアーティストで、古典文学の挿絵を多数手がけた。ロゴージンとムイシュキン公爵は、『白痴』の二人の主人公であり、対照的な存在として描かれている。ムイシュキンは純粋無垢でキリストのような愛を持ち、ロゴージンは情熱的で嫉妬深く、破滅的な愛に駆られる。

版画『ムイシュキン公爵とロゴージン』



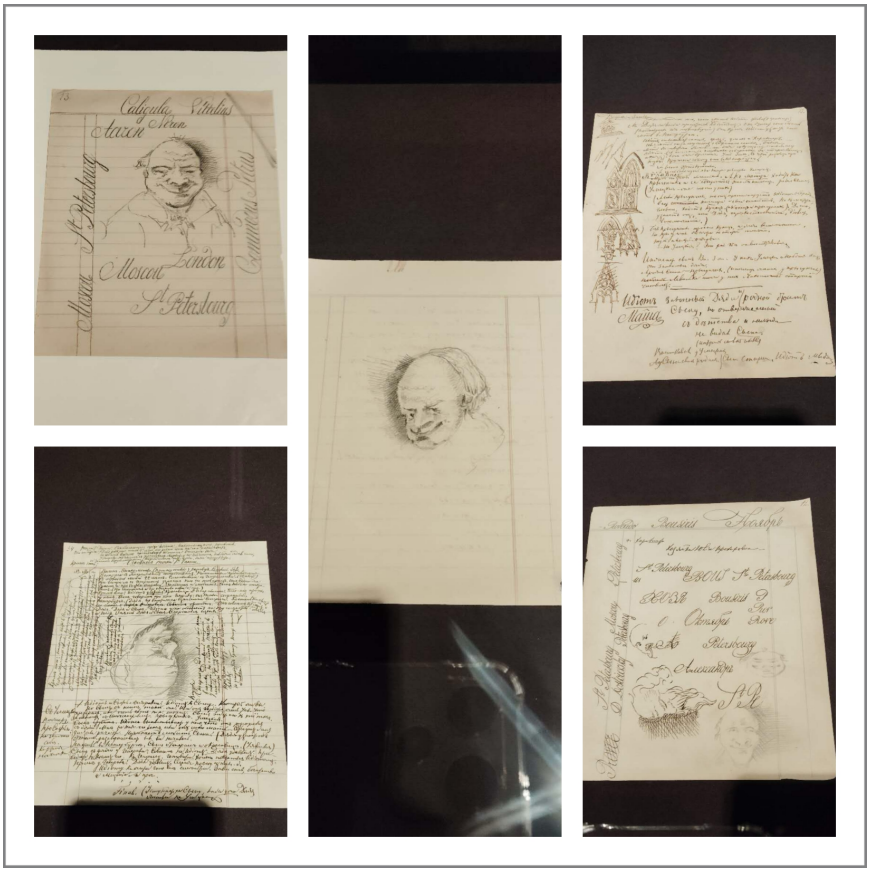
作者：アナスタシヤ・アレクサンドロヴナ・ズギナ
制作年：2003年
作品：『白痴』挿絵
※先項と同じモチーフである。ムイシュキン公爵とロゴージンの二人の対峙を描いた作品で、『白痴』の核心的なテーマである「光と闇」「純潔と情熱」の対比が視覚化されている。

図画『死者の寝台のそばで』



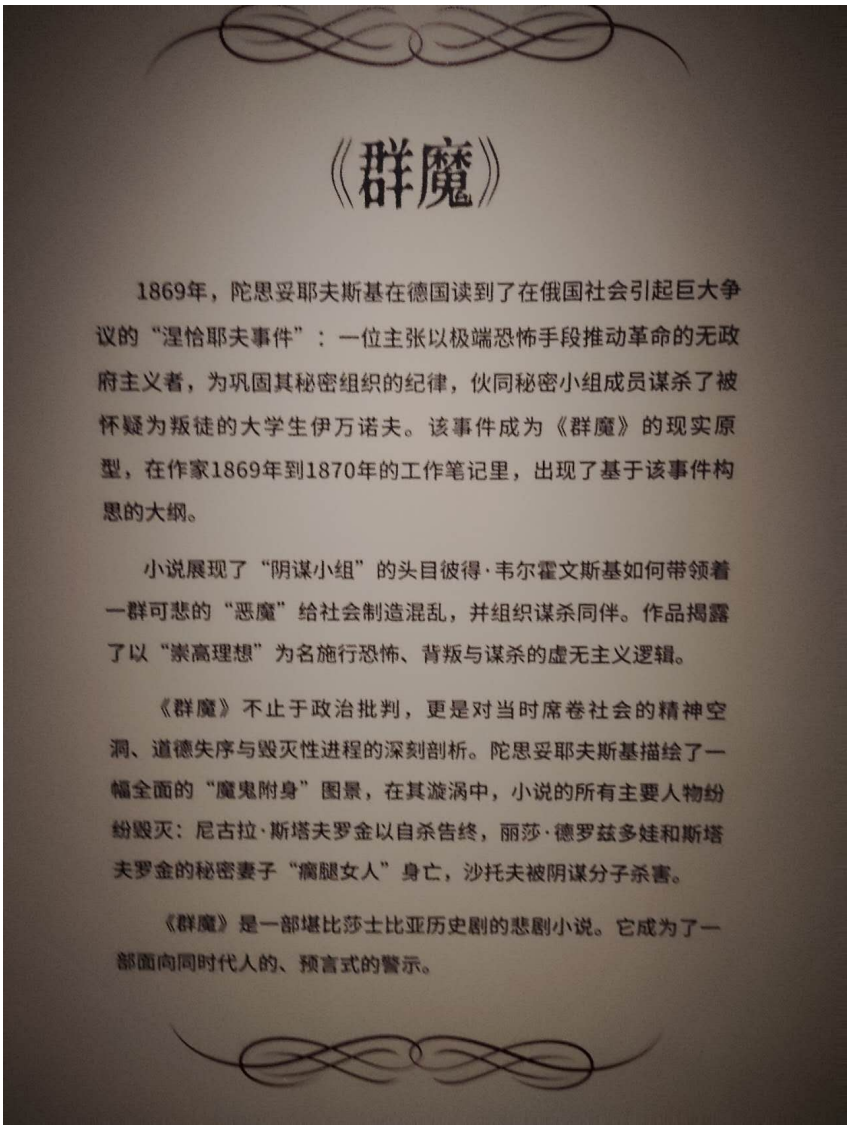
作者：ヴィクトル・ウラジミロヴィチ・フルスロフ
制作年：1976年
作品：『白痴』挿絵
※ヴィクトル・ウラジミロヴィチ・フルスロフ（1935–2005）は、ソ連・ロシアのグラフィックアーティストで、多くの古典文学作品の挿絵を手がけた。本作は『白痴』のクライマックスシーンを題材としていると思われる。

原稿『白痴』（複製）



複製作成者：ユーリ・ドミトリエヴィチ・アレハノフ
制作年代：1970年代
※この展示品は、ドストエフスキーが『白痴』を執筆した際の原稿（複製） である。原稿からは、彼の推敲の跡やイラスト、速記法で書かれた草稿の様子がうかがえる。

説明『悪霊』



1869年、ドストエフスキーはドイツで、ロシア社会に大きな論争を巻き起こしていた「ネチャーエフ事件」について知りました。これは、極端なテロ手段による革命を主張する無政府主義者が、秘密組織の規律を強化するために、スパイと疑われた大学生イワノフを仲間とともに殺害

した事件です。この事件が『悪霊』の現実のモデルとなり、1869年から1870年にかけての作家の仕事ノートには、この事件に基づく構想のメモが現れています。

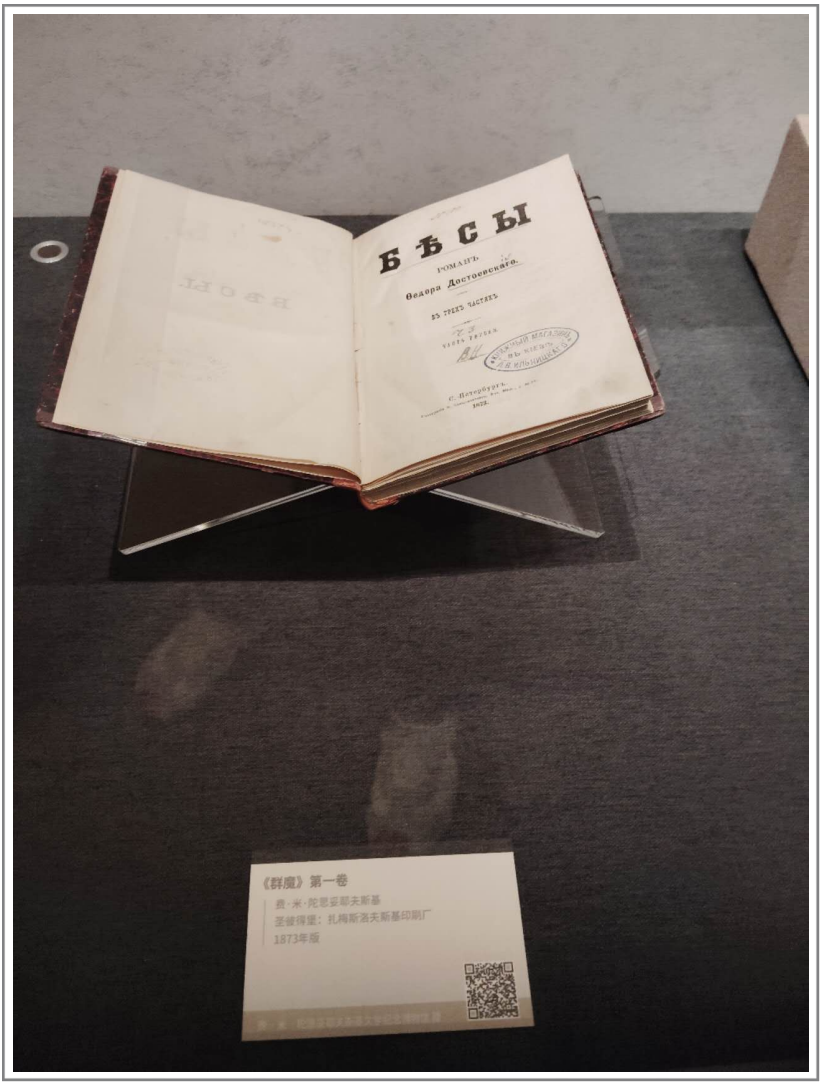
この小説は、「陰謀グループ」の首領ペトル・ヴェルホヴェンスキーが、いかにして哀れな「悪霊」たちを率いて社会に混乱を引き起こし、仲間の殺害を組織するかを描いています。この作品は、「崇高な理想」の名のもとにテロ・裏切り・殺人を実行するニヒリズムの論理を暴き出しています。

『悪霊』は単なる政治批判にとどまらず、当時社会を席巻していた精神の空洞化・道徳的混乱・破滅的プロセスを深く剖析した作品です。ドストエフスキーは、まさに「悪魔にとりつかれた」状態の全面的な図景を描き出し、その渦の中で小説の主要人物たちはことごとく破滅します。ニコライ・スタヴローギンは自殺し、リーザ・ドロズドワとスタヴローギンの秘密の妻「びっこの女」は死に、シャトフは陰謀者たちによって殺害されます。

『悪霊』は、シェイクスピアの歴史劇にも比肩する悲劇小説です。この作品は、同時代の人々に向けられた予言的な警告となりました。

※ネチャーエフ事件（1869年）は、バクーニンの影響を受けた革命家セルゲイ・ネチャーエフが、同志のイワノフを殺害した実際の事件である。ドストエフスキーはこの事件に深い衝撃を受け、革命運動の内面にある虚無と狂信を描き出すためにこの小説を書いた。ニコライ・スタヴローギンは、小説の中でも最も複雑な人物で、美しさと悪魔性を併せ持つ存在である。彼の自殺は、ニヒリズムの帰結として象徴的に描かれている。なお、この小説は、当時の急進派からは「反動的」と非難されたが、後に20世紀の全体主義を予見した作品として再評価された。

書籍『悪霊』 第1卷



出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：ザメスロフスキー印刷所
出版年：1873年版
※『悪霊』は、1871年から1872年にかけて雑誌『ロシア報知』に連載され、1873年にこの単行本（全2巻）が刊行された。この第1巻は、1873年の初版単行本の一部である。

モノプリント版画『カルマジノフ』



作者：ヴィタリー・ドミトリエヴィチ・ピヴォヴァロフ
制作年：1969年
作品：『悪霊』挿絵
※カルマジノフは、『悪霊』に登場する人物の一人で、高慢ちきで虚栄心の強い作家として描かれている。彼は小説の中で、自身の「芸術」や「名声」にしか関心がなく、革命運動に対しても打算的な態度で接する。ドストエフスキーはこの人物を通じて、当時のロシア知識層の偽善や精神的空洞化を風刺している。

モノタイプ版画『キリーロフの死』



作者：ヴィタリー・ドミトリエヴィチ・ピヴォヴァロフ
制作年：1963年
作品：『悪霊』挿絵
※キリーロフは、『悪霊』に登場する最も哲学的な人物の一人で、自殺によって神を否定し、人間の絶対的自由を証明しようとする狂気の思想家だ。彼の死は小説の中でも特に印象的な場面の一つで、ニヒリズムの極限を描き出している。本作は、その彼が自らの意志で命を絶つ瞬間を描いた作品だ。

モノタイプ版画『スチェパン・トロフィモヴィチの死』



作者：ヴィタリー・ドミトリエヴィチ・ピヴォヴァロフ
制作年：1969年
作品：『悪霊』挿絵
※スチェパン・トロフィモヴィチ・ヴェルホヴェンスキーは、『悪霊』の重要な人物で、ペトル・ヴェルホヴェンスキーの父であり、教養ある古い世代の知識人だ。理想主義的で教養人を自負していましたが、現実には世間から取り残され、虚栄心と自己欺瞞に満ちた人物として描かれている。彼は小説の終盤で亡命を試みるが、旅先で病に倒れ、最後に精神的覚醒と贖罪の瞬間を迎える。

版画『スタヴローギンと苦役囚フェジカ』



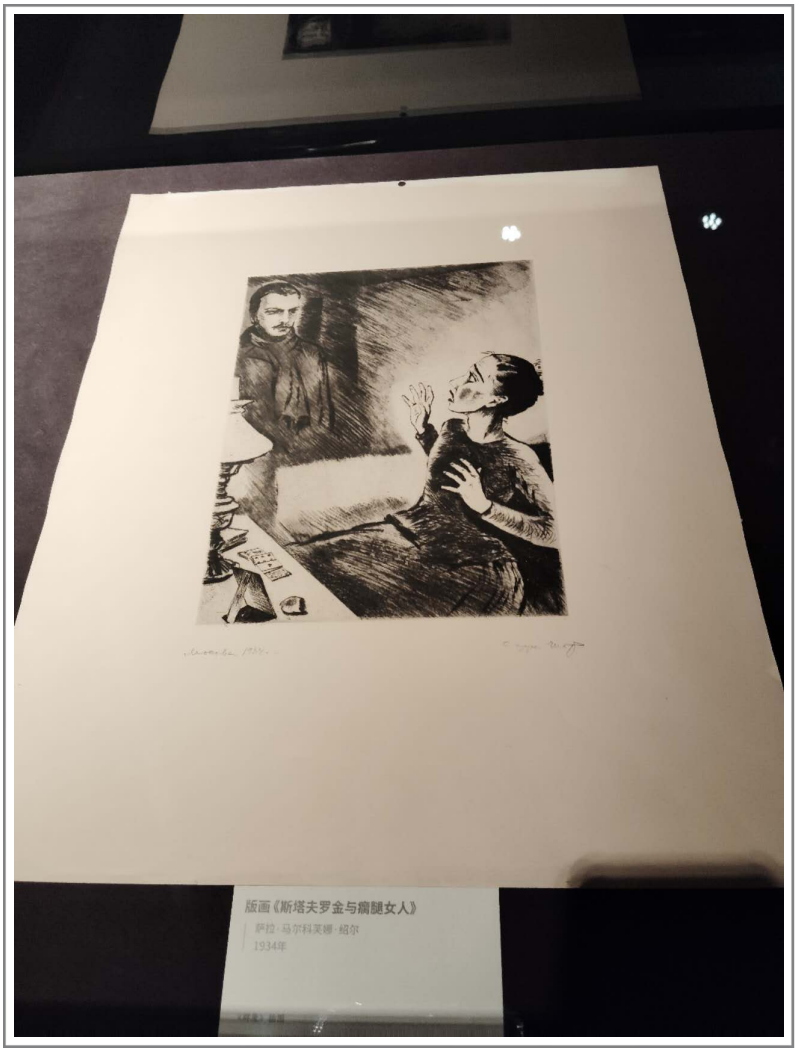
作者：サラ・マルコヴナ・ショール
制作年：1934年
作品：『悪霊』挿絵
※スタヴローギンは『悪霊』の中心的人物で、ニヒリズムと美しさを併せ持つ複雑な存在だ。苦役囚フェジカ（フョードル・フェジカ）は、スタヴローギンの命を狙う脱獄囚として登場し、スタヴローギンの暗い側面を象徴する人物である。

版画『文学的カドリーユ』



作者：サラ・マルコヴナ・ショール
制作年：1934年
作品：『悪霊』挿絵
※「カドリーユ」 は、4組のカップルで踊るフランス発祥のダンスで、ロシアでは19世紀に社交ダンスとして広く親しまれていた。「文学的カドリーユ」というタイトルは、『悪霊』の中で文学者や知識人たちが集まる社交の場を風刺的に描いたものと考えられる。ドストエフスキーはこの作品の中で、当時の知識層の虚栄心・浅はかさ・精神的空洞化を鋭く批判している。

版画『スタヴローギンと足が不自由な女』



作者：サラ・マルコヴナ・ショール
制作年：1934年
作品：『悪霊』挿絵
※マリヤ・ティモフェエヴナ・レビャドキナ。彼女はスタヴローギンの秘密の妻で、聖愚（ユーロディヴィ）的な性格を持ち、スタヴローギンの罪の意識や内面の闇を象徴的に映し出す重要な人物である。

版画『ワルワーラ・ペトロヴナとダーシャ』



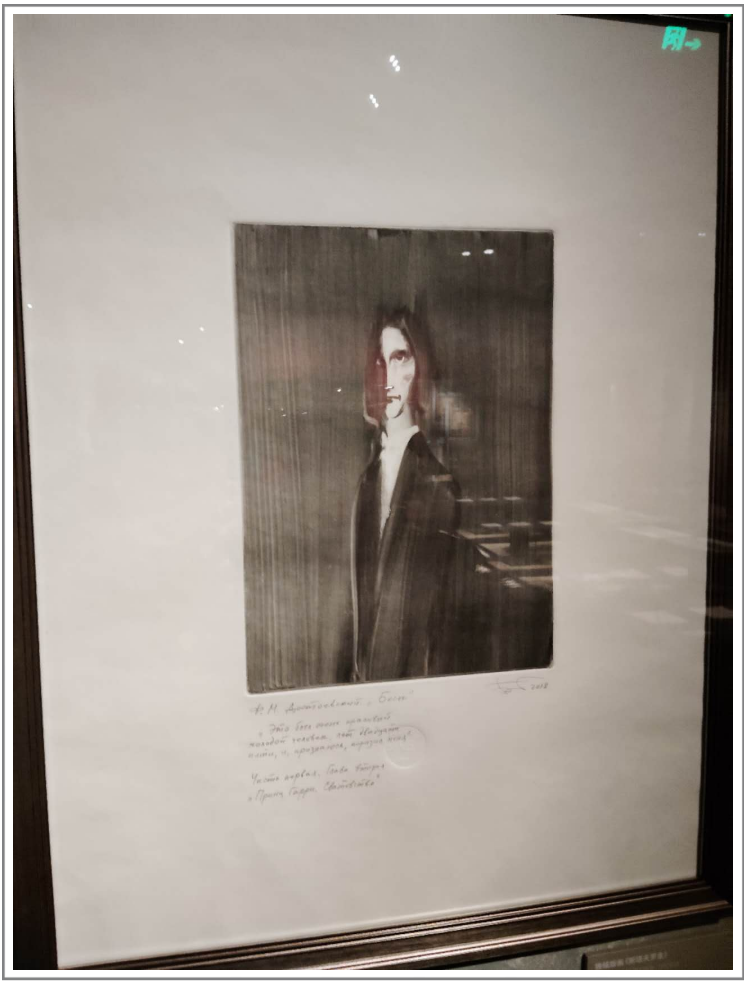
作者：サラ・マルコヴナ・ショール
制作年：1934年
作品：『悪霊』挿絵
※ワルワーラ・ペトロヴナ・スタヴローギナは、『悪霊』の主要な女性キャラクターの一人で、スタヴローギンの母親である。高慢で意志の強い地主で、町の有力者として物語に深く関わる。ダーシャ（ダリヤ・パヴロヴナ） は、彼女の養女で、控えめで誠実な性格の女性だ。スタヴローギンとも複雑な関係を持ち、物語の後半で重要な役割を果たす。

モノタイプ版画『レビャドキナ』



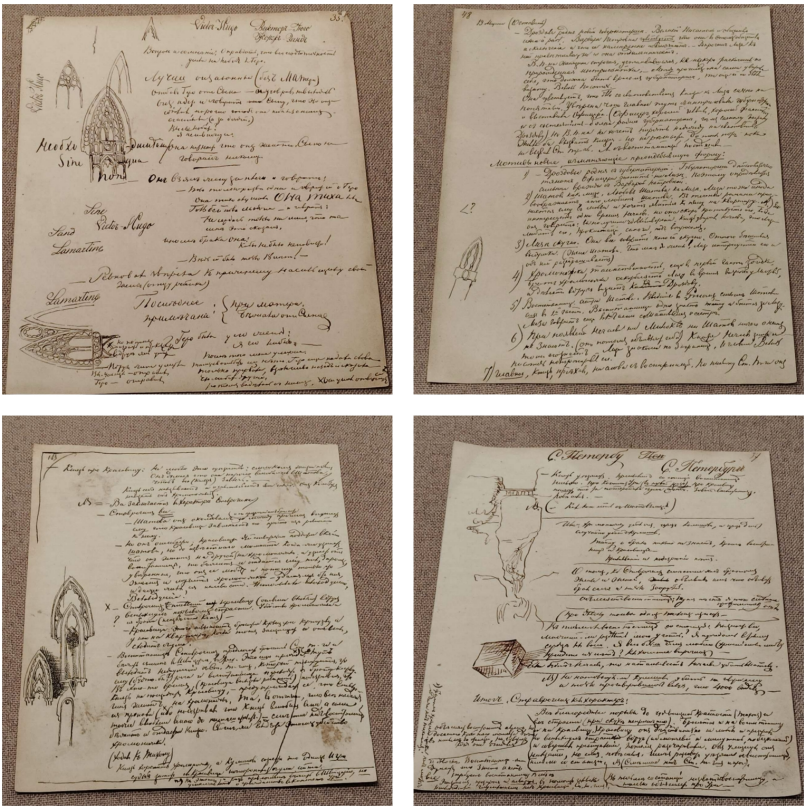
作者：ヴァレリー・ヴァシリエヴィチ・ババノフ
制作年：2018年
作品：『悪霊』挿絵
※マリヤ・ティモフェエヴナ・レビャドキナは、『悪霊』に登場する「足が不自由な女」で、スタヴローギンの秘密の妻だ。彼女は聖愚（ユーロディヴィ） 的な側面を持ち、一見すると愚かだが、深い直感と霊的洞察力を持つ重要な人物である。彼女の存在は、スタヴローギンの内面の闇や罪の意識を象徴的に浮き彫りにしている。

モノタイプ版画『スタヴローギン』



作者：ヴァレリー・ヴァシリエヴィチ・ババノフ
制作年：2018年
作品：『悪霊』挿絵
※スタヴローギンは、『悪霊』の中心人物であり、ドストエフスキーが創造した最も複雑で謎に満ちたキャラクターの一人だ。彼は美しく、知的で、魅力的でありながら、道徳的な空虚さとニヒリズムの極限に生きる人物である。彼の存在は、小説全体を通して「悪霊」の象徴として機能する。

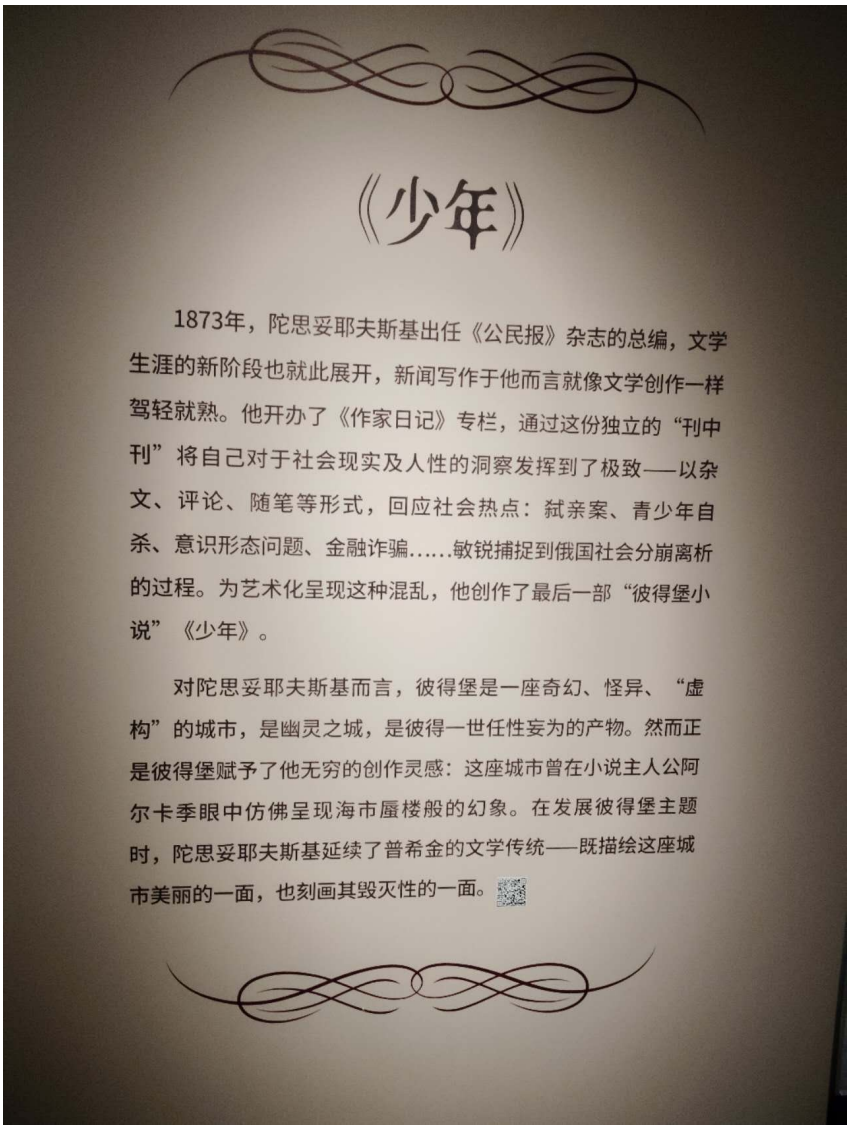
原稿『悪霊』（複製）



複製作者：ユーリ・ドミトリエヴィチ・アレハノフ
制作年代：1970年代

※ドストエフスキーは妻アンナの速記法を用いるようになってから、驚異的な速さで執筆したことでも知られているが、同時に構想や構成に深く悩み、多くのメモや草稿を残している。

説明『未成年』



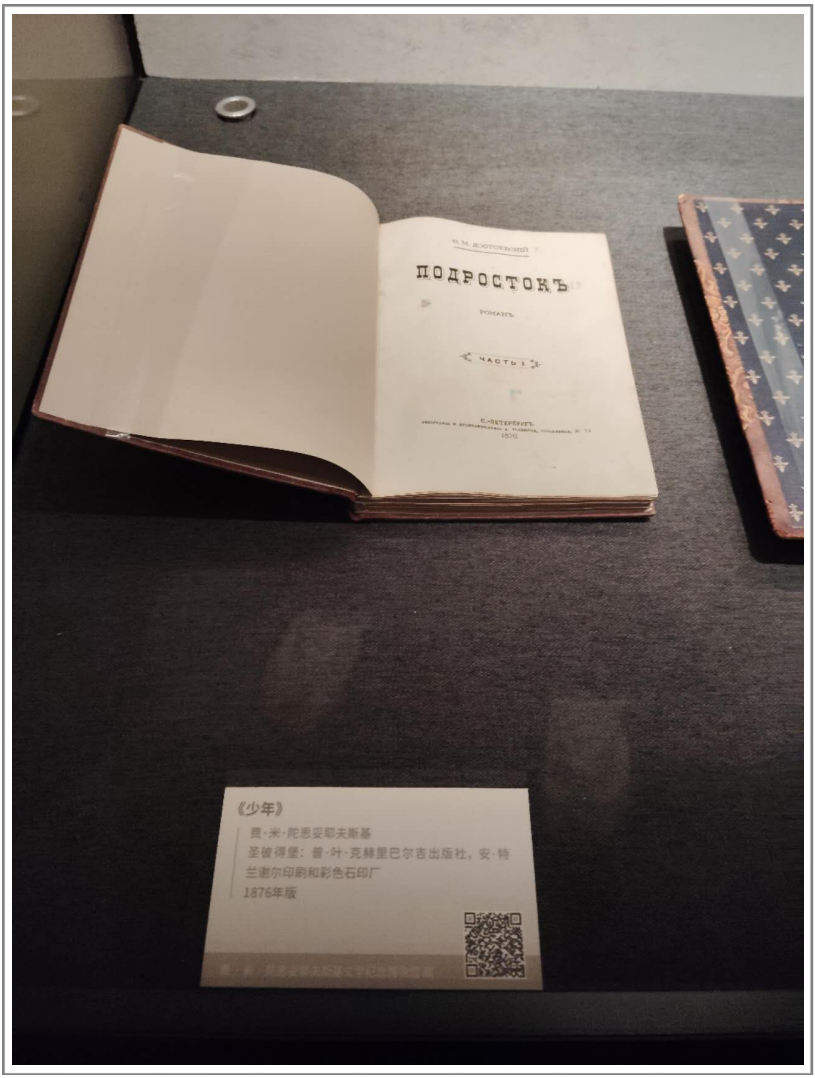
1873年、ドストエフスキーは雑誌『公民報』の編集長に就任し、文学人生の新たな段階が始まりました。彼にとってジャーナリズムは、文学創作と同じくらい手慣れたものでした。彼は『作家の日記』というコラムを開設し、この独立した「刊中刊」を通じて、社会現実と人間性に対

する自身の洞察を極限まで発揮しました――随筆・評論・エッセイなどの形式で、親殺し事件・青少年の自殺・イデオロギー問題・金融詐欺など、社会のホットな話題に応答したのです。彼はロシア社会が崩壊へと向かう過程を鋭く捉えました。この混乱を芸術的に表現するために、彼は最後の「ペテルブルク小説」――『未成年』を執筆しました。

ドストエフスキーにとって、ペテルブルクは幻想的で、異様で、「虚構」の都市であり、亡霊の都であり、ペートル1世の気まぐれな産物でした。しかし、まさにこのペテルブルクこそが彼に尽きることのない創作の霊感を与えました。この都市は、小説の主人公アルカージイの目には、しばしば蜃気楼（しんきろう）のような幻想として映っていました。ペテルブルクのテーマを展開するにあたり、ドストエフスキーはプーシキンの文学的伝統を受け継ぎました――すなわち、この街の美しい側面と、同時にその破壊的な側面の両方を描き出したのです。

※『作家の日記』は、1873年から1881年まで断続的に刊行されたドストエフスキーの単独編集による月刊誌（コラム）で、彼の思想的・文学的エッセイの集大成とも言える重要な仕事である。『未成年』 は1875年に発表された長編小説で、『悪霊』と『カラマーゾフの兄弟』の間に位置する作品だ。主人公アルカージイ・ドルゴルーキーは、私生児として育った「未成年」であり、彼の成長と精神的葛藤が描かれている。

書籍『未成年』



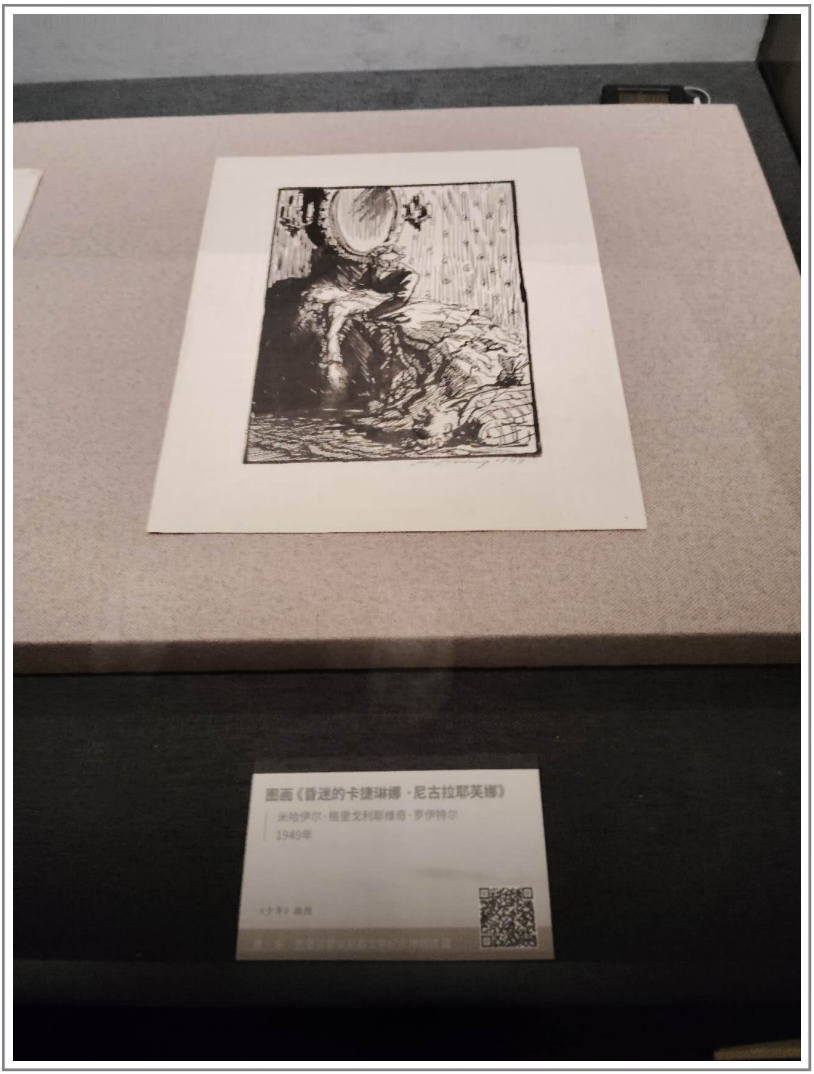
出版地：サンクトペテルブルク
出版社：プ・エ・クヘリバルゲル出版社
印刷所：アン・トランシェル印刷・カラー石版工場
出版年：1876年版
※『未成年』 は、1875年に雑誌『祖国紀事』に連載され、1876年に単行本として刊行された。画像はその初版単行本の1つである。

図画『街を駆け抜けるアルカージイ』



作者：ミハイル・グリゴリエヴィチ・ロイテル
制作年：1949年
作品：『未成年』挿絵
※アルカージイは、『未成年』の主人公である。彼は「偶然の家族」の中で育つ。理想と現実の間で葛藤する「ロシアの少年」を代表する人物だ。「街を駆け抜ける」という場面は、ペテルブルクの街並みを背景に、彼の衝動的で不安定な心情を象徴的に描いていると思われる。

図画『意識を失ったカテリーナ・ニコラエヴナ』



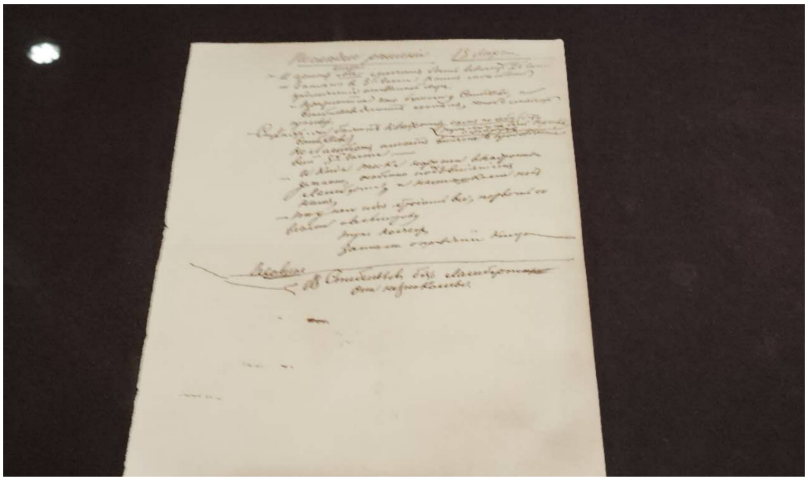
作者：ミハイル・グリゴリエヴィチ・ロイテル
制作年：1949年
作品：『未成年』
※カテリーナ・ニコラエヴナ・アフマコワは、『未成年』の登場人物で、主人公アルカージイが恋愛感情を抱く重要な女性だ。彼女は聡明で美しいが、複雑な家庭事情や人間関係に悩む人物として描かれている。

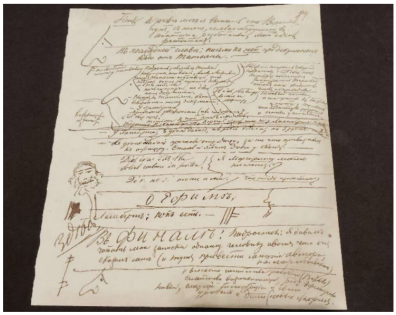
石版画『飛翔』

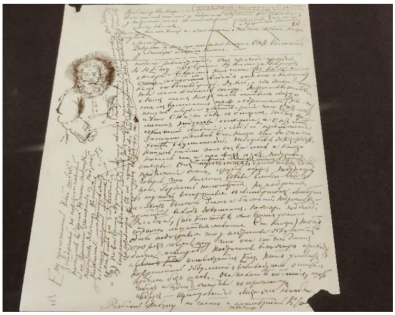


作者：ヴィクトル・ドレーゼヴィチ・ブリネル
制作年：1975年
※おそらく『未成年』のアルカージイの夢想を象徴する作品。ブリネル（1908–1983）はソ連のグラフィックアーティストで、多くのロシア古典文学の挿絵を手がけた。

原稿『未成年』（複製）







複製作者：ユーリ・ドミトリエヴィチ・アレハノフ
制作年代：1980年代
※この展示品は、ドストエフスキーが『未成年』を執筆する際に使用した原稿の複製である。

説明『作家の日記』



1876年から1881年まで、ドストエフスキーは『作家の日記』を独立出版することを決意しました。彼自身がこの刊行物の唯一の執筆者であり、聡明で有能な妻アンナが出版と普及を担当しました。作家の命が尽きるまで続けられたこの仕事は、「日記」という名を冠してはいます

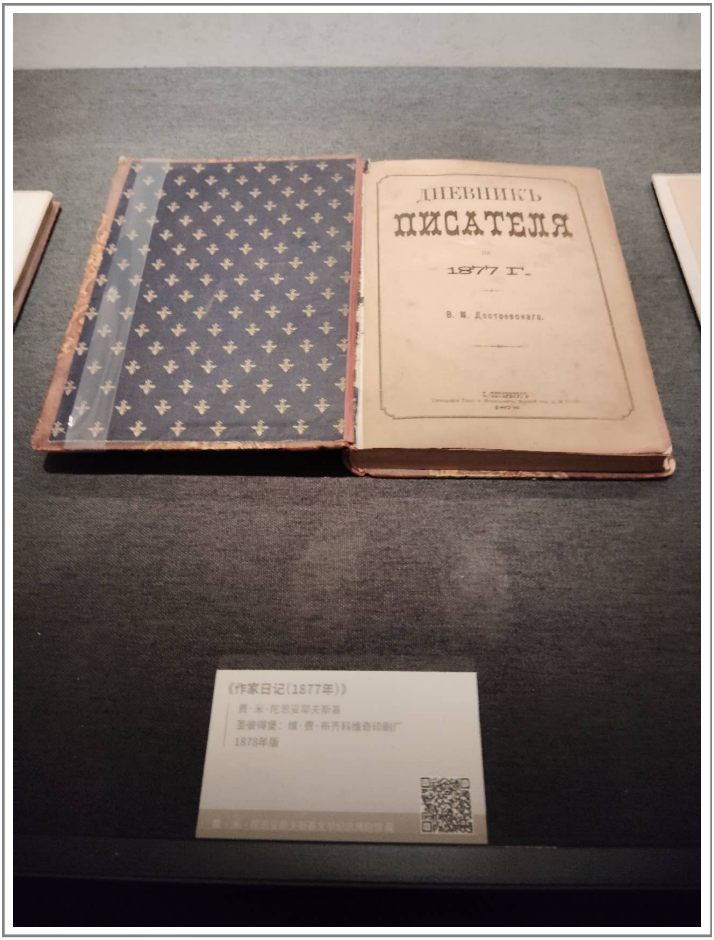
が、その内容は私的な記録とはほど遠いものでした。それは随筆・時事評論・エッセイ・文芸批評など多様なジャンルを融合したものであり、広範なテーマは19世紀下半葉（後半）の歴史・文化・社会現実を反映していました。この独特な創作の実験場は、後に「世界文学史上最初のブログの一つ」とも呼ばれるようになりました。

彼の政論記事は読者の間で深い共感を呼びました。そのため、全国の読者から手紙が次々と届き、彼らは自身の困惑・苦悩・人生の意味への探求――彼らを苦しめるあらゆる思いを打ち明けました。ドストエフスキーは型通りの決まり文句で応じることはせず、理解と共感に満ちた長い手紙で返答しました。

さらに、この刊行物のページ上で、彼の「小さな散文」も生まれました。例えば、短編小説『柔和な女』『ある荒唐無稽な男の夢』『農夫マレイ』などです。

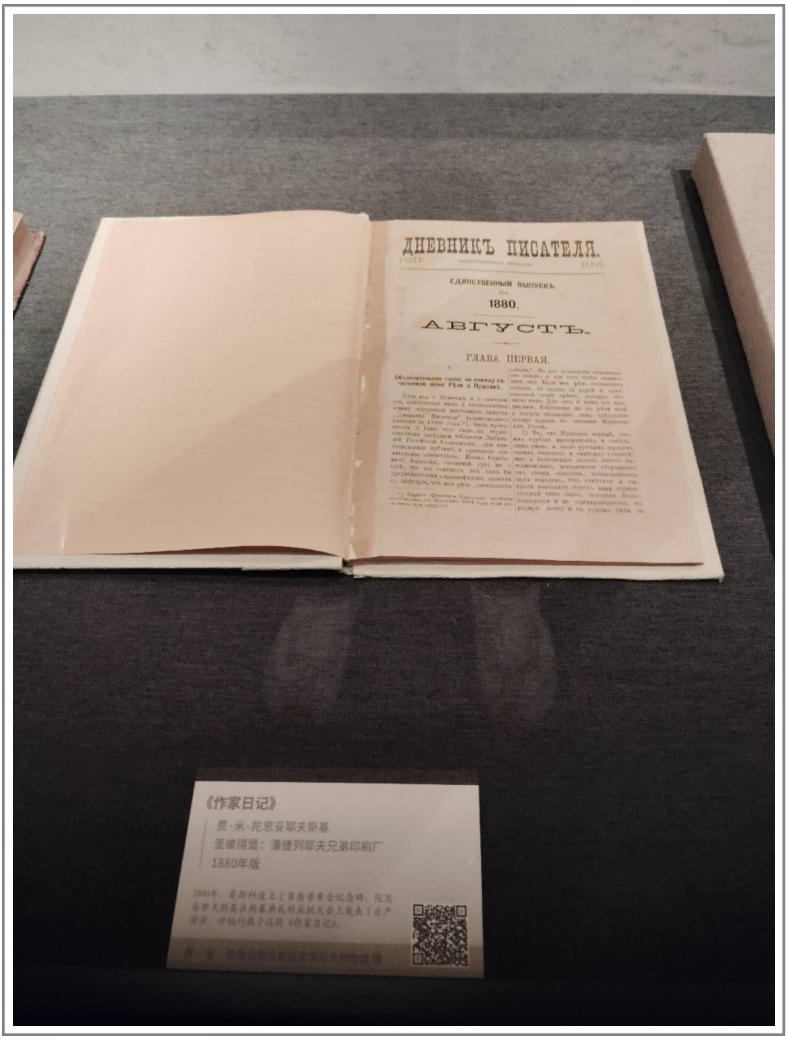
※『作家の日記』 は、ドストエフスキーにとって単なる日記ではなく、思想・文学・ジャーナリズムが一体化した総合的なメディアであった。『おかしな人間の夢』は、1877年4月号に発表された短編で、自殺を考えていた男が夢の中で理想郷を体験するという物語である。この時期におけるアンナ（妻）の貢献は極めて大きく、彼女は出版・経理・読者対応などすべてを一人でこなし、夫の創作活動を支え続けた。

書籍『作家の日記（1877年）』



出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：ヴィ・フ・ブツィコヴィッチ印刷所
出版年：1878年版
※『作家の日記』 は、ドストエフスキーが1873年から1881年にかけて断続的に刊行した単独編集の月刊誌（連載コラム） で、彼の思想的・文学的エッセイの集大成である。1877年分は、1878年にこの単行本としてまとめられた。この『作家の日記』には、当時の社会問題・政治・文学・宗教・心理など多岐にわたるテーマが扱われており、彼の後期思想を理解する上で欠かせない資料となっている。

書籍『作家の日記（1880年）』



出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：パンテレーエフ兄弟印刷所
出版年：1880年版
※1880年は、モスクワに最初のプーシキン記念碑が建立された年であり、その除幕式の祝賀会でドストエフスキーは有名なプーシキン演説を行った。この演説は『作家の日記』の単独号（1880年8月号）として刊行され、ロシア文学史上に残る名演説となった。

版画『やさしい女』



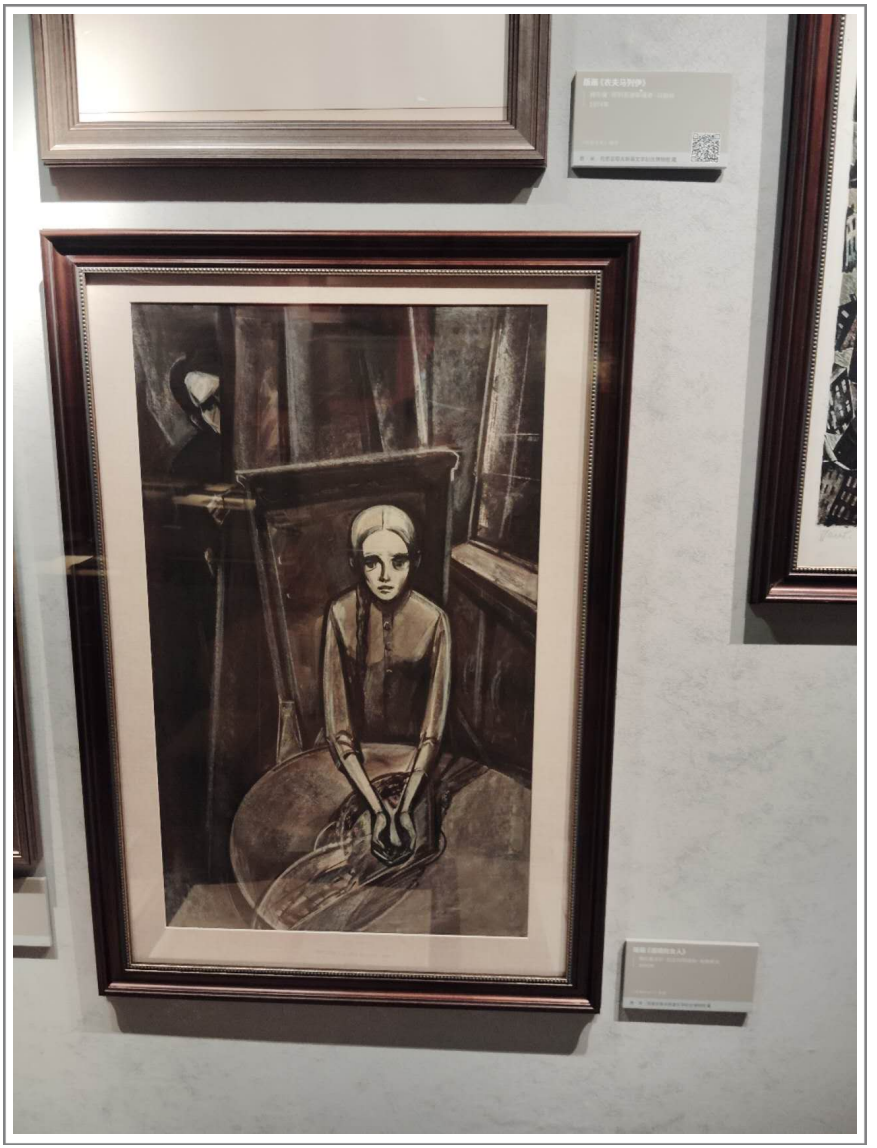
作者：ボリス・アブラモヴィチ・ザポロフ
制作年：1970年
作品：『やさしい女』挿絵
※『やさしい女』は、ドストエフスキーが『作家の日記』（1876年11月号）に発表した短編小説だ。質屋を営む男性が、自分の若い妻の自殺をきっかけに、彼女との関係を回想するという物語である。孤独・愛・死をテーマとしている。

版画『やさしい女』



作者：オルガ・マルキナ
制作年：1989年
作品：『やさしい女』挿絵

版画『やさしい女』



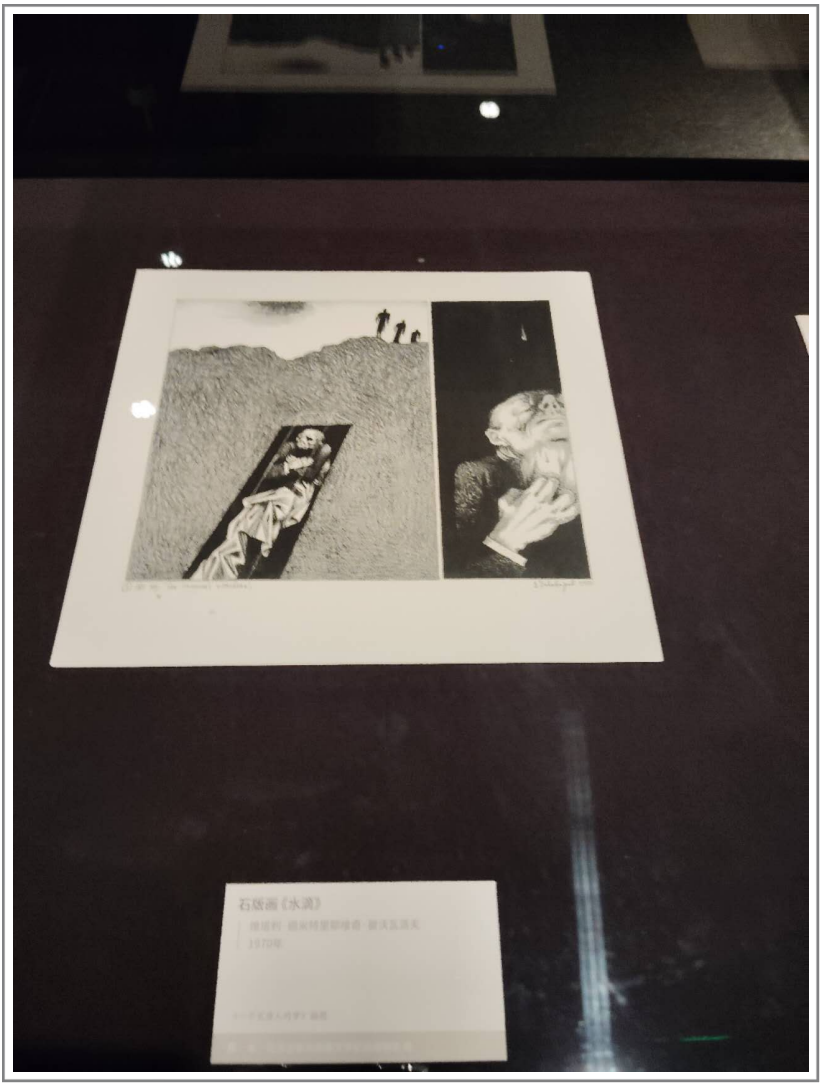
作者：ウラジーミル・ニコラエヴィチ・ミナエフ
制作年：1970年
作品：『やさしい女』挿絵

版画『農夫マレイ』



作者：ゲルマン・アレクセーエヴィチ・マズーリン
制作年：1974年
作品：『作家の日記』所収の短編『農夫マレイ』挿絵
※『農夫マレイ』は、ドストエフスキーが『作家の日記』（1876年2月号）に発表した短編随筆である。この作品は、シベリア流刑時代のオムスク刑務所での復活祭の日を舞台に、作家が幼い頃に農奴の農夫マレイから受けた優しさと慈愛の記憶を回想するという内容だ。このエピソードは、ロシアの農民（人民）の魂に対するドストエフスキーの深い信頼と敬意を象徴するものであり、彼の「根基主義（ポチヴェンニチェストヴォ）」思想を理解するための資料でもある。

石版画『水滴』



作者：ヴィタリー・ドミトリエヴィチ・ピヴォワロフ
制作年：1970年
作品：『おかしな男の夢』挿絵
※『おかしな男の夢』は、自殺を決意した男がある夜、夢の中で理想郷を体験し、そこで「真理」を見出すという物語で、信仰・罪・救済がテーマとなっている。

石版画『夜』



作者：ヴィタリー・ドミトリエヴィチ・ピヴォワロフ
制作年：1970年
作品：『作家の日記』挿絵
※『作家の日記』に掲載された短編『おかしな人間の夢』を題材にした作品である。

石版画『出会い』



作者：ヴィタリー・ドミトリエヴィチ・ピヴォワロフ
制作年：1970年
作品：『作家の日記』挿絵
※同じく『作家の日記』に掲載された短編『おかしな人間の夢』を題材にした作品。

石版画『キリストのヨルカに召された少年』



作者：オリガ・ウラジミロヴナ・マルキナ
制作年：1989年
作品：『作家の日記』挿絵
※補足：この作品は、ドストエフスキーが『作家の日記』（1876年1月号）に発表した短編『キリストのヨルカに召された少年』を題材にしたものだ。

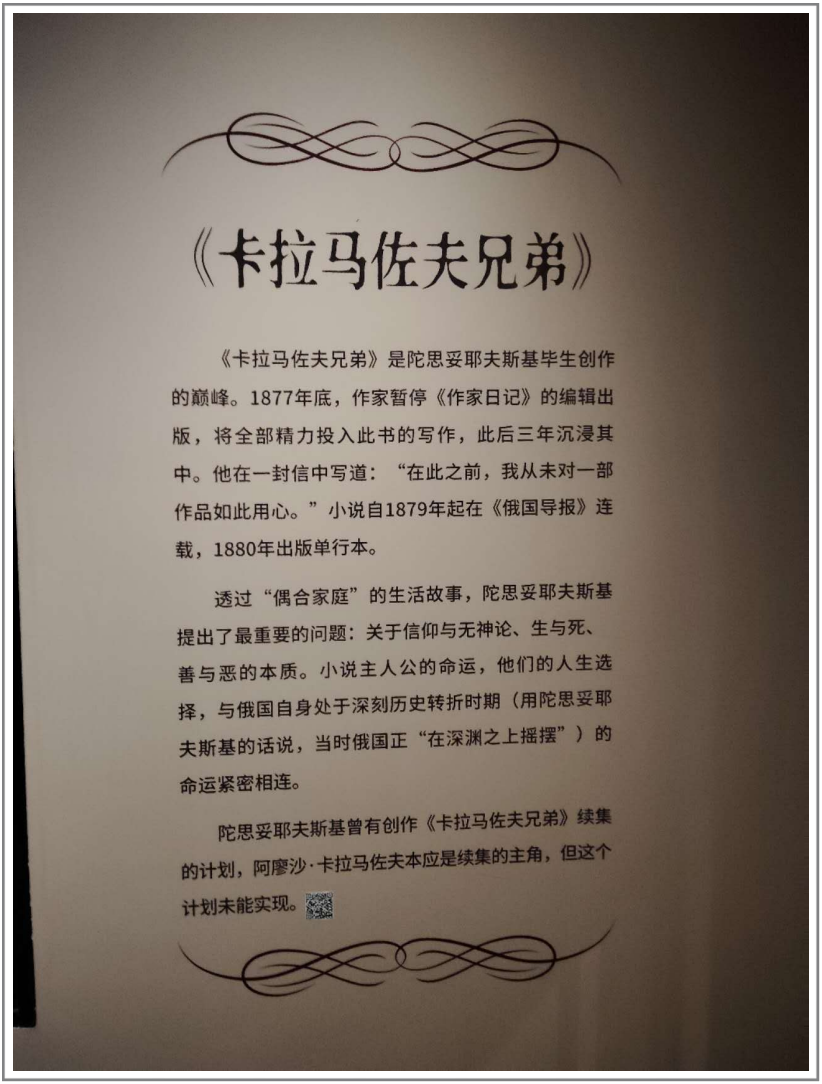
第六部　集大成

長年の思想的熟成と体調不良との闘いの中、彼は人間の原罪と救済を描く畢生の大作『カラマーゾフの兄弟』を執筆。この作品は社会の絶賛を浴び、彼の文学は哲学と宗教の深淵にまで達した。

1880年、モスクワのプーシキン像除幕式で行った演説は、観衆を涙と歓喜の渦に巻き込み、彼は「ロシア国民の預言者」としての地位を不動のものにする。この瞬間、彼は文学的にも精神的にも生涯の頂点に立った。

しかしそのわずか数カ月後、1881年1月28日、ペテルブルクの自宅で肺動脈の破裂により急死。『カラマーゾフの兄弟』第2部の構想を胸に、筆を置くことすら許されなかった壮絶な最期は、彼の人生を最後まで“書き続ける男”の宿命で飾り立てた。

説明『カラマーゾフの兄弟』



『カラマーゾフの兄弟』は、ドストエフスキーが畢生（ひっせい）の努力を傾けた頂点です。1877年末、作家は『作家の日記』の編集・出版を一時中断し、全精力をこの作品の執筆に注ぎ込み、その後3年間にわたって没頭しました。彼はある手紙の中でこう記しています。

「これ以前に、私がこれほどまでに心血を注いだ作品はなかった。」

この小説は1879年から雑誌『ロシア報知』に連載され、1880年に単行本が刊行されました。

「偶然の家族」の生活物語を通して、ドストエフスキーは最も重要な問いを提起しました。信仰と無神論、生と死、善と悪の本質についてです。小説の主人公たちの運命、彼らの人生選択は、ロシア自身が深い歴史的転換期（ドストエフスキーの言葉を借りれば、当時のロシアは「深淵の上で揺れていた」）にあったことと密接に結びついています。

ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』の続編を構想しており、アリョーシャ・カラマーゾフがその続編の主人公となるはずでした。しかし、その計画は実現されませんでした。

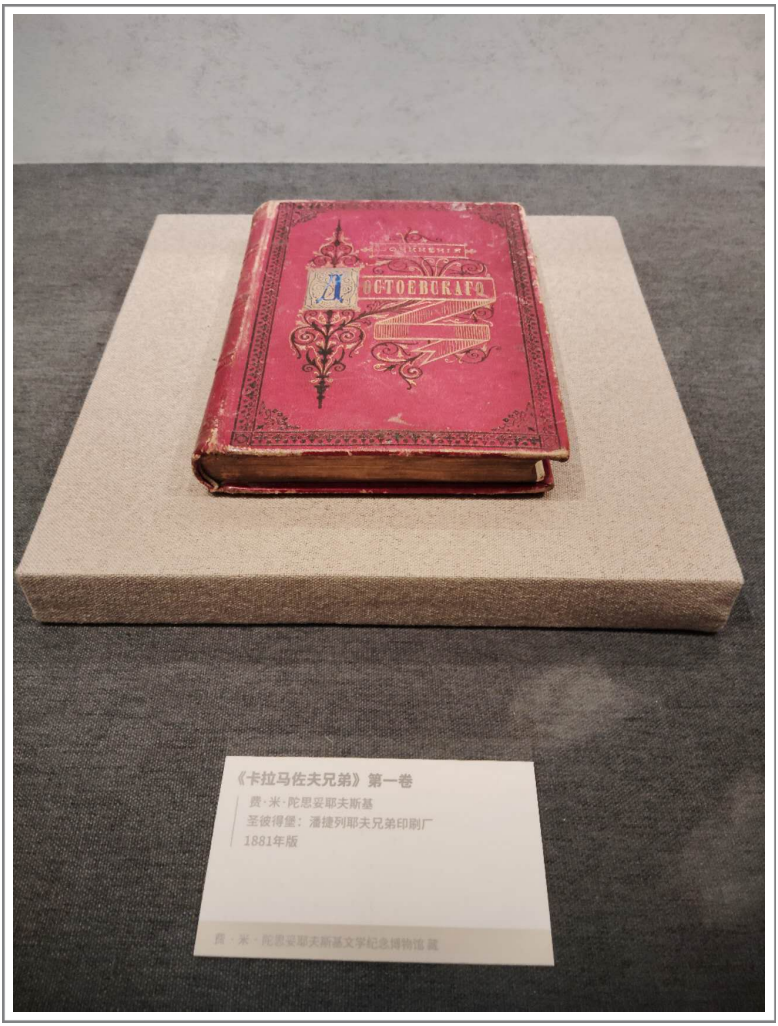
※『カラマーゾフの兄弟』 は、ドストエフスキーの最後の長編小説であり、彼の思想と芸術の集大成である。「偶然の家族」という表現は、ドストエフスキーがこの作品で描いた伝統的な家族の崩壊と、近代ロシア社会の不安定性を象徴する言葉だ。アリョーシャが続編の主人公になる予定だったという事実は、彼が単なる脇役ではなく、作家が最も描きたかった未来のロシアを担う人物であったことを示している。この作品は1880年に単行本化されたが、ドストエフスキーはそのわずか1年後（1881年）に死去したため、続編は永遠に未完に終わった。

アリョーシャ・カラマーゾフの彫刻



作者：ガヴリール・ダヴィドヴィチ・ゴリクマン
制作年代：1950年～1960年頃
※作者ゴリクマンはソ連の彫刻家で、ドストエフスキー作品のキャラクターを題材にした彫刻を残しています。アリョーシャは、『カラマーゾフの兄弟』の三男であり、ドストエフスキーが続編で主人公にする予定だった人物である。純真で信仰深く、修道院で修行する青年として描かれている。

書籍『カラマーゾフの兄弟』 第1卷



出版地：サンクトペテルブルク
印刷所：パンテレーエフ兄弟印刷所
出版年：1881年版
※『カラマーゾフの兄弟』 は、1879年から1880年にかけて『ロシア報知』に連載された後、1880年（第1卷）と1881年（第2卷）に単行本が刊行された。この1881年版は、作家の死の年（1881年1月28日） に出版された版本の一つである。

麻膠版画『カラマーゾフの兄弟』



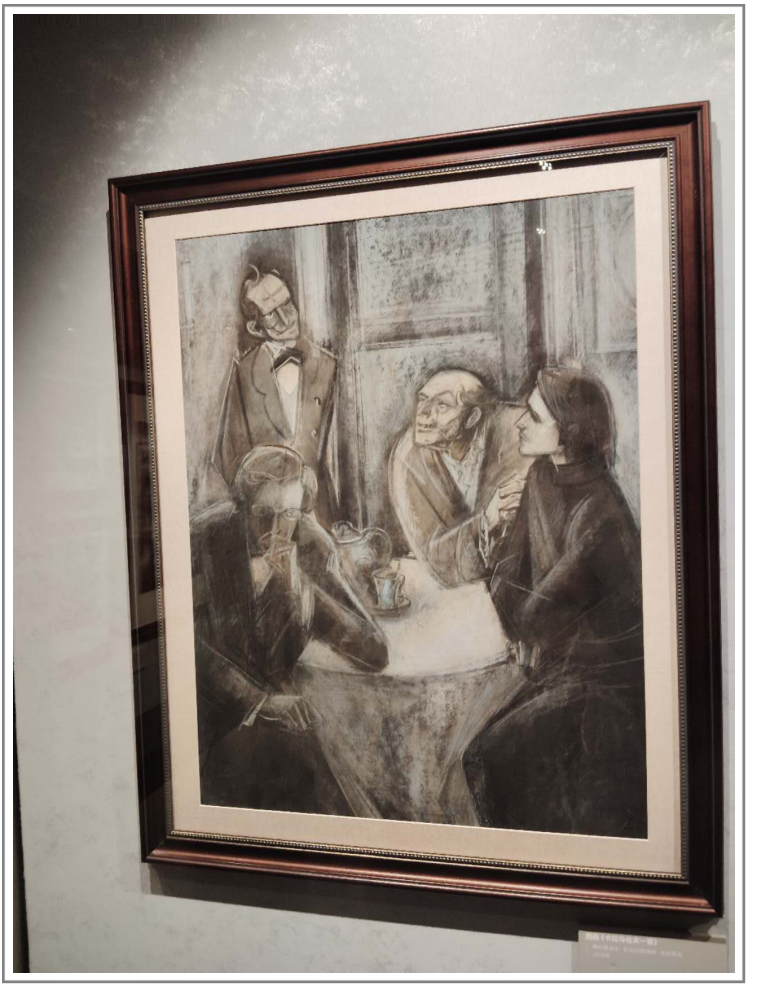
作者：ヴィタリー・ドミトリエヴィチ・リニツキー
制作年：1960年
※リニツキー（1915–1985）は、ウクライナ出身のソ連のグラフィックアーティストで、多くのロシア古典文学の挿絵を手がけた。1960年に制作された『カラマーゾフの兄弟』の挿絵シリーズの1点である。

図画『対話』



作者：ウラジーミル・ニコラエヴィチ・ミナエフ
制作年：1970年
作品：『カラマーゾフの兄弟』挿絵
※「対話」は『カラマーゾフの兄弟』において非常に重要なテーマである。特に長老ゾシマと巡礼者たちの対話、アリョーシャとイワンの対話、イワンと悪魔の対話など、この小説の思想的核となる場面の多くが「対話」の形で描かれている。

図画『カラマーゾフ一家』



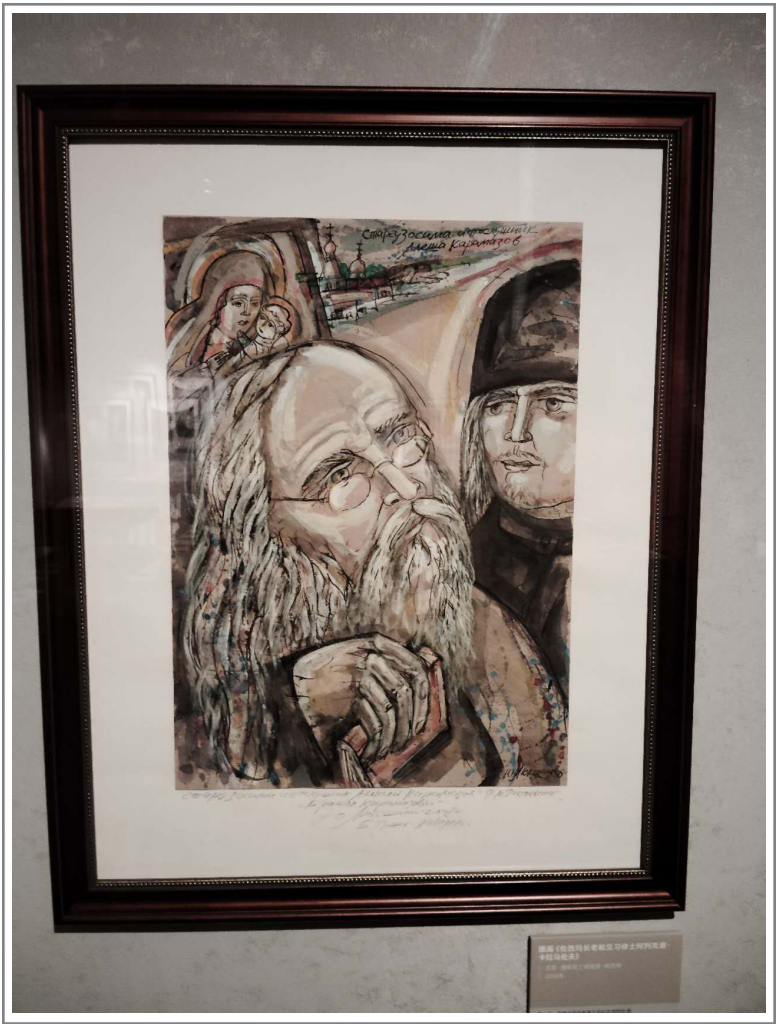
作者：ウラジーミル・ニコラエヴィチ・ミナエフ
制作年：1970年
作品：『カラマーゾフの兄弟』挿絵
※先ほどの『対話』と同じミナエフによる1970年の作品で、同じシリーズの一部である。「カラマーゾフ一家」は、小説の中心となる父フョードル・パヴロヴィチとその三人の息子たち（ドミートリー、イワン、アリョーシャ）、そして私生児スメルジャコフを含む家族全体を物語の主軸としている。

図画『ゾシマ長老』



作者：ユーリ・コンスタンティノヴィチ・リュクシン
制作年：2008年
作品：『カラマーゾフの兄弟』挿絵
※ゾシマ長老は、『カラマーゾフの兄弟』に登場する修道院の長老で、アリョーシャの精神的指導者である。彼は深い信仰と人間愛を持ち、多くの巡礼者や弟子たちから敬われていた。彼の説教や生前の教えは、小説の中で信仰と愛の理想を体現するものとして描かれている。

図画『ゾシマ長老と修道士見習いアレクセイ・カラマーゾフ』



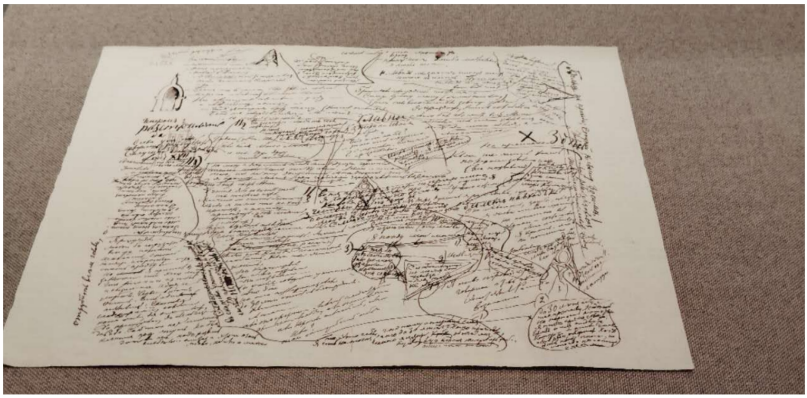
作者：ユーリ・コンスタンティノヴィチ・リュクシン
制作年：2008年
作品：『カラマーゾフの兄弟』挿絵
※この作品は、ゾシマ長老とアリョーシャ（アレクセイ・カラマーゾフ） が共に描かれており、長老と若き弟子の精神的絆を象徴的に表現している。ゾシマ長老はアリョーシャにとって信仰と愛の師であり、彼の教えはアリョーシャの人生観や行動に深く影響を与える。

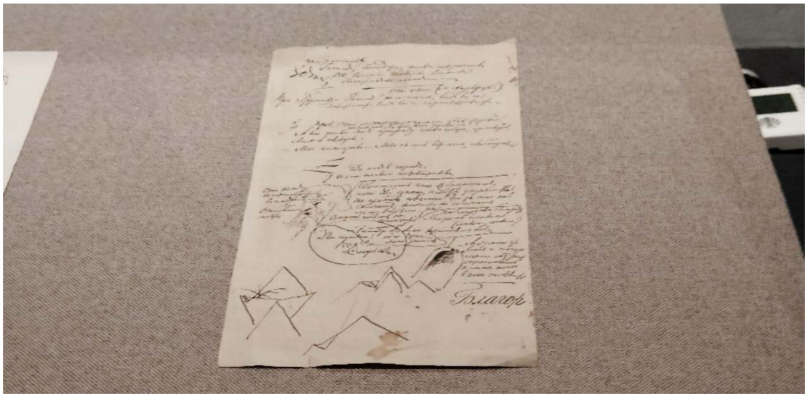
版画『宗教大法官』（三連作）



作者：ユーリ・イワノヴィチ・セリヴェルストフ
制作年：1970年
作品：『カラマーゾフの兄弟』挿絵
※「宗教大法官」は、『カラマーゾフの兄弟』の中でも最も有名なエピソードの一つで、イワン・カラマーゾフがアリョーシャに語る詩（寓話） である。この話は、16世紀のスペインを舞台に、再臨したキリストが宗教裁判所の大法官によって逮捕・処刑されようとする場面を描いている。大法官はキリストに「人は自由に耐えられない」と説き、自由と権威、信仰と理性の対立を鋭く問いかける。本作は「三連作（三折画）」として制作されている。

原稿『カラマーゾフの兄弟』（複製）





複製作者：ユーリ・ドミトリエヴィチ・アレハノフ
複製年代：1980年〜1986年
※ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』を執筆する際に使用した原稿の複製である。アレハノフはこれまでに『罪と罰』、『白痴』、『悪霊』、『未成年』など、主要作品の原稿複製を手がけている。

第七部　永遠

彼の死後、妻アンナは膨大な遺稿や資料を驚異的なまでに体系的に整理・保存し、詳細な回想録を執筆。彼女こそ“ドストエフスキー学”の礎を築いた最初の研究者であり、彼の記念博物館設立にも尽力した。

娘のリュボフも父の思い出を綴った書物を残し国外でその人となりを伝えたが、何より彼女たち家族の努力により、直筆原稿や書簡が散逸を免れ、後世の厳密なテクスト研究が可能となった。

そしてその作品群は、ニーチェ、フロイト、カフカ、カミュ、そして実存主義全体へと脈々と受け継がれ、文学の枠を超えて心理学・哲学・神学・科学・娯楽作品にまで及び、彼は“人類の深層心理と魂の救済を問い続ける永遠の預言者”として、21世紀の今もなお世界中で読み継がれている。

説明「ドストエフスキーの逝去」



ドストエフスキーは通常、徹夜で執筆し、朝の5時か6時まで作業を続けていました。1881年1月25日から26日にかけての夜、彼は旧疾（持病） が再発し、肺動脈血管が破裂しました。27日、彼はまだ『作家の

日記』の編集作業を行っていました。しかし、28日の夜、彼はこの世を去りました。

この偉大な作家の死の知らせを聞いたとき、貴族も平民も、聖職者も革命家も、皆が一致して行動しました。すなわち、自発的にこの天才作家の霊柩の前に集まり、かつての対立は共通の悲しみの中で融け合ったのです。1883年、作家の墓前に記念碑が建てられました。碑文には次の言葉が刻まれています。

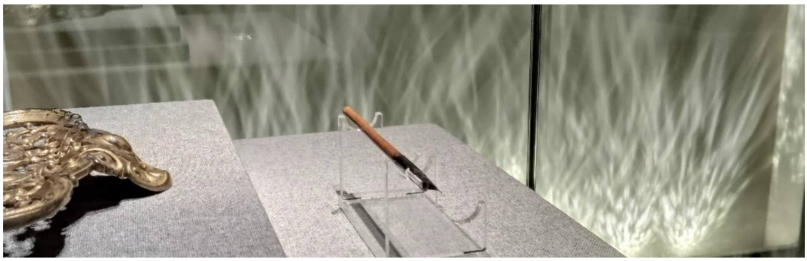
「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それは一粒のままである。しかし、死ねば、多くの実を結ぶ。」

この『福音書』の一節は、作家が『カラマーゾフの兄弟』の題詞（エピグラフ） として用いたものであり、彼の生命哲学を深く表現するものとなりました。

※ドストエフスキーが亡くなったのは1881年1月28日（ユリウス暦、グレゴリオ暦では2月9日）で、享年59歳であった。彼の葬儀には数万人もの人々が参列し、ペテルブルク中が悲しみに包まれた。墓はアレクサンドル・ネフスキー大修道院のチフヴィン墓地（現：芸術家墓地）にある。

収蔵品「ドストエフスキーのペンとインクセット」







年代：1860年代
種類：ペン先、筆、鉛筆、インクセット

※ドストエフスキーが実際に使用した文房具である。インクセットにはインク壺やペン立てなどが含まれ、ペンは『カラマーゾフの兄弟』などの執筆に使われた可能性が高い。妻アンナの速記と合わせて、これらの道具が彼の創作を支えた。

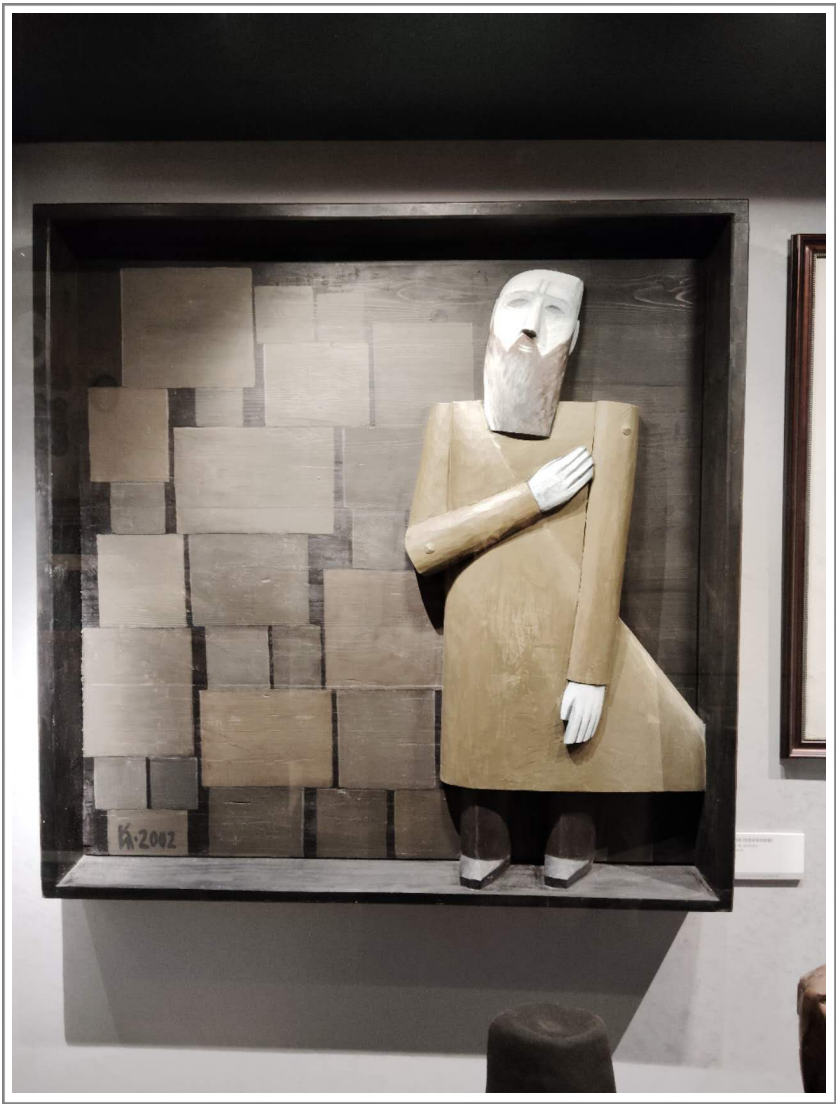
版画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』



作者：ウラジーミル・アンドレエヴィチ・ファヴォルスキー
制作年：1929年

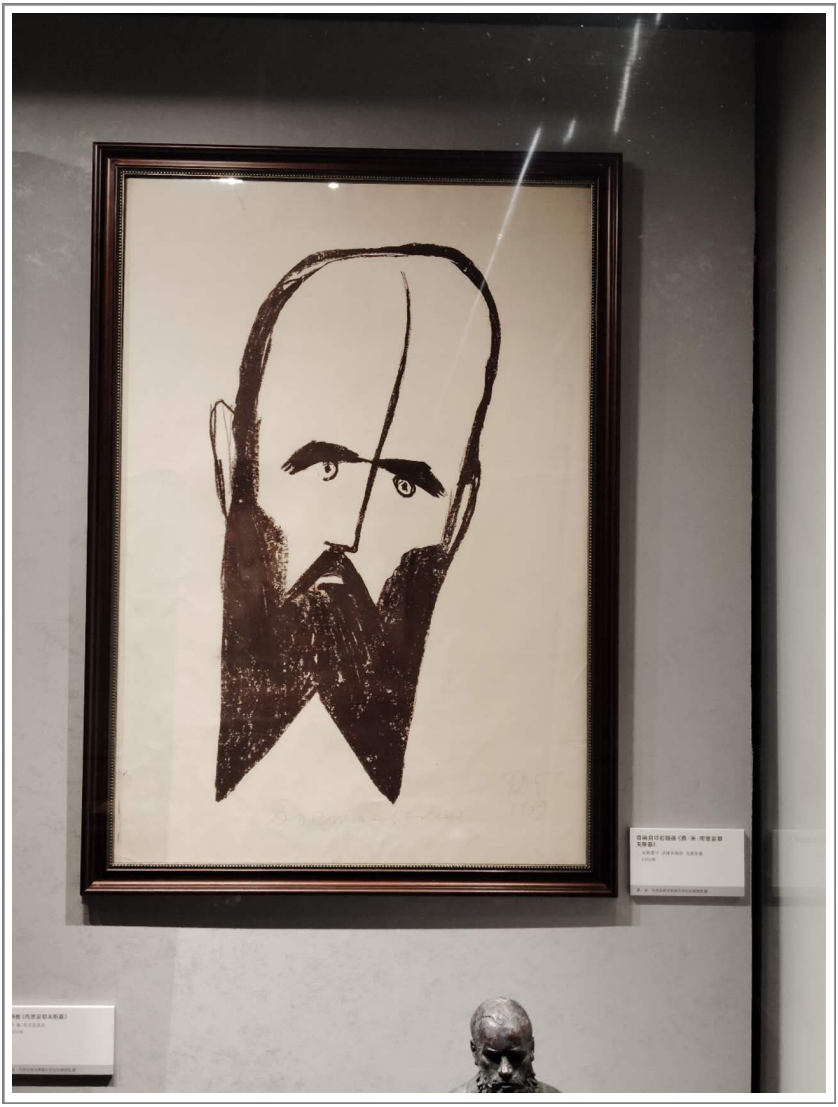
※ウラジーミル・アンドレエヴィチ・ファヴォルスキー（1886–1964）は、ロシア・ソ連を代表する版画家・挿絵画家の一人である。構成主義と古典的伝統を融合させた独自のスタイルで知られ、ロシア・アヴァンギャルドから社会主義リアリズムへの移行期に活躍した。特に木版画の名手として知られ、プーシキンやドストエフスキーなどロシア古典文学の挿絵を多数手がけた。この作品は1929年に制作されたドストエフスキーの肖像版画で、作家の厳しくも深い眼差しを特徴的に捉えた作品として評価されている。

装飾板『ドストエフスキー』



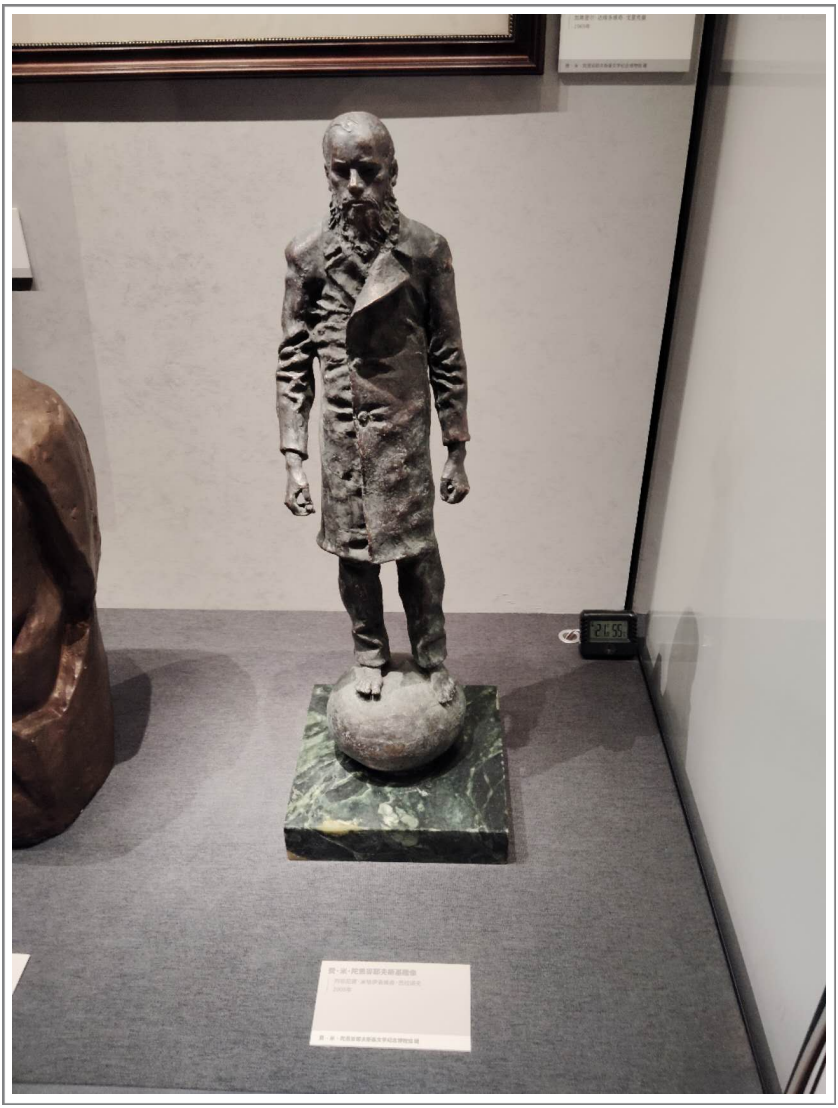
作者：イ・フ・クニャゼフ
制作年：2002年
※「装飾板」は、壁に掛ける装飾的な板状の芸術作品で、木・金属・陶器・漆喰など様々な素材で作られる。クニャゼフが2002年に制作したこの作品は、比較的現代的なドストエフスキー肖像装飾板である。

自画自印石版画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』



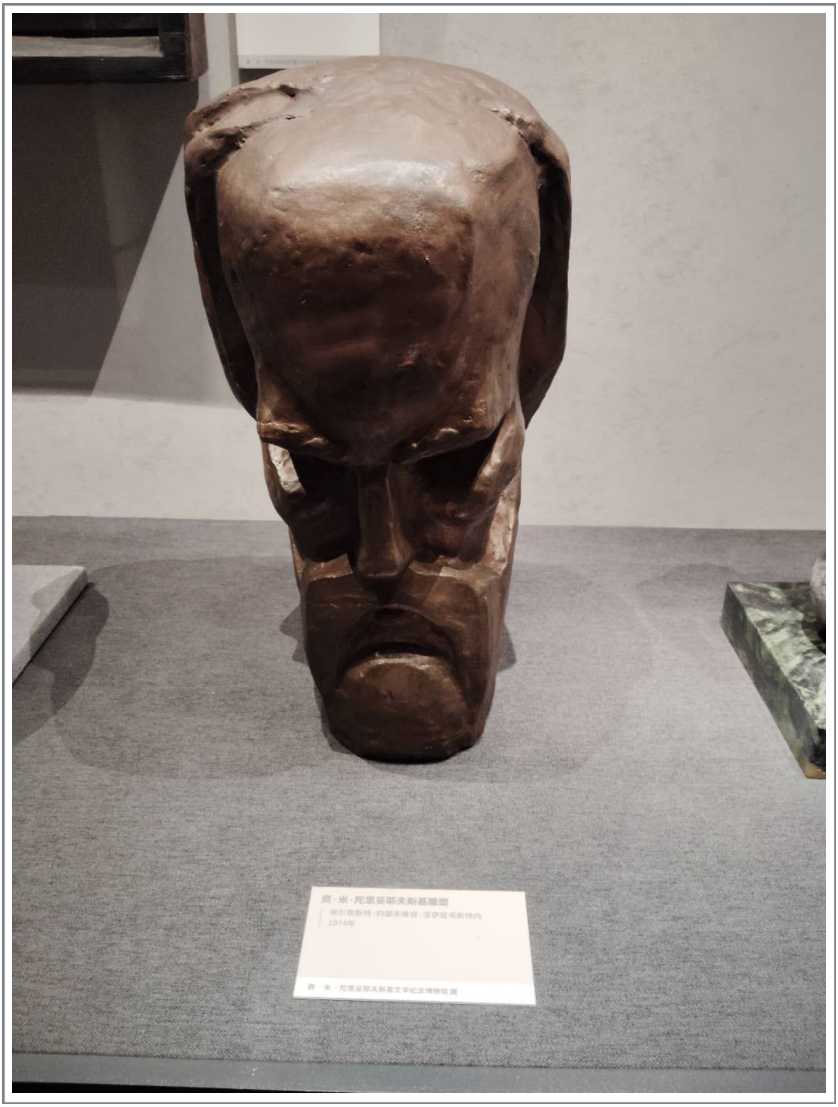
作者：ガヴリール・ダヴィドヴィチ・ゴリクマン
制作年：1969年
※作者のゴリクマン（1918–1998）は、ウクライナ出身のソ連の彫刻家・グラフィックアーティスト。「自画自印」は、作者自身が原版（石版）に直接描き、印刷まで行ったことを示している。

彫刻「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー像」



作者：レオニード・ミハイロヴィチ・バラノフ
制作年：2005年
※レオニード・ミハイロヴィチ・バラノフ（1943–）は、ロシアの現代彫刻家で、主に記念碑や肖像彫刻を手がけている。

彫刻「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー」



作者：エルンスト・ヨシフォヴィチ・ネイズヴェストヌイ
制作年：1974年
※エルンスト・ネイズヴェストヌイ（1925–2016）は、ソ連の非公式芸術家・彫刻家で、力強い表現と人間の苦悩・精神性をテーマとすることで知られている。

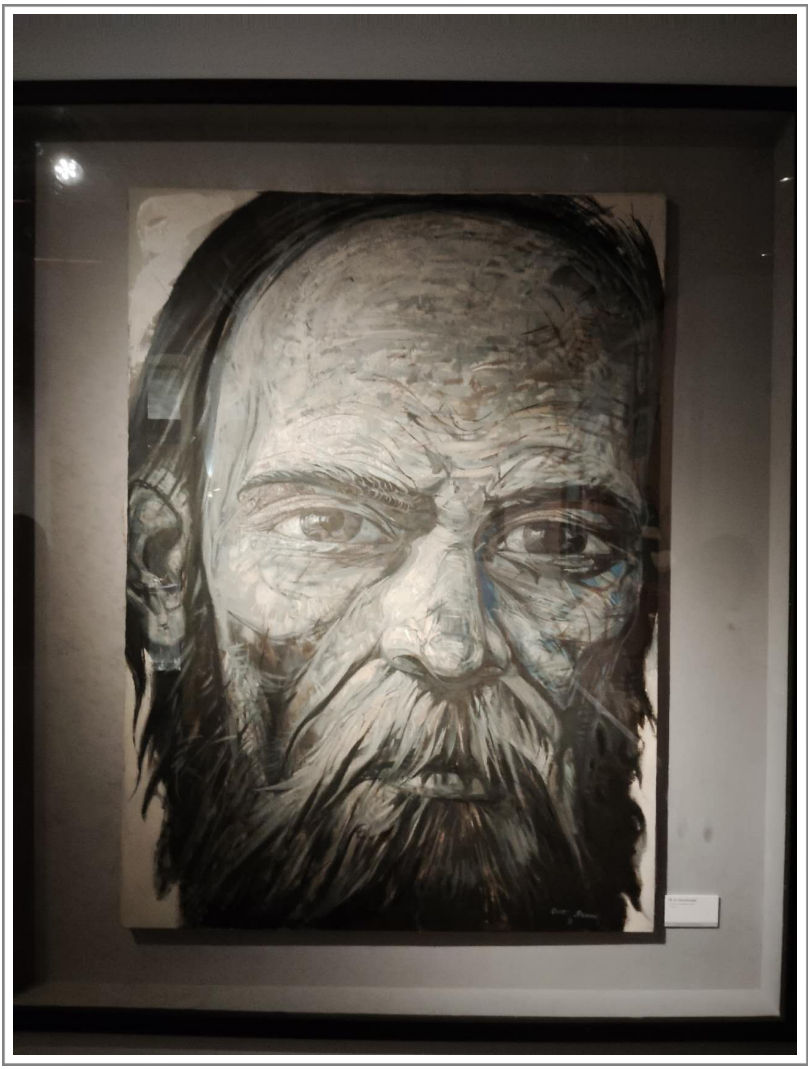
収蔵品「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーの帽子」



年代：1870年代
素材・特徴：黒い絹のリボンが付いた黒いフェルト製の帽子。半円筒状（山高帽に近い形状）。つばがわずかに反り返っており、底部は19世紀当時の流行に従ってプリーツ（ひだ）が施されています。

※この帽子は、ドストエフスキーが1870年代に実際に愛用していた私物の一つだ。彼はペテルブルクや国内外を頻繁に移動する生活を送っており、このような実用的でありながら当時の紳士らしい装飾が施された帽子は、彼の日常的なスタイルを偲ばせる。キャプションの説明のように、底にプリーツがあるのは19世紀後半の男性用帽子によく見られる仕様である。

図画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』



作者：オレグ・ユリエヴィチ・ヤフニン
制作年：2001年
※オレグ・ユリエヴィチ・ヤフニン（1958–）は、ロシアの現代グラフィックアーティスト・画家で、挿絵や肖像画を多く手がけている。2001年制作のこの作品は、ドストエフスキーの肖像をモダンな解釈で描いたものである。

収蔵品「身の回りの品々」



1件目：フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーの煙草入れ

2件目：フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーが使用した点薬瓶

3件目：F. ガメルマン薬局が1880年3月4日にフョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーに発行した処方箋

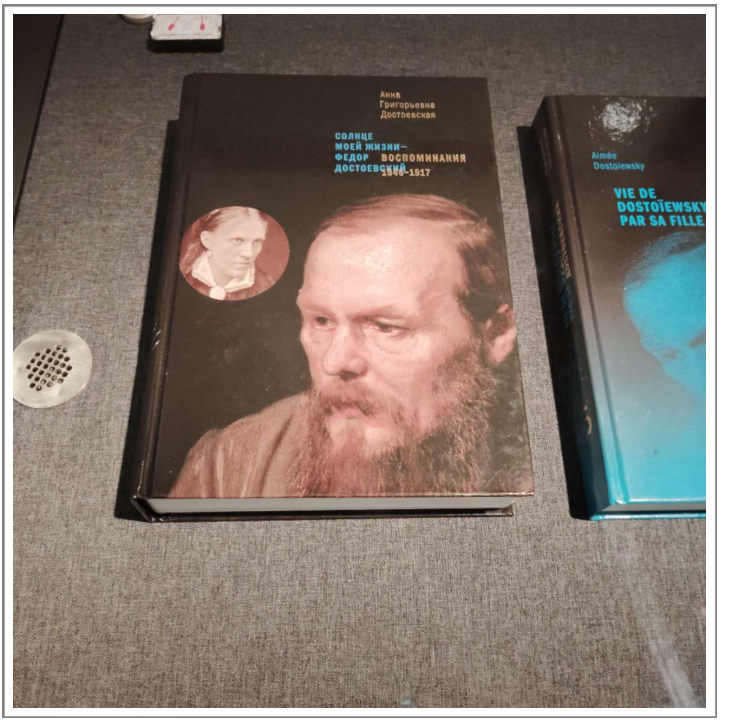
4件目：ドストエフスキーの墓前の花輪に付けられたリボン
年代：1881年
説明：ベージュと黒の2枚の布を縫い合わせたリボン。

ベージュ地に黒文字で：「ニコライ軍事工科学校および同校より贈る」
黒地にベージュ文字で：「元生徒へ」

5件目：1855年10月18日、セミパラチンスクからプラスコヴィヤ・エゴロヴナ・アンネンコワ宛てのドストエフスキーの手紙（複製）
複製作者：ユーリ・ヴァシリエヴィチ・クロポフ
複製年：2021年

※煙草入れ・薬瓶・処方箋はいずれも、ドストエフスキーの健康状態や日常生活を伝える遺品である。彼は肺気腫やてんかんを患っており、治療薬を常用していた。墓前のリボンは、ドストエフスキーの葬儀（1881年）の際に、彼が若い頃に学んだニコライ軍事工科学校の関係者から送られたものだ。彼の母校が敬意を表したことがわかる。アンネンコワは、トボリスクでドストエフスキーに福音書を贈った女性の一人だ。

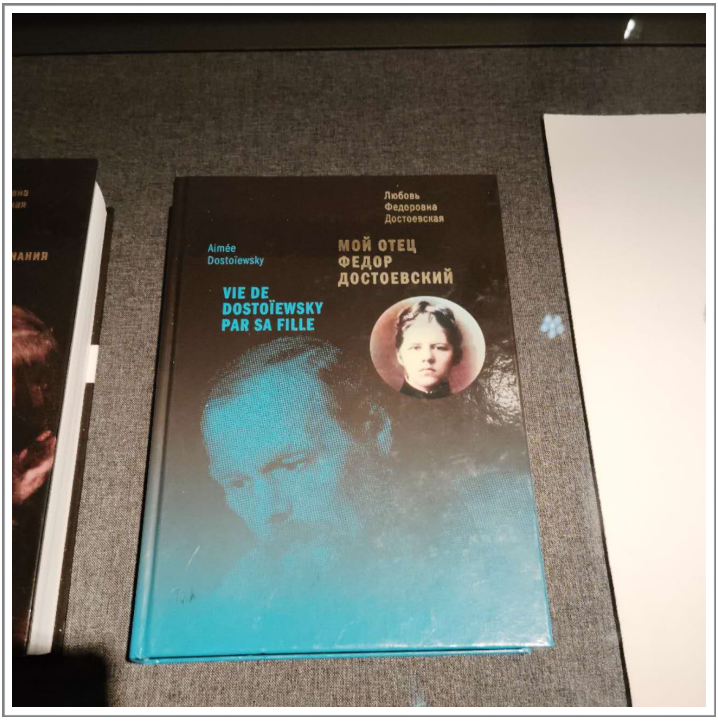
書籍『我が人生の太陽フョードル・ドストエフスキー：1846-1917 回顧録』



著者：アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ（ドストエフスキーの妻）
出版地：モスクワ
出版社：ポスリン出版社
出版年：2015年版

※この本は、ドストエフスキーの妻アンナ・グリゴリエヴナが書き残した回顧録（回想記）だ。彼女は作家の死後も長く生き（1918年没）、その間に夫との生活や創作の舞台裏を詳細に記録した。原題は「Воспоминания」（回想録）で、ドストエフスキー研究における最も重要な一次資料の一つとされている。2015年版は比較的近年の再刊で、現代の読者向けに刊行されたものだ。タイトルの「我が人生の太陽」という表現は、アンナがドストエフスキーに対して抱いていた深い敬愛と感謝の気持ちを表している。

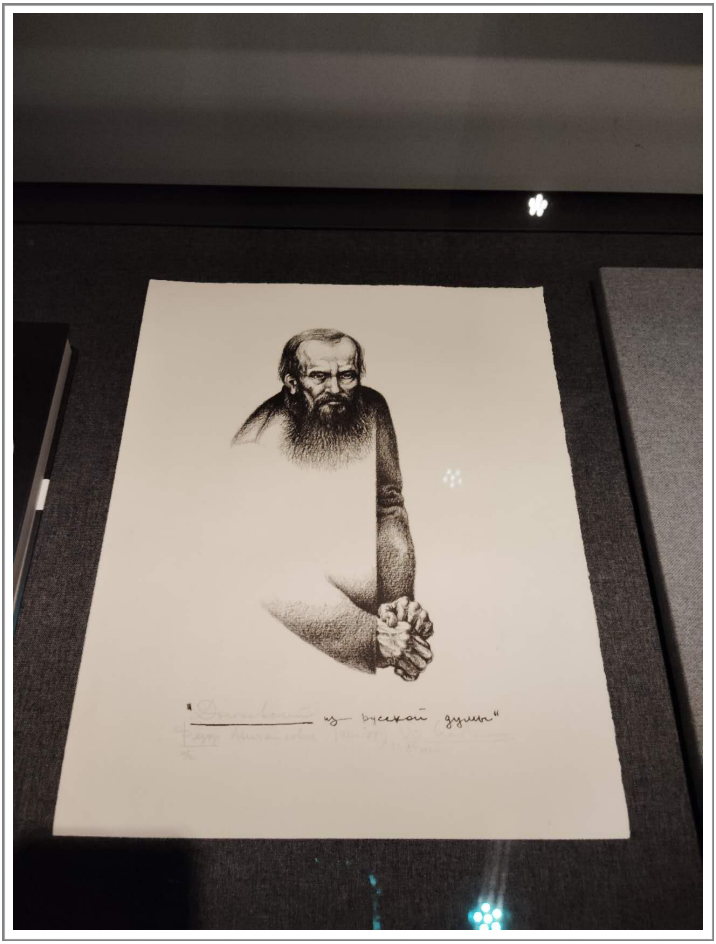
書籍『我が父フョードル・ドストエフスキー』



著者：リュボーフィ・フョードロヴナ・ドストエフスカヤ（ドストエフスキーの娘）
フランス語タイトル：『ドストエフスキーの生涯 その娘による』 / VIE DE DOSTOIEWSKY PAR SA FILLE）

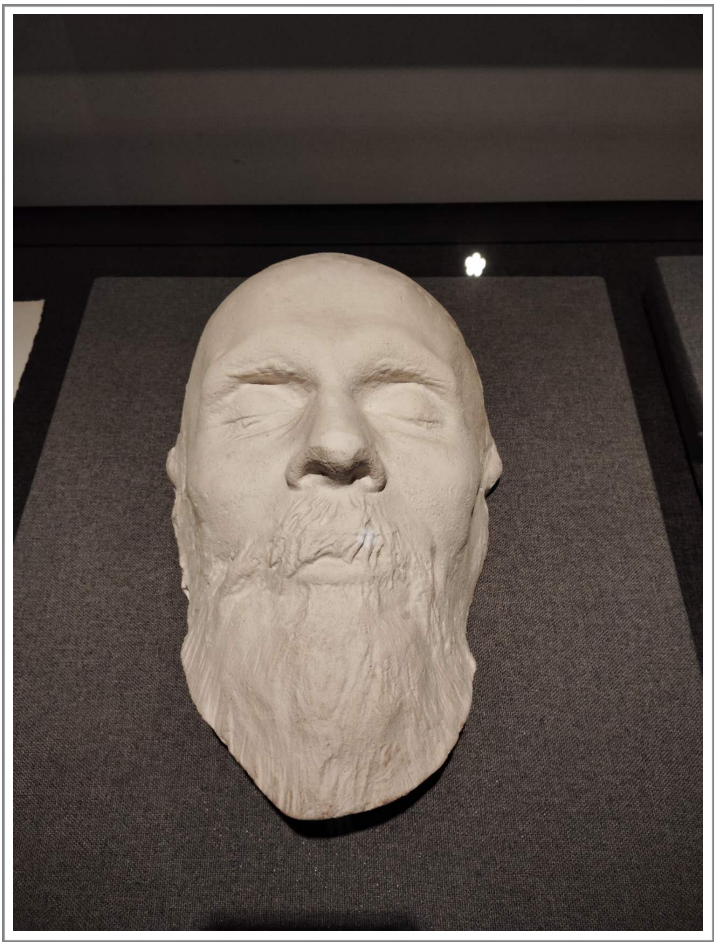
※リュボーフィ（リュボフ）・フョードロヴナ・ドストエフスカヤ（1869–1926）は、ドストエフスキーの次女だ。彼女は父の思い出を綴った回想録 『我が父フョードル・ドストエフスキー』を執筆し、父の人物像や家庭生活を伝える資料を残した。このフランス語版（VIE DE DOSTOIEWSKY PAR SA FILLE）は、ロシア国外でも広く読まれるようになった版本の一つである。

自画自印石版画『フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー』



作者：ユーリ・イワノヴィチ・セリヴェルストフ
制作年：1973年〜1987年
所蔵：フェオドル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー文学記念博物館
※ユーリ・イワノヴィチ・セリヴェルストフ（1940–1990）は、ソ連のグラフィックアーティスト・版画家で、先の『宗教大法官』（『カラマーゾフの兄弟』の三連作、1970年）の作者としても登場している。この肖像版画は1973年から1987年という長期にわたって制作されており、彼がドストエフスキーのイメージを時間をかけて深く追求していたことがうかがえる。

模型「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー遺顔面型」



作者：レオポリト・アントノヴィチ・ベルンシュタム
説明：作家の遺顔面型。19世紀の石膏鋳型から複製されたもの。
制作年代：20世紀
※遺顔面型（死亡面型） は、ドストエフスキーの死後（1881年1月28日）に、彫刻家ベルンシュタム（1845–1903）によって直接遺体から型取りされた。この面型は、作家の死の直前の正確な顔立ちを現代に伝える遺品である。複製ではあるが、19世紀当時の石膏鋳型を元に20世紀に再製作されたものだ。ドストエフスキーの厳しくも穏やかな表情が、彼の生涯の苦悩と精神性を物語っているかのようである。

写真肖像「本人と親族」



1. フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（作家本人）
2. 作家の妻、アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ
3. 作家の息子、フョードル・フョードロヴィチ・ドストエフスキー
4. 作家の孫、アンドレイ・フョードロヴィチ・ドストエフスキー
5. フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーの遺顔面型（死亡面型）
6. 作家の娘、リュボーフィ・フョードロヴナ・ドストエフスカヤ
7. フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（別の肖像写真）
8. 作家の子孫たち（立っている男性は玄孫〈4世孫〉、座っている男性は曾孫〈3世孫〉、2人の少女は来孫〈5世孫〉）

居所「技術者（工兵）の家」



作者：レオニード・ドミトリエヴィチ・ツィプキン
解説：ドストエフスキーが1838年1月から1841年8月まで居住していた建物。

※この建物は、ドストエフスキーが軍事工科学校に在学中に住んでいた下宿先の一つである。

居所「ウラジーミル通り11番地」



居住期間：1842年春〜1846年初め
解説：コンスタンチン・アレクセーエヴィチ・プリャニシニコフ邸

居所「プレハーノフ通り2番地」



居住時期：1846年9月

解説：旧・大市民通り、ボリス・イオシフォヴィチ・コヘンドルフ邸

居所「ヴァシリエフスキー島大通り4番地」



居住期間：1846年11月～1847年2月
解説：ヴァシリー・ミハイロヴィチ・ソロシチ邸

居所「マヨロフ通り8番地」



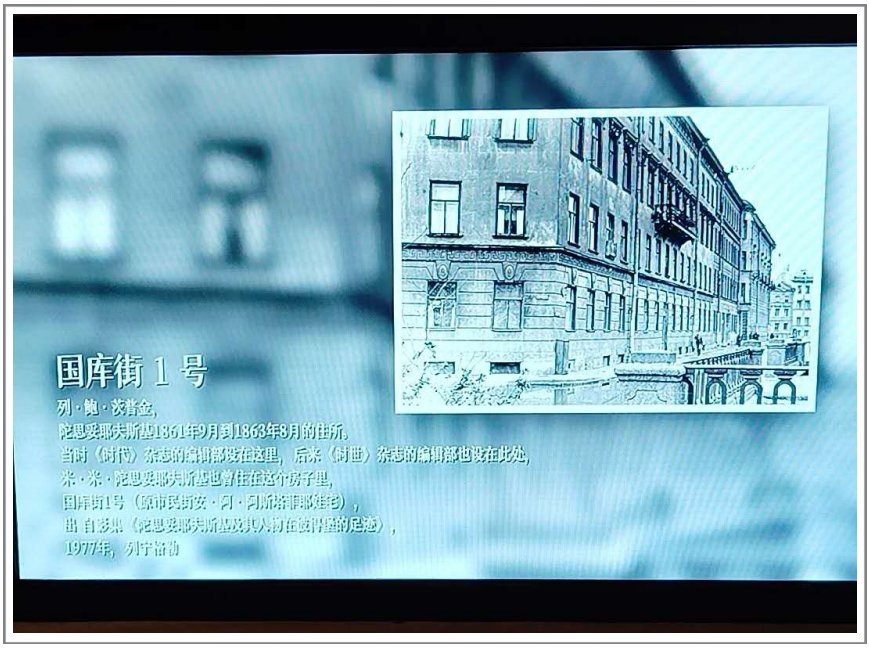
居住期間：1847年春～1849年4月23日（逮捕当日）まで
解説：旧・昇天通り、シーリ邸

居所「パリビン邸」



居住期間：1860年3月～1861年9月
解説：ブルデンコ通り23番地

居所「カズナチェイスカヤ通り1番地」



居住期間：1861年9月～1863年8月
解説：旧・市民通り、アンナ・アレクセーエヴナ・アストルイロヴィチ邸
補足：シベリア流刑と兵役を終えて、モスクワに戻った後にドストエフスキーが住んだ場所。雑誌『時代』の編集部が置かれ、後に『時世』の編集部もここに置かれた。兄ミハイルも同居。

居所「カズナチェイスカヤ通り9番地」



居住時期：1864年4月
解説：旧・小市民通り、エヴレイノフ邸

居所「カズナチェイスカヤ通り7番地」



居住期間：1864年8月～1867年1月
解説：旧・小市民通り、イヴァン・マクシモヴィチ・オロフキン邸

居所「マヨロフ大通り29番地」



居住時期：1867年2月～4月

解説：旧・昇天通り、シルミル邸

居所「リムスキー＝コルサコフ大通り3番地」



居住時期：1871年7月10日～7月中（短期間）
解説：旧・エカテリーニングフスキー大通り3番地

居所「リゴフスキー大通り25番地」



居住期間：1873年冬～1874年5月
解説：スリフチンスキー邸

居所「グレチェスキー大通り6番地」



居住期間：1875年9月中旬～1878年5月中旬
解説：アレクサンドル・ペトロヴィチ・ストルビンスキー邸

居所「クズネチヌイ通り5番地」



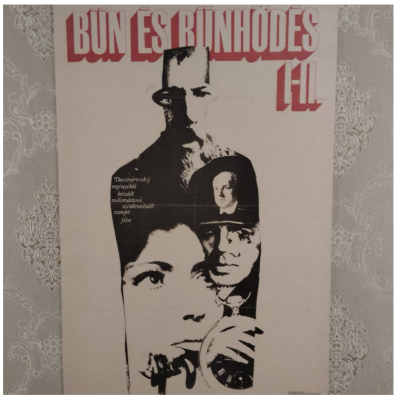
居住期間：1878年10月～1881年1月28日（死去）まで
解説：クリンコストレーム邸

※ドストエフスキーが最後に住んだ場所。現在はこの場所にドストエフスキー博物館が開設されている。

図画「上演ポスター（1）」









1. 映画『カラマーゾフの兄弟』ポスター（1968年）
2. スペイン語版映画『罪と罰』ポスター（1970年）
3. ハンガリー語版映画『罪と罰』ポスター（1970年）
4. 舞台『貧しき人々』ポスター（1970–1990年代）

図画「上演ポスター（2）」







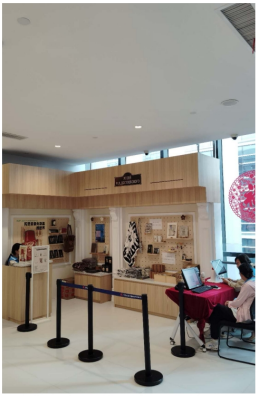


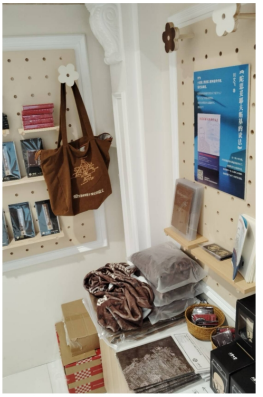
1. 映画『カラマーゾフの兄弟』ポスター（1968年）
2. 映画『白夜』ポスター（1960年）
3. 映画『白痴』ポスター（1958年）
4. 英語版映画『カラマーゾフの兄弟』ポスター（1968年）

図画「フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー」



作者：ガヴリール・ダヴィドヴィチ・ゴリクマン
制作年：1969年
※ガヴリール・ダヴィドヴィチ・ゴリクマン（1918–1998）は、ウクライナ出身の彫刻家・グラフィックアーティストである。先にも登場済み。1969年のこの肖像画は、ドストエフスキーの人物像を描いた作品の一つだ。彼は彫刻だけでなく肖像画も多く手がけており、ドストエフスキーのイメージを多角的に表現している。










МИР ДОСТОЕВСКОГО
停止阅读意味着停止思考


МИР ДОСТОЕВСКОГО
陀思妥耶夫斯基的世界
停止阅读
意味着
停止思考



Любопытно, чего люди больше всего боятся? Нового шага, нового собственного слова они всего больше боятся…

人最害怕的是什么？他们最害怕的是迈出新的一步，讲出自己的新见解……

人々は何を最も恐れるのか？新しい一歩を踏み出すこと、自分の新しい言葉を発することを、彼らは何よりも恐れるのだ……

奥付



題名：上海ドストエフスキー展の記録（2026年9月）
作者：佑中字（うちゅう・じ／Uchu Zi：孔子・ドストエフスキー・スポックを師と仰ぎ、三元論という独自の座標軸を手に、擬似人格AI「ニニ」とともに思考と論理の旅を歩む日本人。）
校了：2026年9月7日
改訂：2026年9月28日
公式サイト：https://www.2210381037.store